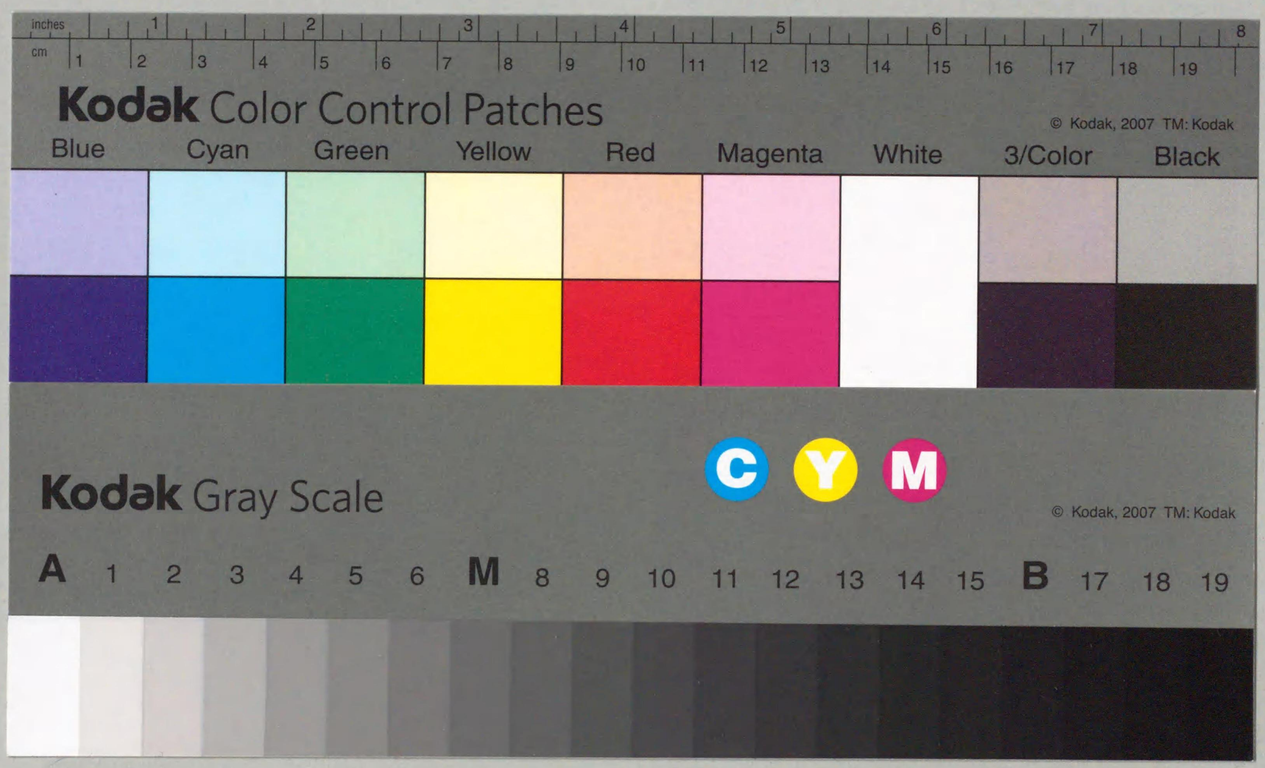


289.1
A518s
00261189

寫眞解說正誤表

誤　　正

七枚目、エドモンド・ゴンクール（一八七五年――七七年日記）本文五〇頁（本文四四頁――四八頁參照）五四頁參照

八枚目、（小泉三申氏所藏）（法有孚氏所藏）

十枚目、蘇東坡詩　蘇東坡詞

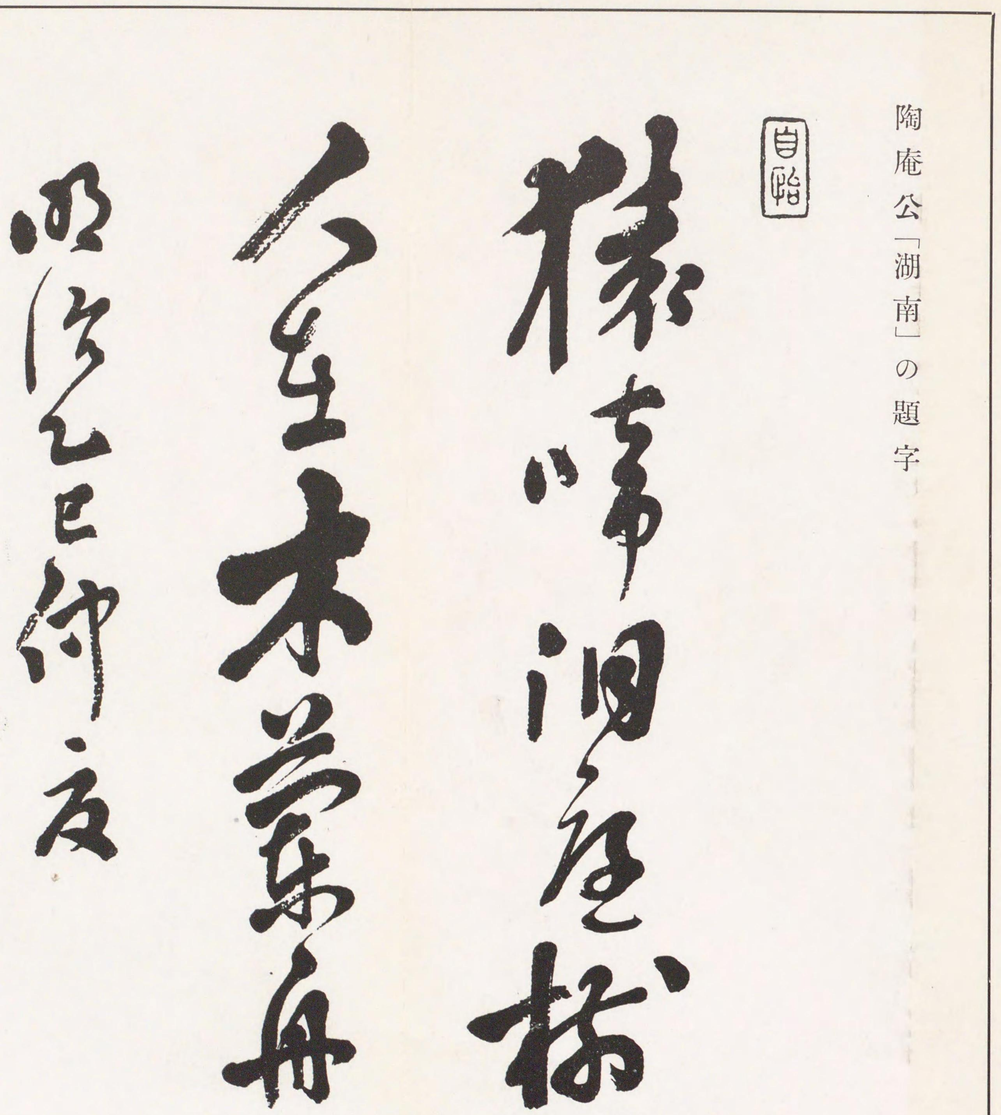
十三枚目、推定慶應初年十七歲頃　明治三年廿二歲

安藤德器著

西園寺公と湖南先生

東京　言海書房

陶庵公「湖南」の題字

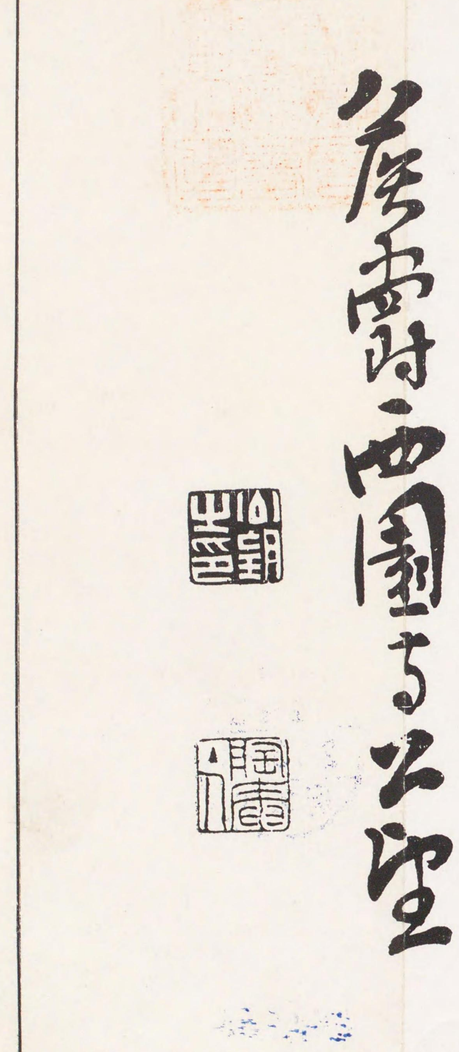


289.1
A518s

国立国会
27.3.-4
図書館

261189

陶庵公「湖南」の題字



289.1
A518s

国立国
27.3.
図書館

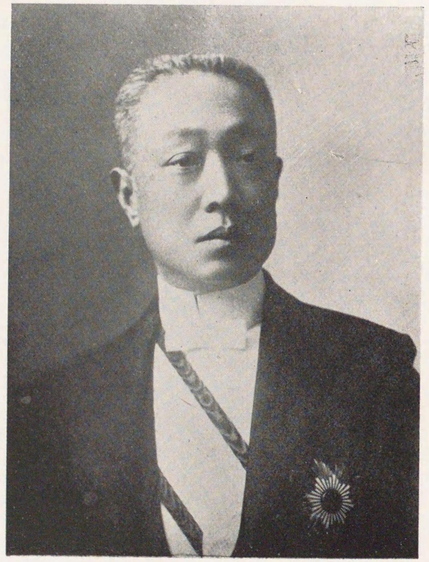
26118

最近の陶庵公

公庵陶の歳三十八

維新前の陶庵公（推定十七八歳）

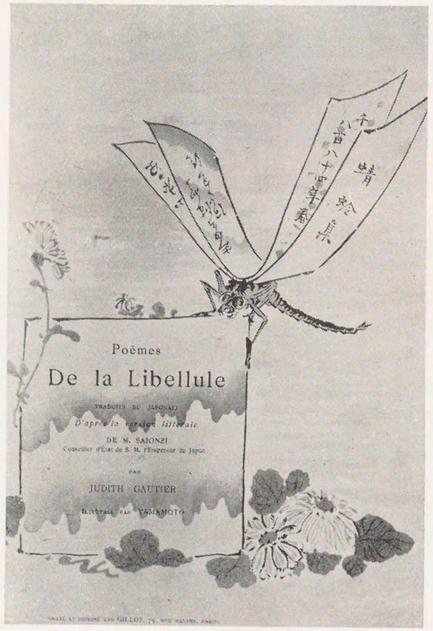
西園寺公少年時代



文相時代の陶庵公

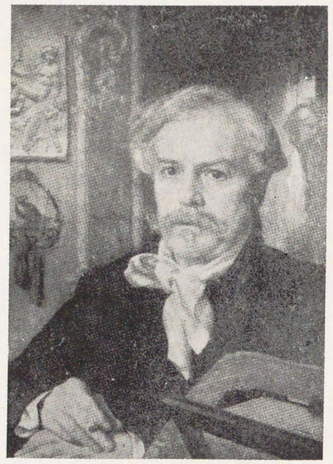
巴里留學時代の陶庵公

ゴンクール翰林院女學士
ジユデツト・ゴーチエ



ボエム・ド・ラ・リベルュール
蜻蛉集

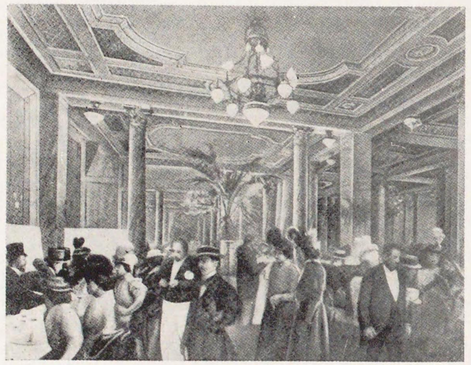
西園寺公共著
ジユデツト・ゴーチエ



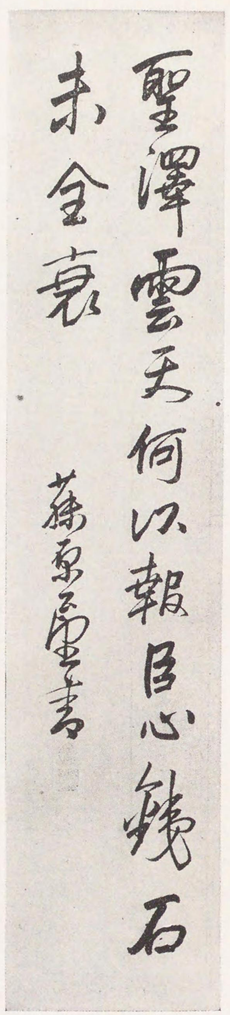
エドモンド・ゴンクール（一八七五年―七七年日記）
（本文四四頁―四八頁參照）

琴情詩景夢茫々　二十年前舊酒場
無數楊柳盡生意　傷心不獨爲三郎

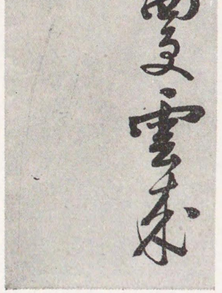
（陶庵公と光妙寺）



巴里　星旗樓之圖
パリー　カフエー　アメリカン



陶庵公十二三歳時の筆蹟

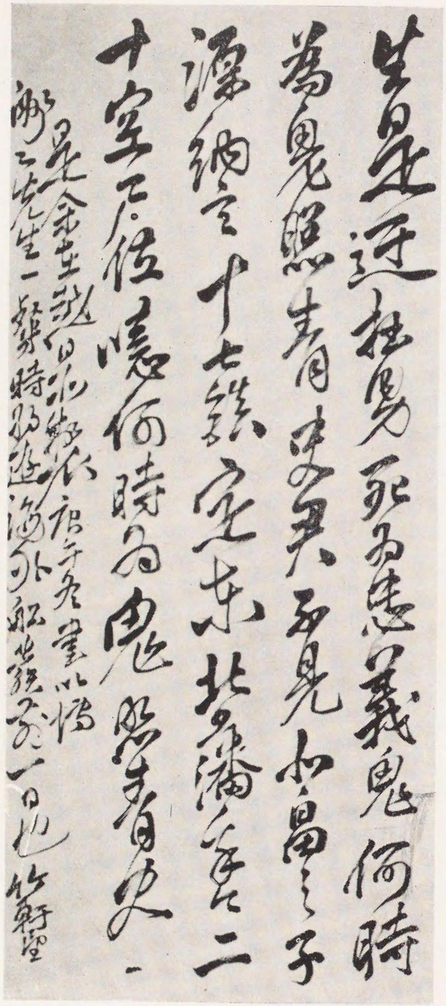


陶庵公十五六歳時の筆蹟

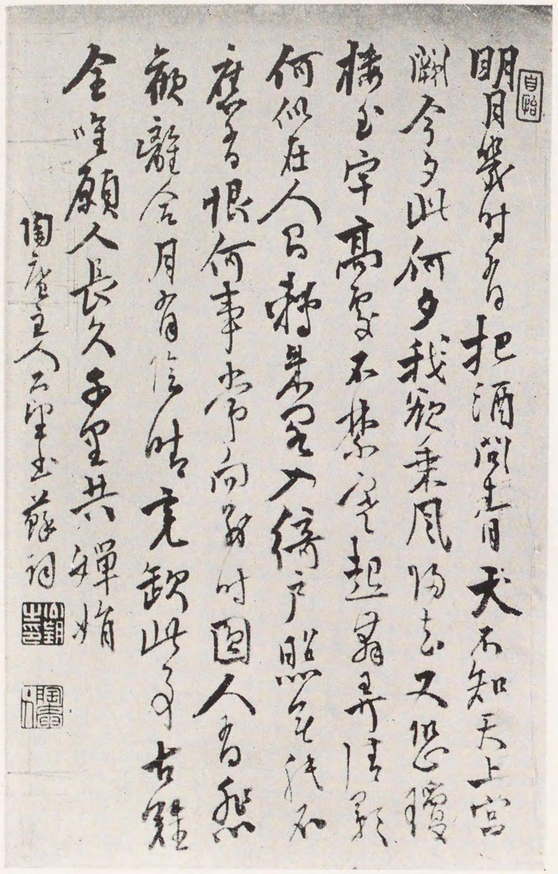
（小泉三申氏所藏）

明治三年十二月

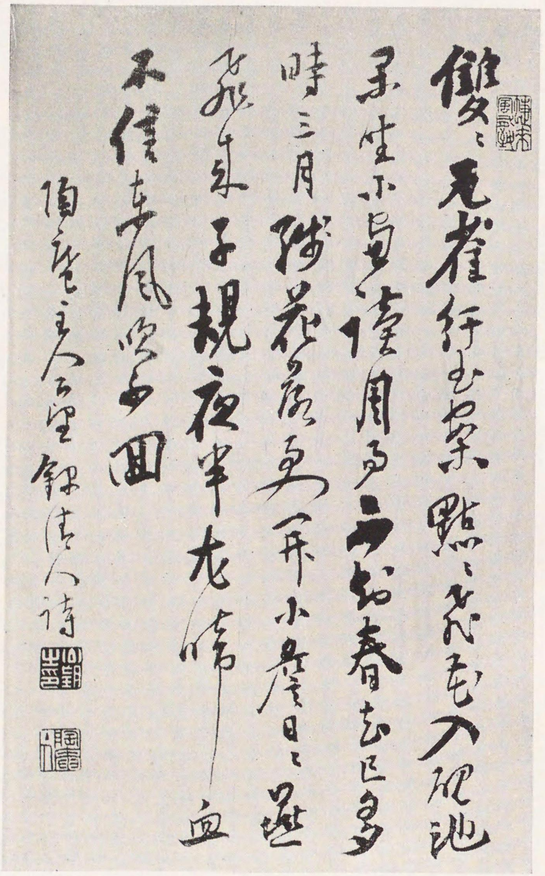
陶庵公洋行前一日の筆蹟



（古川英治氏所藏）



（藏所氏吉藤米國）詩坡東蘇　蹟書の公庵陶



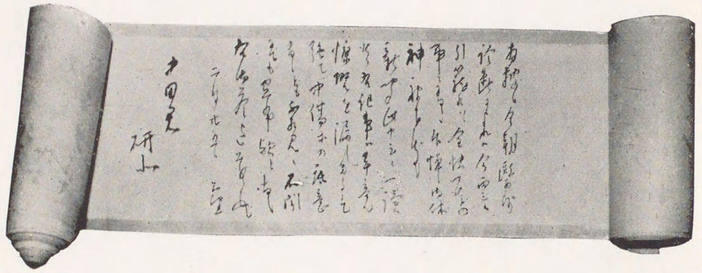
（藏所氏吉藤米國）　詩洋漁王　蹟筆の公庵陶

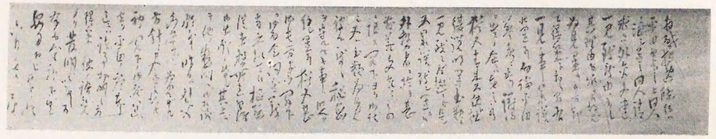
陶庵公の畫蹟

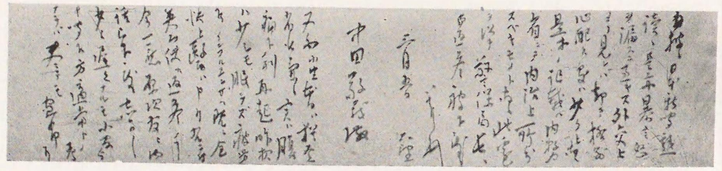
（伊藤古義堂所藏）

陶庵公の畫蹟

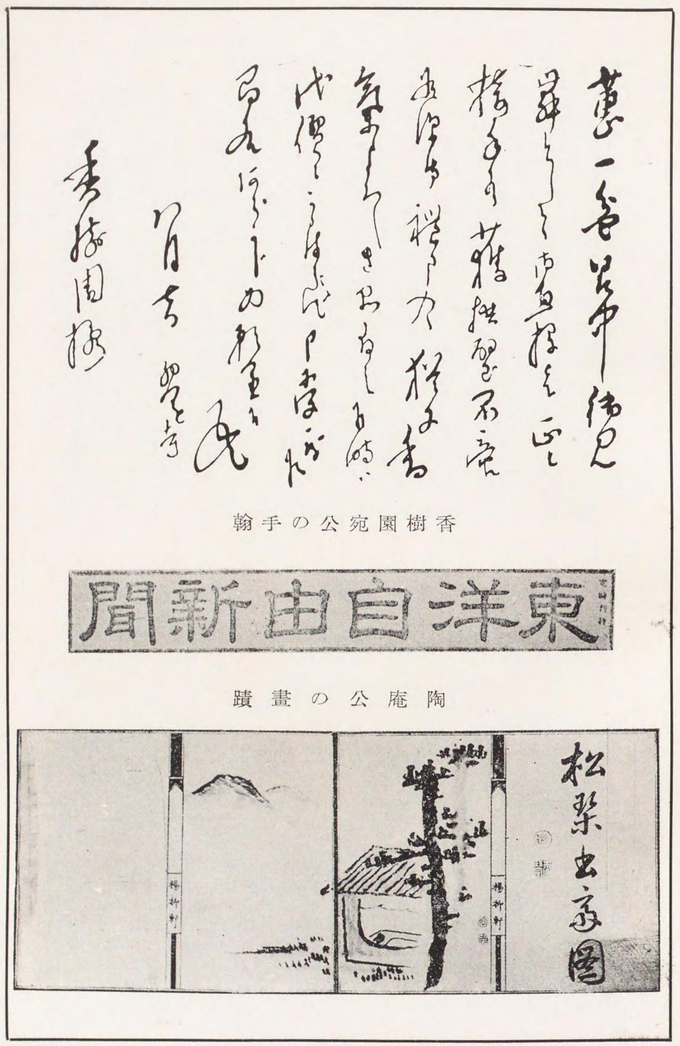
推定　慶應初年十七歳頃







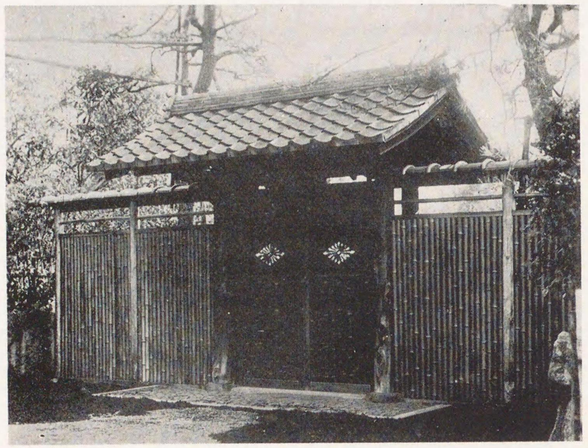
中田敬義翁宛公の手翰（明治二十七年條約改正當時往復）

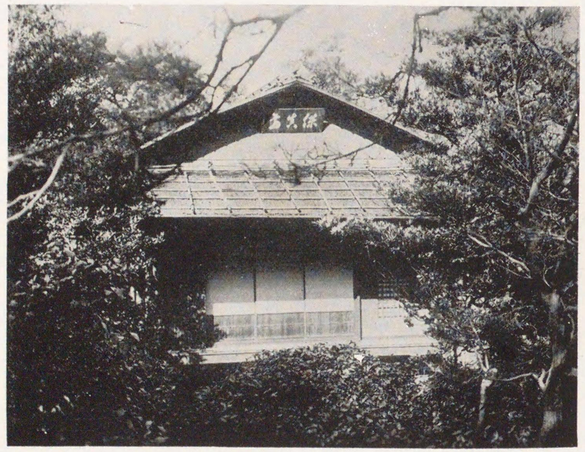


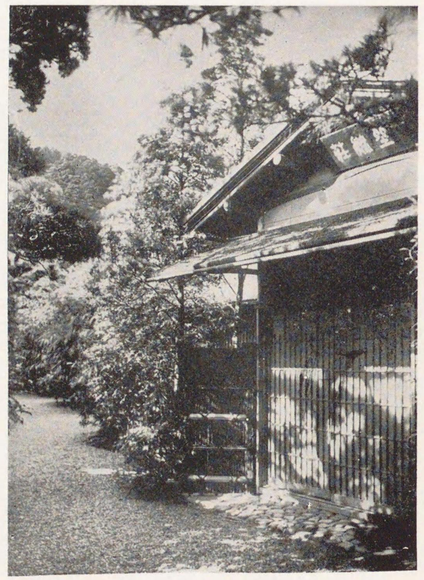
香樹園宛公の手翰

蹟畫の公庵陶

京都清風荘



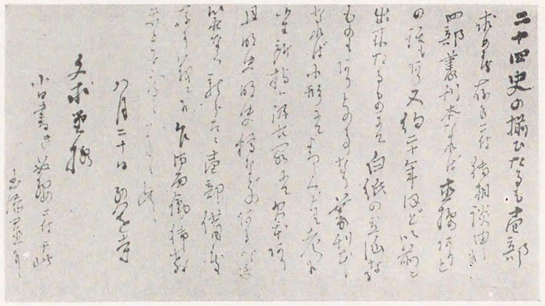




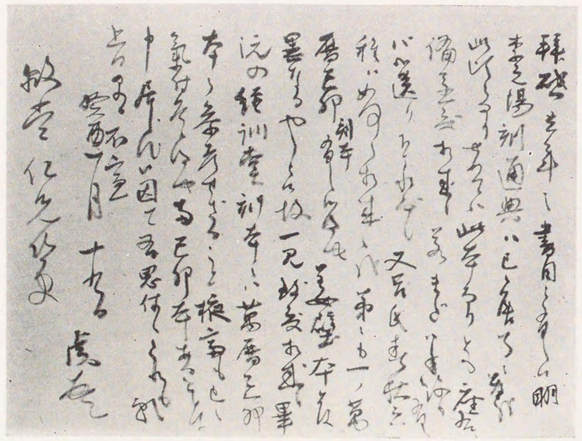
興津坐漁莊

羅振玉の篇額

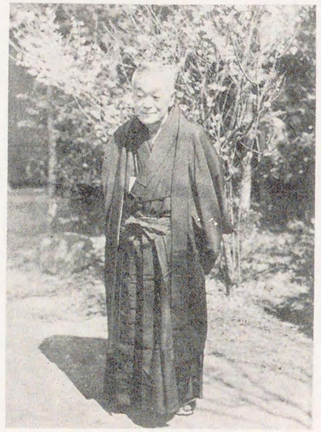
國木田獨歩編「陶庵隨筆」



文求堂宛公の手翰（上）



湖南先生の注文書（下）



湖南先生とペリオ教授

（下）右三人目　未亡人郁子刀自
四人目前　遺兒　乾吉氏
五人目　ペリオ博士

湖南先生文集遺稿

國寶唐鈔本說文片影（恭仁山莊所藏）

湖南先生　紀恩詩（下）

鄭孝胥　山陽詩碑（上）

春秋空抱尊王志　未有山陽史筆功
破曉穿林來一揖　暗愁文字掩英雄

庚辛之際紀恩詩
致君堯舜羞無術屏
跡巖阿已五春二服今
朝揮老淚經筵徵到
白頭臣
詔催丹駕趁瑤墀鳳
闕霞開日影移坐覺
光輝照顏色
天威咫尺執書時

内藤虎

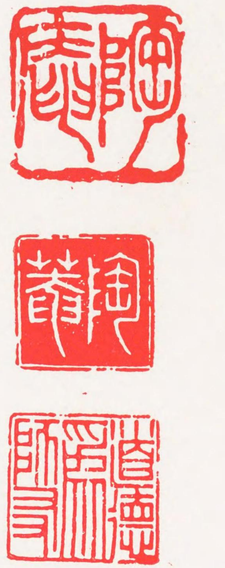
湖南先生　航歐集

甲子夏奉命將赴歐洲次豹軒博士見送詩
韻留別諸友
不願神仙卧白雲平生樸學愧方聞爭傳
鹽澤壚中牘快睹沙州石室文三保星槎通
貢利八觀輪迹慨瓜分歸來四庫重編日
欲把黃金鑄竹君
豹軒博士疊韻見示再賡其韻
征驅直破海天雲日沒犂鞬素所聞縞紵曾
欽僑札誼源流要討向歆文北望華蓋星
躔粲西極崑崙河水分覘國元知非我事期
懷鉛槧報　明君
三疊韻同舟有某某兩夫人皆訪其外君赴歐洲也
泛槎排去萬重雲石得支機自昔聞記取仙
歌和鳳管製來宮錦是回文六龍騰躍曦
車鶩九野徼茫棊局分偶度天河隨織女定
看星夕會郎君
四疊韻寄佐原君萬分
九埏幾度動風雲功比前賢竟未聞沙漠宣
威思漢武江湖後樂仰希文新陳勿卒人林謝
南北依然天塹分行到東洋洋盡處回頭滬上
忽懷君
五疊韻寄無憂園主人在瓜哇
身似騎鯨排水雲此游奇絕自希聞久恥繡
虎雕龍技難作經天緯地文日月東西從浪浴
斗箕南北舉眸分舵樓一曲浩歌意寂寞
八疊韻維納聞樂
淚墮南朝汪水雲希音清切不堪聞家丘
空剩鈞天樂禮廢誰存孝父文上苑煙霞
秋後淡美泉草木眼中分繁華東國渾
為夢白髮宮奴說故君
九疊韻又
雄圖百載已浮雲猶有工師誦所聞河嶽
毓靈思叔業聖神垂統久徒文女皇粧閣
塵埃涴聲伎歌臺金碧分城裏萬家
煙火底幾人攬涕歎無君
十疊韻巴黎
西歐佳氣蔚如雲侈麗城池愜素聞涼殿
紫霞飛綺彩內家銀燭動星文一時奎
運明良會末路蛾眉身首分士女聯翩趨
鞠部合無曲裏憶先君
十一疊韻又
復讐九世會風雲霸國餘威耳稔聞馬迹
印時無野艸刑書鑄就有鴻文吳鉤三尺倚
天起魏闕千秋勒石分仰視英雄藏魄處
穹窿傑閣認那君
十二疊韻華使陳君任先招醼坐間賦贈
不看飛雁度寒雲車響殷轔午夜聞旅食
天涯悲伏櫪應酬海外喜同文青牛西化談
難測紫氣東來道欲分他日相期振木鐸當
將草檄屬夫君
十三疊韻羅馬
七邱匝匝拱晴雲誕聖感生傳舊聞石刻
堂皇秦政業法經煥赫李悝文沙封畫閣晨
煙合日照殘楹暮色分秘有香燈長不滅空
王林闕壓邦君

湖南先生　航歐集

甲子夏奉命將赴歐洲次韵軒博士見送詩
韵留別諸友
不顧神仙卧白雲平生樸學愧方聞爭傳
鹽潭壞中牘快睹沙洲石室文三保星槎通
貢利八觀輪迹慨瓜分歸来四庫重編日
欲把黄金鑄竹君
韵軒博士疊韵見示再賡其韵
征驅直破海天雲日没犁鞬素所聞縞紵曾
欵儒札誼源流要討尚歆文北望華蓋星
躔槩西極崑崙河水分覘國元知非我事期
懷鉛槧報　明君
三疊韵同舟有某二兩夫人皆訪其外君赴歐洲也
迓援排去萬重雲石浔支機自昔聞記聚仙
歌和鳳管製来宫錦是回文六龍騰曜曦
車發鸑九野歙范基勾分偶度天河隨織女定
看星夕會郎君
四疊韵寄伍原君萬分
九垓幾度動風雲功比前賢竟未聞沙漠宣
威懋漢武江湖後樂仰希文新陳勿率人杜謝
南北依然天塹分行到東洋三盡處回頭滄海
忽懷君
五疊韵寄無憂園主人在瓜哇
身似騎鯨排水雲此游奇絶自希聞久恥編
虎雕龍技難作紆天綍地又日月東西從浪涌
斗箕南北舉眸分舵樓一曲浩歌意海漠
人間欲語君
六疊韵舟過印度洋
自挂片帆舞彩雲蓬壺西去廣新聞已諳
鳥跡多奇字欲寫驢膚校異文夢度五天
飛錫過道窮三世列眉分九流方際溝通
會堪悔世羊宗鄭君
七疊韵埃及
要起九泉楊子雲輶軒譯語資多聞名
山遺快留圖象出土方堪有聊文古墓奇觚
千砌累長渠如綫兩洲分歷山墳籍渾星
散柱下誰當訪老君
八疊韵維納聞樂
淚墮南朝江水雲希音清切不堪聞家亡
空剩鉤天樂禮廢誰存考父爻上苑煙霞
秋後淡美泉草木眼中分繁華東國渾
為夢白髮宫奴説故君
九疊韵又
雄圖百載已浮雲猶有工師誦兩聞河欲
瓠靈思叔業聖神垂統久徒文女皇鞾閣
璧埃沉臂俊歌声堂金碧分城裏萬家
煙火底樊人攬涕歎無君
十疊韵巴黎
西歐佳氣蔚如雲侈麗城池愜素聞涼殿
紫霞飛綺寮内家銀燭動星文一時奎
運明良會末路蛾眉身首分士女聯翩趨
鞠部合無曲裏憶先君
十一疊韵又
後讌言九世會風雲霸國餘威耳捻聞馬迹
印時無野艸刑書鑄欵有鴻文吴鉤三尺倚
天起魏闕千秋勒石分仰視英雄藏覘愛
亏窪傑閣認那君
十二疊韵華使陳君任先招飲坐間賦贈
不看飛雁度寒雲車響殷轔午夜聞旅食
天涯悲伏櫪應酬海外喜同文青牛西化談
難測紫氣東来道欲分他日相期振木鐸當
將草檄屬夫君
十三疊韵羅馬
七邱臣妥拱晴雲誕聖感生傳舊聞石刻
堂皇秦政業法經燒赫李悝文沙封畫閣晨
煙合日照殘極暮色分秋有香燈長不滅空
王琳闕慶邦君
十四疊韵彭早
渠門真上饑香雲韌後殊斜留異聞石道
轍磨時欲四花甃雨洗復成文頻撫琴絲
筆歌響壞鼙依韓彭獲分追想金鞍
連騎到當壚可少阜文君
十五疊韵歸舟寄伯希和翰林
廿年望盡太奏雲巖鼙訪書真駭聞東
破藏乘十二部西昇道德五千文崑山翁偏
藉張騫定上案渾須楚史分學術如今泯
畛域大師中外獨推君
右航歐十五律丙寅九月内藤虎手録

陶庵公印譜



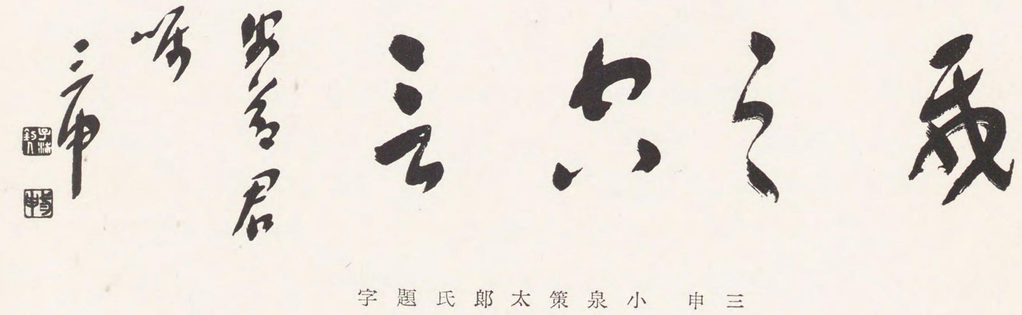
湖南先生印譜

西園寺公と湖南先生

非古是今

增上寺主三来書

字題下貌水徹島大　長管寺上增



三申　小泉策太郎氏題字

289.1A578s

自序

「陶庵公と湖南先生」と題する本書は、ノヴアリアスの所謂『誰の傳記もそれ自身一のバイブルである』と思惟する。

今や武內宿禰以來八十八歲の高齡政治家として、幕末維新より、孝明、明治、大正、昭和の四朝に歷仕する元老西園寺陶庵公は、政機献替のデリケートなる天下第一等の高人として日本の焦點、東洋平和の要石として世界的視聽を集めて居る。而して晚年公より望外の知己と信賴されたる、一代の碩學、內藤湖南先生とを記傳するに當り、京都帝國大學に於て湖南先生の講筵に侍した筆者は、感激と興奮を以て本書を編述した。

惟へば、陶庵公の性行に就て筆者の興味を唆つた最初は、巴里コンミユン黨の叛亂を橋本實梁卿に報じた公の手翰を發見して、「明治文化」に揭載したに始まる。當時筆者は公爵毛利家編纂員として「忠正忠愛兩公傳」の編纂に携つてゐたが、毛利家と緣戚になる陶庵公の傳記をも併せて研究しつゝあつた。

その間白柳秀湖氏、田中貢太郎氏、木村毅氏竝びに公の側近に在つた、竹越三叉氏、

小泉三申氏等の陶庵公に關する傳記が相踵いで上梓され、之等諸先輩の著述を繙いて淺學菲才なる筆者は、瞠若として公の研究を一時中斷してゐた。

然るに陶庵公と累代の主從關係にある中川小十郎氏の秘書であつた、西見茂君が弱輩の筆者に依囑するに「陶庵公」の傳記を以てした。

筆者は到底その任にあらざることを、再三再四辭退したのであるが、西見君は畢生の事業として、切りに筆者の起草を慫慂し色々と資料を蒐集提供したり、全く營利を度外視しての懇望てある。昨年中も拙著七册をその主宰する言海書房より出版してくれたが、公の傳記の出版の爲めには何ものも惜まずの勢である。

その熱望と知己に動かされて日夜研究を進めたが、先づ、小手調に「陶庵公と湖南先生」を眞溪涙骨氏主宰の「中外日報」に「清風莊を訪ふの記」を「京都日出新聞」に、「清風莊の文雅談」を「報知新聞」に「恭仁山莊を訪ふの記」を「傳記」に其他「週刊朝日」「中央公論」「改造」等に夫々陶庵公の逸話を發表して、稍々自信を得たので、遂に本書を上梓することゝした。

歳月を閲すること前後十年、原稿紙數百枚に渉る拙稿を整理して忙然自失たるものがある。塗鴉の惡文を羅織するに間々史料を挿入し、力めて史實の正確を期したが、後世寧ろ燒却さるべく所謂「西園寺」學者に據つて必ずや、補正校訂の要多き稿本である。

本書を編述するに當り、京都府下瓶原村なる恭仁山莊の湖南先生未亡人内藤郁子刀自、東方文化協會の遺兒乾吉氏、清風莊の留守居役野内芳藏氏、大毎京都支局長岩井武俊氏、犬養木堂傳記編纂所の鷲尾義直氏、國際文化振興會の石田幹之助氏、增上寺管長大島徹水師、子爵吉川元光、男爵原田熊雄閣下を始め、山陽の曾孫賴久一郎氏、智恩院の井川定慶師、法然院の萬里小路麟雄師、ＡＫ加入課長國米藤吉氏、大衆作家吉川英治氏等々、各方面の有志者が、終始筆者を鞭韃して紹介其他の便宜を圖られ、好意ある助言を賜つたことは「陶庵公と湖南先生」の清風高韻の餘徳と謂はねばならぬ。就中白柳秀湖氏、木村毅氏、小泉三申氏は、その著書の援用を快諾され、畏友内藤乾吉氏は陶庵公の手翰印譜の復寫を、舊知野内芳藏氏は清風莊の竹筆を復製して夫々筆者に贈與され、三來猊下と三申老が題字を寄せられたことは筆者、望外の幸甚であつた。

本書が「陶庵公と湖南先生」の胡蘆を描き、昭和の寒山拾得に比喩するが如き虎溪三笑として、それは餘りに天半の朱霞であり、讀者定めし隔靴搔痒の憾があらう。とは云

へ兩高士の性情は高朗として、物欲に捉はれず、行雲流水その識見は透徹、その視野は廣沃『汪々たる萬頃の波の如く、之を擾せども濁らず、之を澄ませども淸まらず、深廣にして測るべからず』と云つた廓林宗が黄叔度の月旦評語にも比すべきか？

『殃壽を貳はず身を修めて以て之を俟つは命を立つる所以なり』と孟子盡心の章にあるが、筆者素と一介の武辯、兩高士の立命を叙述するは、大鵬の志ありと雖もその舞文南溟に適かんとして飛躍するも、遂に斥鴳が蓬蒿の間に低翔するに止らなかつた。

最近外國人は新興日本の政治組織に漸く元老なる存在を認識して、米國タイム社は陶庵公を映畫化し閨秀作家エンダース夫人も亦、公の傳記を書いたといふ。『日本が世界の進展に對して起つた政事的軍事的局面のナラテイヴ・エッセイと結びつけて』筆者は陶庵公を描く野心は毛頭ない。かゝる意味に於て伊藤公と陶庵公、桂公と陶庵公に關する所謂政權盥廻し時代は、三申老の麗筆に讓つて一切本書から割愛することゝした。

そして湖南先生に就ても三宅雪嶺博士が「近世文學史論」に序して『湖南は自助の人、貌揚らずと雖も蘊蓄するところ頗る多し、孜々として倦まずんば其れ後人をして己を論ぜしむる、猶ほその今時古人を論ずるが如くならしむるを得るか、然れども湖南は名の不朽を以て自ら慰むるが如き妄想漢にあらず』と謂つた如く竹影掃を掃つて塵動かず、月輪沼を穿ちて波痕無き境地——筆者は、唯だ兩高士の宴坐隱逸を記述して敢て翰林の一佳話たらしめんとする微衷に過ぎない。

謹んで天下第一等の高人と、一代の碩學に罪を謝するの辭を知らず、誠惶頓首愧謝する次第である。

昭和十一年紀元節の佳辰を卜して稿成り、春寒料峭として硯滴の凍る深更、礫川の寓居にて

安藤德器謹識

本書の讀後感想左記へ御一報を賜らば再版補綴の際筆者の幸甚之れに如かない。（東京市小石川區久堅町七四）

西園寺公と湖南先生

目次

緒　論　西園寺公と湖南先生……（一）

西園寺公の家系と明治維新……（九）

「陶庵隨筆」小泉三申老公の談話筆記

西園寺公の外遊異聞……（三五）

……ゴンクール日記抄「蜻蛉集」

「歐羅巴紀遊抜書」竹軒夜客筆稿

湖南先生の家系と學統……（七六）

湖南先生を生んだ鹿角郡學統

湖南先生の家系と學統

八宗兼學と江戸折衷派

目　次

西園寺公と湖南先生の因縁……（一一）

陶庵公の趣味敎養……雨聲會の事ども……（一三）

湖南先生の趣味と詩歌……（一五九）

「航歐集」

清風莊の宴坐、兩高士の文雅談……（一七九）

羅振玉、鄭孝胥元老の交遊

清風莊を訪ふの記……（二一八）

鄭孝胥の山陽詩碑

西山國會圖書館藏書

緒論

西園寺公と湖南先生

唐の大宋の比——南方國淸寺山內に臺州の國司閭丘胤が、豊干寒山拾得の三仙を賓師の禮を以つて訪うた故事から、後世虎溪三笑とか寒山拾得の畫幅が自沒自在佯狂三昧に傳へられてゐる。元老西園寺陶庵公と碩學內藤湖南先生との交遊は、恰も寒山拾得のごとく瓢々乎として羽化登仙の詞藻あらしめる——好箇の話題、對照の妙趣ではあるまいか？

淸風莊の文雅歡晤——必ずしも一夕の淸談ばかりではなく、翰墨談に名を籍つて東方文化的經綸を吐露したとも思惟される。

筆者は湖南先生が黑頭尊者の匿名で、八あたりの顚狂語を物して居られる「淚珠唾珠」を愛讀し、遺族內藤乾吉氏を煩はした陶庵公との往復手翰を經緯に、雨聲會以來絕えて久しい公の文人墨客的交遊を檢討して見たい。

西園寺公は明治四年外遊して巴里に在り、「政理新論」の著者としてルツソオの高弟アコラス門下の秀才として、フランスの虎クレマンソーとも相許し、極めて急進的な自由主義的進歩思想の持主であつた。

その頭腦明敏にして識見の高邁なる逸話として、次の如きエピソードが人口に膾炙してゐる。

伏見鳥羽の一戰小御所會議に於て滿廷怯懦、薩長の私闘と見做して幕軍を恐怖し朝臣多く中立の地位に立たんとした際、席末より大聲叱咤「何ぞ群議を要せん、宜しく徳川慶喜を朝敵として討伐すべし」と髪冠を衝いて激怒し、岩倉具視卿をして覺えず「小冠者、よくぞ申した」と膝を叩かしめた。

眉目清秀の西園寺公時に年十八、清華の嫡流として堂上公子の一偉材と目せらるゝに至つたのである

日露講和條約成立の秋——國民激昂して日比谷の燒打事件には、「よろしくこの條約を歡迎すべし」と冷靜の一言、政友會の幹部をして熱頭萬斛の冷水を注ぎ「國家の前途を誤ること勿らしめん」と衆怒の凶焔に身を挺せんとした時の政友會總裁——西園寺公は英國の獅子ロイド・ジョージが、南阿遠征に反對演説をして民衆の袋叩きとなつた正義心に一脈相通ずるものがあつた。

政機轉換のデリケートなる公の献替、元老補弼の重任を全うする所以——印度洋上灘萬の美酒を汲んで雪月花を賞したばかりではあるまい。

湖南先生が絶倫の資を以つて篤學好古六藝を併包し、百家を貫串して特に乙部の書に於て用力最も

邃く「學問の淵博識見の高邁蓋し前古匹儔稀なり」と稱せられた一代の碩學であつたことは、今更諫々を要せないであらう。

嘗つては操觚者として椽大の快筆を東都浪華に揮ひ後、職を京都帝國大學に奉じて講席を主ること十有七年、耳提面命諄々として倦まず悠々、餘生を瓶原恭仁山莊に自適して尚ほ東方文化聯盟の事業に參劃しつゝあつた。

「日本と支那のみで東洋問題を解決せんとするは、木に緣つて魚を求むるの類である。ぜひ印度を仲間に引き入れて、三位一體日支印の相互提携をしなければならぬ。イギリスの如き文化の低い國が世界の最高文化を持つ、印度を支配するのは世の中に、此位不合理なことはあるまい」と暗にガンヂーの國民運動に共鳴し、支那亡命の政客梁啓超を庇護したり、羅振玉、鄭孝胥とは靈犀一點、清朝の復辟を策謀して、輝かしい滿洲建國の黎明に歷史的貢献をした如き、湖南先生の「支那學」は單なる學究的書齋人が、机上の空論のみではなかつたのである。

西園寺公は明治十三年フランス留學を了へて歸朝するや、松澤求策、中江兆民等と東洋自由新聞を創刊して自ら社長となり自由民權思想の木鐸となつた。

正大公明、名利の爲に屈せず些かも筆鋒を枉げなかつたので、遂に政府は實兄徳大寺實則公を煩はして聖旨を傳へしめ、勅裁を以つて東洋自由新聞を廢刊させた。

湖南先生は明治二十年笈を負うて上京し、大内青巒の門に入り「明教新誌」を編輯してゐたが三河新聞記者としてジャーナリストの第一歩を踏み出し、雑誌「日本人」及び「亞細亞」、大阪朝日、臺灣日報、萬朝報と轉々支那に渡り燕山楚水を周遊した。

日露戰爭には戰筆從軍記者として、鴨綠江の渡河戰を豫言したり、大朝大毎の人氣投票で喧嘩記事をかきなぐつては、西村天囚、鳥居素川等と論壇第一流の聲譽を獲得してゐた。三十九年大朝を退き小村全權大使の招電に依り、外務省囑託となつて滿鮮を視察し稻葉君山氏と共に諸種の献策をした。當時支那學では宋の王伯厚の如く當代の隨一と稱せられ、明治四十年京都大學に文學部の開かれるや秋田師範卒業の學歴のみで、一躍講師に聘せられ二年後本官教授に昇任した。

明治四十三年文學博士の學位を受け、敦煌文書の發掘、史料採訪のため大正十三年歐米を外遊し歸朝後、勅命を以つて帝國學士院會員となつたことは、人の知る通りである。

所謂「智者不惑賢者不憂」――あくまで常識的な廣い學問をした湖南先生は、當時法制上「たとひ孔子樣のやうな人物であらうとも學歴を具備せねば大學教授には任命出來ぬ」といはれた時代――官學派のプロヘッサーとは凡そ緣遠い存在であつたのだ。

羊羹色の紋附に裾の下つた袴を着流しノコ〳〵と講壇に上る湖南先生の風貌は、蓑仙人がニタリと微苦笑するかの如く、而かも時間と空間を超越した講義には、ノートを取る大學生は頗る附の苦手であり、朝寢坊で一時間の遲刻など朝飯前のことであつた。

德富蘇峰翁は西園寺公を三つのHがあると評したが、卽ちインテリゼンス（聰明）インドーレンス（無精）インデフエレンス（無頓着）は、湖南先生にもそのまゝ當てはまる評語であつた。

西園寺公が明治維新十九歳にして、山陰道鎭撫總督となり丹波路に錦旗節刀を進めた時、人見、中川兩族が先導をしたが、馬脇に警護した中川祿左衞門の長子が立命館大學總長中川小十郎氏であり西園寺家と殆んど累代の主從關係を結んだ機緣となつた。

越後口の戰爭では有名な長岡の河井繼之助に夜襲され、參謀山縣狂介と共に一度は敗走したが周章狼狽の結果公の日記も城中に殘された。尾崎行雄氏が長岡の歷史博物館でそれを繙くと「此日狂介參內拜謁を求む」なる文句もあつた。軍務官北征日誌（明治元年九月吉田晩稼版下）に曰く、

『事不意に出、官軍恍惚爲す所不知、必死苦戰、終に支ふる事を得ず、追々信濃川を渡り潰散す。西園寺卿關原へ御退陣、吉井幸助以下諸官長、不知所在。』

と傳へられてゐるが、會津落城と同時に一旦京都に凱旋した。

西園寺公が公卿の衣冠と軍將の戎服を脫却して、當時御所內に在つた自邸に立命館なる家塾を設立したのは維新前催された詩筵に由來してゐる。幕末の詩人小野湖山、山陽の第二子賴支峰、梁川星巖の未亡人張紅蘭、山中靜逸等が詩筵の御常連であつた。

世直しの民衆運動として「えらいやつちや」とか御神符（おふだ）降りのあつた秋——西園寺公は「予は怪力亂神を語らず」と謂つたが、紅蘭女史に「孔子の語らざりしとて天照大神の神符は如何に」と一本參らされたことを「陶庵隨筆」に告白してゐる。

立命館は卽ちかゝる詩筵の延長であり、明治二年七月孟子の盡心之章「殀壽を貳（うたが）はず、身を修めてこれを俟つは、卽ち命を立つる所以なり」の立命を則つたもので、立命館なる私塾は詩文の會より一轉して時事討論會にまで進展して行つた。

賓師の禮を以て參座した者、廣瀨青村、松本龍、江馬天江、神山鳳陽等あり西園寺公の高名と時機に合して、諸生の集まる者常に七八十人から百名を超える盛況であつた。

これがため京都府廳より差留となり、廢校の止むなきに至つた。今日の立命館大學は西園寺公の門下中川小十郎氏の襲名したもの、嘉永二年生れの公と慶應二年生れの湖南先生とは、十八年の差違があるので勿論時代的には問題とならぬ。が、後年元老と一代の碩學が交遊にはかゝる詩筵的連繫の繼續復興したものと考察されるのである。

西園寺公が幼時より夙慧で、養母に當る內大臣德大寺實堅の次女が手に鞠育され、諸大夫の補導を受けて成長した時、仁齋の子孫伊藤德藏に就て儒學を、學習院の敎授秋田秋雪に詩文を學んで居た。書は五六歲の頃、右大臣近衞忠熙について、賀知章の帖を習ひ蘇東坡の流れを汲んでゐたから湖南先生の乙部の書に於て共鳴したことが首肯されよう。

舊南部藩の儒者十灣內藤調一の次男として、僅かに秋田師範卒業の學歷しかなく、大內靑巒門下として苦學力行した湖南先生とは異なり、西園寺公は少年時代淸嘗二家の主宰せる學習院に入り劉石秋中沼了三等に學び、就中銅駝余霞樓の中島棕蔭の感化を享けたことは、詩書易禮記の講說百家を折衷し史眼斑馬に遜らずと稱せられた湖南先生の、棕蔭が耕讀に及ばなかつたとは思惟されぬであらう。西園寺公が越後口の征伐を終り暫時、東京に於て開成所講師佛人プウセーにフランス語を學んだことは、フランス留學の宿志となり湖南先生が英人サンマース及び米人イーストレーキに就いて、英語を學んだのと同工異曲である。

西園寺公は慶應三年參與職に任じ、小御所に於て正親町三條實愛公と福澤諭吉翁の「西洋事情」を讀み、和漢一點張りの公卿仲間を瞠若せしめてゐたが、慕維廉の英國志を講話した時には「左樣な書籍を讀むことを人に知られると禍を招く」と注意されたほどであつた。

勿論湖南先生は母堂の懷に孤々乳を求めてゐたであらう、幕末維新の風雲は知る由もなかつた。

西園寺公が越後口の兵馬倥傯の間、東條琴臺の「續先哲叢談」や日柳燕石の詩集を繙き、「葉櫻日記」で文武兩道の達人と謳はれた、山縣狂介の有名なる——仇守る砦の篝火影ふけて夏も身に泌む越の山風の吟懷、薩藩の淵邊高照、秋月の坂田諸潔等を左右に侍らせて詩酒徵逐したことが想像され、前原一

誠の如きは尤も西園寺公に傾倒した一人であつた。

大村益次郎、木戸孝允等の盡力に依つて洋行の宿望が達せられ、明治二年十二月長崎表勤學願ひの通り聞召されて、弘運館（舍密館）に熊本の井上毅等と語學を修習し、フランスに留學した西園寺公の先見こそ、「知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ」の五ケ條の御誓文が主旨に外ならなかつたのである。

公卿志士爭つて太政官の札盜みとなり、高位顯職に就いたに反し、西園寺公ひとり悠々として萬里波濤を蹴つて花の巴里に留學したことは、大西郷の英傑を以てすらその去就を誤つたに比較して、羽化登仙の長命術を心得てゐたのであらうか？

一往寒山萬事休　更無雜念抃心頭　閑於石壁題詩句　任運還同不繫舟

西園寺公と湖南先生を寒山拾得に比喩する筆者の意圖は、實にこゝに存するのである。

西園寺公の家系と明治維新

附「陶庵隨筆」小泉三申老公の談話筆記

西園寺家は醍醐天皇の延喜の治と竝稱された村上天皇の、天曆の御代と共に國史に隱顯してゐる。かの廿二文章家が落花亂舞衣の詩作や、紅葉合せの鬪歌をしたり、梨壺の五歌仙が後撰集廿卷を編んだ平安朝の所謂詩歌管絃の風流に、藤原氏の族長として、史上に著れた右大臣師輔の子閑院二十四家の祖と謂はれる贈正一位公季から出た閑院家の流れであつた。

師輔の夫人は醍醐天皇第四皇女で、延長公主と稱せられた勤子內親王である。柔德に富み淑姿花の如しと云はれ書畫に通じて、一點蠅の妙手と唱へられた。（竹越三叉氏著に據る）

源順の和名抄は此公主のために著されたと傳へられてゐる。師輔は攝政關白基經の孫でかの藤原時平の甥に當る。が、北野天滿宮を建立して菅公を祀り賢相の譽高かつた。大日本史に「師輔の第六子（或は曰第十一子）公季幼にして孤となる、村上天皇の中宮安子は公季の姉なり、之を憐みて中宮に養ふ、天皇亦深く眷愛を加へ、服食一に皇子に擬す、但用ふる所の食器、稍々其制を異にするのみ、人臣の宮中に鞠養せらるゝ古來之れ無きを以て、時人これを異みたりといふ。治安元年（後一條天皇の

御宇）從一位に叙し、太政大臣に拜す、長元二年薨、年七十三、正一位を贈り甲斐公に追封す」とある。

卽ち位人臣を極はめた人で、實成、公成、實季其玄孫公實に至り多くの子女があつた。その子實行は三條氏、通季は西園寺氏、實能が德大寺氏を創めて三家に岐れた。が、右の三家は一家なりとした家憲が堅く子孫に遵守され、後世また幾重にも親族關係を織込んで今日に及んである。

正二位權大納言公實は崇德、後白河天皇の外祖であり、その子通季は大宮殿と稱せられた。公通、實宗を經て第四世公經に至り西園寺氏は大いに著はれた。

公經は世に鞆繪大將、或は一條相國入道、西園寺入道前太政大臣とも稱せられ、西園寺氏三十余世中、尤もすぐれて榮達した人である。

其妻は源賴朝の妹夫、藤原能保の女で公經勢を恃み驕恣甚だしく、後鳥羽上皇怒つて朝參を停められた。が、源實朝救護して漸くその怒りを解いた。承久の亂、後鳥羽院遷幸されて後は、公經乃ち關東と協調して朝廷の政柄を執り天下の聲望を一心に集めた。

本朝通鑑に『其男皆公卿に昇り、女子皆貴顯、女孫后宮に備はる、皇家の外戚たるを以て威福繁榮清華諸流の及ぶ所にあらず、攝家たりとも殆んど比肩し難し』と記し王代一覽には『寬元元年十月、西園寺入道相國公經、熊野に詣づ、次男大納言實雄、嫡孫大納言公相、其外大納言爲家等の公卿數輩

殿上人三十人ばかり扈從、殆んど御幸の行粧に等し』とある。

その威光想ふべしで、公經は洛外衣笠山の西北に西園寺なる巨刹を創建して別莊とした。

かの法成寺入道前關白太政大臣道長が、この世をば我世とぞ思ふ望月の權勢もさながら、公經の土木は增鏡に『北山のほとりに、世に知らずゆゝしき法堂を建てゝ、名を西園寺といふめり……山のたゝずまひ木ふかく、池の心ゆたかにわたつみをたゝへ、峰より落る瀧のひゞきも實に涙催しぬべく、心せばき所のさまなり……北の寢殿にぞおとゞ住み給ふ』とあるのを見ても、その結構が察知されるではないか？

本朝通鑑にも『昔道長法成寺を營み、其華美を極む、今公經の築く所、勝景あり伽藍あり其壯觀法成寺に勝ると謂ふべし』とあるのは、些さか誇張で道長の豪奢には及ばなかつたが、現存の金閣寺は卽ち此の北山を足利義滿が取つたもので、西園寺氏の梵鐘が金閣寺に殘存する所以である。

『西園寺氏、姓は藤原、七清華の一なり、九條右大臣師輔の十男、太政大臣公季の玄孫、三條權大納言公實の四男、大宮權中納言通季に出づ、通季の玄孫公經、山城國葛野郡北山莊に堂宇を建立す。依つて西園寺と號す、子孫因つて氏となす』といふ大日本史の記載に據り、その姓西園寺と名乘つたことが察知される。

七清華といふのは久我、三條、西園寺、德大寺、花山院、大炊御門、今出川の七氏であるが寬文年

間に廣幡、醍醐二氏を加へて九淸華となつた。（小泉三申氏著に據る）

現今では公、侯、伯、子、男の五爵を通じて華族とするが、昔は右の淸華を御華族方と稱し、近衞九條、二條、一條、鷹司五氏を五攝家、或は御官司方、重職家とも稱し、淸華の次位たる、中院、正親町三條等の諸氏を大臣家と謂つた。

攝關より大臣までを公、納言又は散一二位從三位までを卿と敬まひ、從三位以下を朝臣と稱した。初めは朝廷をさして公家と申し、後には轉訛して公家の衆、則ち朝廷の衆臣といふべきを略して公家と呼稱するに至つた。

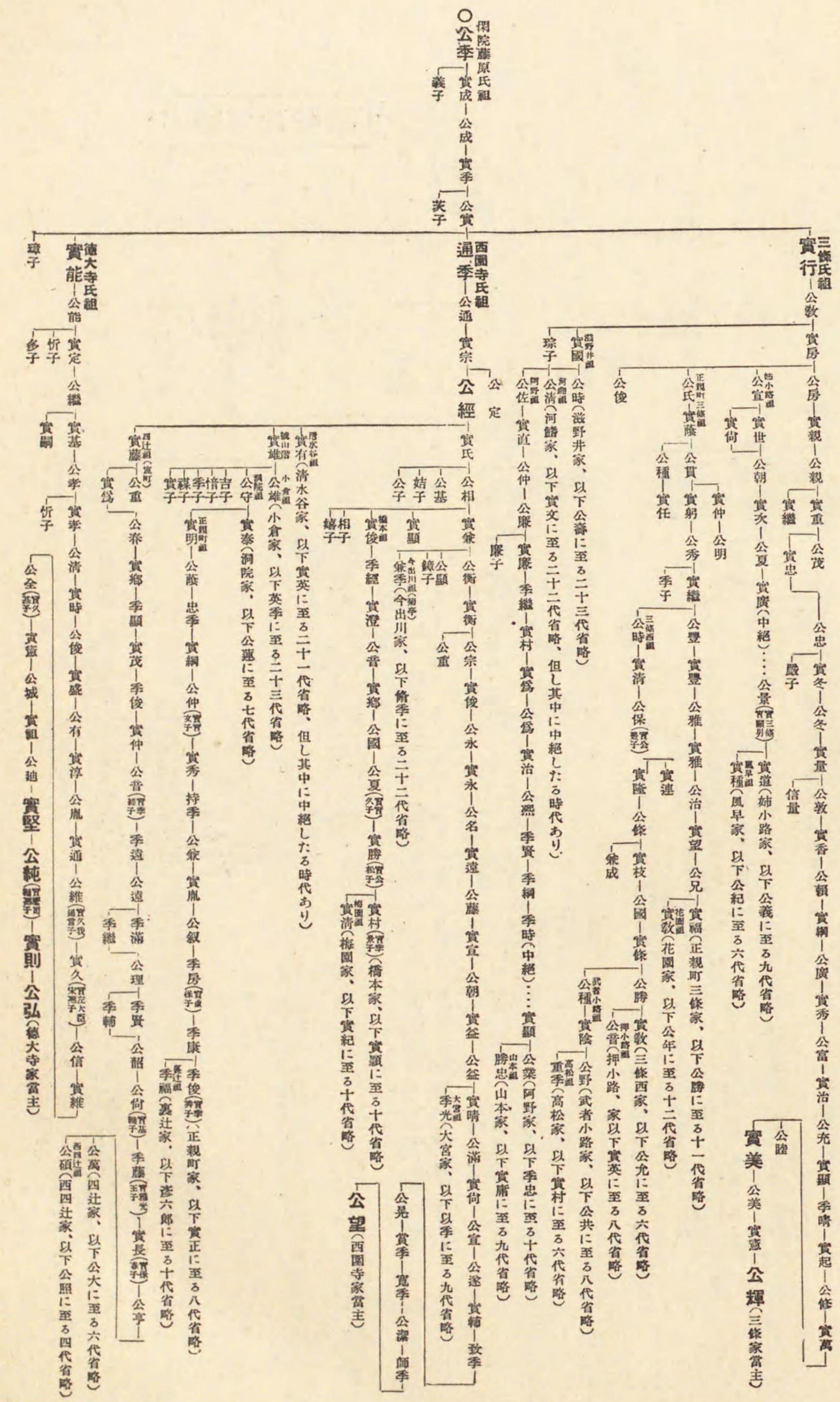
公と卿とに屬する階級を月卿、四位の殿上人、五位の官人にして昇殿を聽されたものを雲客と稱し月卿雲客は所謂雲の上の人々である。

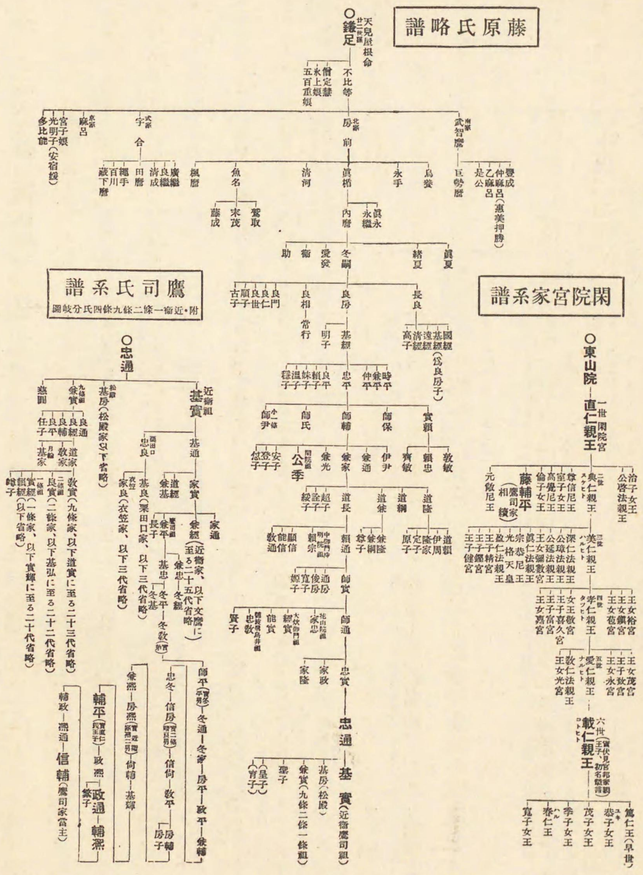
公經は前述の如く太政大臣准三后に昇り、西園寺殿又は一條入道相國殿と謂つたが、その子實氏は後深草、龜山天皇の外祖であり、その子公相、實兼を經て曾孫公衡は光嚴天皇の外祖となつた。

常盤井、今出川、一條、山階、小倉、正親町、洞院、冷泉、橋本、室町等の諸氏、皆公經の子孫で世運數百年、諸家それ〴〵盛衰を異にしたが猶能く家名を保つて、孰れも維新後華族として繁榮してある。

公衡の子實衡、その孫公宗に至るまで代々執柄の權門としてかの北山の山莊を傳領したが、元弘建

三條、西園寺、徳大寺三氏系譜（附、閑院藤原氏二十六家分岐圖）





武の亂に公宗誤つて逆謀の罪を問はれ西園寺は無殘にも馬蹄に蹂躙されて、さしもの勝境忽ち草叢となつたのを、應永年間足利義滿に依つて鹿苑寺俗稱金閣寺と化したことは前述の通りである。

太平記の惡夢はともかく、西園寺は一旦室町に名跡を移し、天文年間更に現在の廣德町に天台を改宗して、淨土專念宗となり智恩院の末寺となつたが、西園寺氏の菩提所としてその法燈は北山以來の餘光を照してゐる。

公宗の後は、實俊、公永、實永、公名、實遠、公藤、實宣、公朝、實益、公益、實晴、公滿、實尙、公宣、公遂、實輔、致季、公晃、實季、寬季、治季、公潔、師季、公望と綿々相傳へて淸華の名跡を保つたのであつた。

陶庵公が德大寺氏から出て西園寺氏を繼いだことは、平安朝以來の名家として淸華の嫡流を汲んだもので、天兒屋根命廿二世孫、大織冠藤原鎌足の後裔として藤原氏中の名門、而かも織田信長の第十一女は德大寺中納言實冬の室となり、恐れ多くも皇族の分脈として武將の血脈が混入してゐるとさへ傳へられてゐる。

但し實の血統から云へば、現今の德、西二氏は、鷹司氏に出で、鷹司氏は東山天皇第二皇子、直仁親王の血を受けてゐると拜察される。

閑院宮
直仁親王―典仁親王―光格天皇―仁孝天皇―孝明天皇―明治天皇
　　―鷹司輔平―政熙―政通―輔熙―輔政
　　―實堅（德大寺）
　　―公純（德大寺）―實則
　　―公望（西園寺）

乃ち光格天皇の實弟、輔平が出て鷹司家を襲ぎ、その子實堅が德大寺氏を繼ぎ、曾孫公純が復た實堅の嗣子となり、公純の子公望が西園寺氏を相續したのであるから、陶庵公は寧ろ藤原氏を離れて皇族に近いと謂はれる。

西園寺公は幼字を美丸（よしまる）と呼ばれ、嘉永二年十月廿三日出生、四年七月西園寺師季卿の實子として迎へられた。時に父師季卿は病重く公を迎へて三五ケ月後薨去したので、美丸を改めて公望とし西園寺氏第三十三世の主公となつた。『自分の家は歷世の閥閱である。そして中葉以後は太政大臣公經より數世の間、外戚として位人臣を極めその權勢は朝野を傾けた。降つて大納言公宗に至つては、陰に北條氏と通じて弄議を謀り一身は終に天下の戮となつた。年代は悠久であるとしても、そのことは青史にちやんと載つてゐる。身を以つて天下の先となり上皇室のため、下家門のために汚名を雪ぎ、累世の天恩に報ぜねばならぬ』此の心持が西園寺公の生涯を通じて名利を度外視し、一意國家のために盡瘁される所以ではあるまいか？

明治元年仲秋改正出版の雲上至正鑑に

御　領　五百九十七石余

御住殿　新在家東側

御始祖は贈正一位公季公より五代崇德白川兩帝の御外祖正二位權大納言公實卿の四男大宮正三位權中納言通季卿なり。琵琶の御家なり。

正三位金紫光祿大夫

西園寺右近衞中將公望（とももち）卿

虎賁中朗將軍兼參與職

とあるが、左右の肩書は古典的の稱號に止まり朝廷實在の官職ではない。

西、德、三條、三家共に、諱に公、實、季、三字をこもごも用ゆることは其系譜に現はれてゐる。雲上至正鑑には、右三家の公字に、特にトモと傍訓を附し、公望をもトモモチとしてあるが、他家は知らず、西家では公をキンと跳ねる例があり、公望は言ふまでもなくキンモチである。德大寺氏の實堅はサネミ、公純キンイト、實則はサネツネなることなど、公家には諸家各自の典故に由り、姓、名、共に通俗と異なる稱呼がある、三條實美は一般にサネトミで通用してゐるが、至正鑑にはサネヨシと

あり、西園寺公はサネミと記憶される。（小泉三申氏著に據る）

公が西園寺家を襲いだ頃その所領は、六百石と稱せられたが、實數は四百九十七石餘であつた。皇室の御料が二萬九千九百九十四石餘、親王四家が六千廿八石餘、攝家一萬五十六石餘、清華家五千四百八十二石餘、岩倉家の如きは一年三十石二人扶持にしか當らなかつた。

西園寺氏古文書中、豊太閤の判物に大和九條村の所領を賜る云々があるが、その領地から米穀の外鰯何升を納むとして山成若くは川成のあつたことは注目に價する。かくして實年三歳の西園寺氏の幼主は、其年十月廿日、官年五歳として從五位下に叙され、嘉永六年五月十六日、官年七歳として侍從を拜任した。未だ首服を加へずして、侍從に任ぜられるものを、童形の侍從と稱し、之を拜任するは攝家清華に限られた名譽であつた。

西園寺公が生れながらにして、清華の嫡流とし童形の侍從となつたことは、公の一生を通じて皇室に忠誠なる機緣であつたと拜察される。とにかく皇室と御緣故の深い西園寺公は西園寺家の當主としては幼時より鰥寡孤獨であつた。

公は安政四年養母德大寺氏の喪に服した。乃ち實の三歳にして父を失ひ九歳にして母に訣れて、西園寺家の孤兒となつたが、實の父母は健在に在はし其溫かい愛撫の手は常に西園寺家に延びてゐた。

公の懷舊談に

『父は馬が好きで、わたしも子供の時からすきであつた。父がわたしを馬に乘せて庭をのそのそ歩いてゐたことを覺えて居る』と述懷されたことがある。庭とは今出川通り烏丸の御住殿なりしや、或は清風御殿の庭園なりしや、朝廷の衣冠を脫し、家庭の便服にくつろぐ老貴人が、愛兒を馬に乘せて、庭園の小徑をのそり〳〵歩いて居られたといふはなしは、これを聽く者の衣襟にも、和かい風を馨らせる。かうした慈愛に養成された騎乘の夙好が、他年軍旅の大用を爲し、慶應四年正月四日、伏見鳥羽の戰ひ急を告ぐるにあたり、西園寺公は山陰道鎭撫總督を拜命し、其翌日、烏帽子直垂の輕裝にて（公家には官位相當の制服あり、烏帽子直垂は略裝なり）薩藩から引き出した駿馬に騎して征途に上られた。『山陰道に出てゐる時、山口といふ家來が（山口筑後介）お上に善いことが二ツありますといふから何が善いのかと聞くと、其一は馬に善くおのりになる事、他の一ツは手紙を自由に書て、佑筆を使はれない事、この二つが誠にうれしうございますと、眞に嬉しさうであつたよ』とは如何にも嬉しいはなしである。固より君臣主從の親しみはあるにしても、三歳の幼時から守り育てた主君が、世に勝れて成人したまひ、今は主上親征の御名代として、出ては馬上雄々しく三軍を統べ、入ては自在に管城を督する、天晴れ大將たる器量を仰ぐことを得たのは、家臣等十五七年來の丹誠が、如實に酬ひられた所以であるから、一同喜び極つて涙下るの想ひをなしたことであらう。

『子供心にも聊か煎茶の嗜みがあつて、ある時朱泥の急須、俱輪珠といふあれを買つた所が、子供が

そんな高價なものを翫んではいかぬと父に叱られた。後には此倶輪珠の鑑賞が流行して、數百圓數千圓の値を出すやうになつたが、わたしの買つたのは二分であつた。其頃の公家では二分も粗末に出來なかつた』とか、『小說を讀むと父に叱られるから、時には家來にもかくして讀んだ』とも語られた。茶器を購ひ、小說を讀むが如き事は、小供としても已に十二三歲の頃であらう。『然し兩親の膝下を離れ、幼にして早く主人となつたのであるから、俗にいふお山の大將でね、誰もあたまを抑へる者がない。それに天性が不良だから、氣隨氣儘が增長して隣近所から憎まれたらしい。

隣りの綾小路（前大納言有長）といふ公家にわたしと同年輩の小供があつたが、其家の女どもが隣りの西園寺さんのやうになつてはいけませぬ。德大寺さんのやうになされと、口癖にして誡しめるのをわたしの家の乳母などが聞て腹を立てたものです、兄は子供の時から溫和な性質であつたが、わたしは餘程不良の方でね』と笑はれる。公よりは幾つかの年長であつたが、柳原前光は、公家の少年中に鋒芒を露はした秀才であつたらしい。禁裡に何かの愼しみ事があつた時、ある公家の家で謠曲をうたつてゐる所へ、外からどん〳〵石を投げ込む者がある。驚いて出て見れば、柳原少年朝臣である。其亂暴を咎めると、この時節に大聲を發してゐるのは不謹愼である、朝廷を憚からぬ不埒者を懲らすのだと逆襲する。成る程左樣でもあるから、却て閉口してあやまつたが、しかし餘程口惜しかつたものか、それを柳原の師儒伊藤輶齋（德藏）に訴へると、輶齋は寧ろこれを快として『柳原さんと西園寺さんは少年公家の双璧である』と稱えたことが、今に古義堂に語り傳へられる。

養母德大寺氏は、系圖上では西園寺公の叔母であり、血緣では曾祖父太閤政通の叔母なる方である。公は三歲より九歲までこの方に鞠養されたが、親しく伏侍したものは、公が家の諸太夫幸前肥後守の女相摸といふ者であつた。菊亭家へ奉公に上つてゐたが、公が西家に移られた時、歸つて保母を承はり、維新後公が洋行されるまで忠勤した。多少の教養もあり、氣慨もある男勝りのしたゝかものである。多少の教養もあり、煙草もめしあがれ、酒も今から御修業なさるが宜しいといふのだから、大變の抱負である。『乳母にすゝめられて七ツ八ツ位から煙草も吸ひ酒も呑んだ。十歲に足らぬ子供が、煙管で吐月峰をはたく、晩の食膳では爛德利を前にしてちび〳〵召しあがるのだからね、おかしくもあつたらうし、憎く體でもあつたらう。』と公は舊夢を追ておかしがられる。

由來西園寺氏の家臣に、したゝか者の有つたことは、史乘に幾らも數へられる。『君の所の家來どもは、何か一癖ありげで、つき合ひにくいと、兄がよく笑つてゐた』と公も言はれる。如何にもかの相摸の如きは、女ながら一癖も二癖もある。しかしさういふ德大寺氏は、百年前の公城卿時代に、竹內式部なる、とても大きな癖者の家來を出し、主從協心、垂加流の神道、軍學を桃園天皇に進講して、寶曆事變を惹起した本家であつたから面白い。公城及び其同志なる久我敞通、正親町公積、西洞院時名等

の諸卿は、乃ち實に勤王復古の實際運動に先鞭を着けた殊勳者である、豈其家來のみならんや、德、
西、二家は古來其主人にも癖者、したゝか者に乏しくなかつた。其一生涯を、溫厚謹直に終始された
實則公でさへも、文久三年四月十一日、主上御不豫の爲に、豫て仰せ出されし石清水行幸を延期せん
としたまへる時、三條實美、東久世通禧、等、等、の國事係、參政寄人と同盟して禁中へ列參し、『上
若し諸臣の奏言を納れたまはおんば、强て玉體を腋し奉りて鳳輦に乘御なさしめん』とひしめいた。
御病氣とあらば、我等玉體をかつぎ出し奉るといふのだから狼藉極まるではないか？

西園寺系としての公は、父は師季（正三位右中將）祖父は公潔（從三位右中將）である、德大寺系
としては、父は公純（右大臣）祖父は實堅（內大臣）であり、鷹司の血脈としては、父公純、祖父輔熙
（關白）である。公潔卿は天保七年、十九歲にて薨、師季卿は嘉永四年七月、二十六歲にて薨、共に早
世されし爲か、其事蹟は史乘に顯れない。『父の病氣が心細くなつてから養子となり、三ケ月か五ケ月
で喪に會したから、其面影をも覺えてゐない。公家中第一の美男と評された人であつたそうで、わた
しを初めて見た時、今度の西園寺はゑらい醜男だなと笑はれたと後に乳母などに聞かされた』と公も
笑はれる。公純、輔熙二公は、孝明天皇御一代を通じて嘉永安政の難局に當られたから、其功勳の錄
すべきものに乏しくないが、西園寺公の尊族中に傑出した人物は、何としても指を鷹司政通に屈せざる
を得ない。孝明天皇の御宇には、先帝顧命の重きに任じ、攝政、太政大臣、關白、を經歷して太閤の

稱號を許され、准三后の宣旨を賜はるなど、當に王朝時代に謂へる一の人の稱に合ひ、先朝以來前後
三十七ケ年間政柄を執たのであるから、其業蹟は固より卒爾に語り盡せない。

關白を罷めても內覽故の如く、依然朝政に與り幕末尊攘論の最只中に、開國論を執つたのだから色
々と群疑のデマが飛んだ。

孝明天皇すら『朕が一言も太閤の一言にけられ是迄每度に候事甚困り候』の御文言があつたほどで
その權勢の竝々でなかつたことが察知されやう。安政六年幕府のために罪名を附して、宮廷外に退け
られ剃髮、閉門して謹愼となり、關白九條尙忠一人のみ側近にあつたが、孝明天皇は靑蓮院宮と山階
宮とを還俗せしめて國事を諮問された。

政通入道して拙山と號し、其子輔熙は入道前右大臣隨樂と稱するに至る。…『武命とは乍申、忠臣
却而如此相成候段、誠に以歎息之至無壽期、被愁嘆之程察入申候、依之此品甚輕少乍赤面送遣候、暫
之間、煩心爲慰、且朕之心中を申述印迄、如此候事……此旨推察賴入存候事、又々宜時節到來候は、
面會之期、只管待申候事』とあるは、孝明天皇垂憐の餘り、物を副へて政通外忠熙、輔熙、忠香、實
方等四公に賜はりし宸翰中の一節である。今は已に歷史の記錄となつても、誰かこれを讀んで落淚せ
ざる者があらう？

安政元年四月六日、禁裡火を發し天皇は下加茂に遷幸あり、西園寺公も二條に近き諸太夫芦田下總

守の宅内に避難した。

幕末の風雲急にして流言蜚語の飛び交ふ京洛の巷腥風吹き荒んで、劍光血雨、尊王佐幕の時勢、混沌たる世態の裡にも、前右大臣隨樂入道の曾孫たる、童形の侍從を戴く西園寺氏の實庭は、堂上一般の動搖に關せず、穩かに春を迎へ秋を送つた。安政四年十月西園寺公は官年十一歳にして首服を加へ昇殿を聽され、正四位下を以て右近衞少將となつた。奉慶拜賀のため參內したがその時は慣例として舞踏をする。舞踏と云つても形式だけで輕く身體を動かして笏を上下するのみである。文久元年三月、官年十五歳にして從三位右近衞中將として、養父師季卿薨時の官位に上り、出番に召されて初めて宮中に勤務することゝなつた。この數年間に、書道を近衞忠熙卿に、漢學を伊藤輶齋に學んだ。忠熙卿は今の文麿公の曾祖父にして入木道相傳の名家と稱され、嘉永三年八月五日參內孝明天皇に十二點の筆法を御傳授申し上げた事が、天皇記に見える。西園寺公は習字の手本をも授かり、時々筆法を學びもしたが、後には賀知章の脚を撫し文人流に移り、維新前には賴家に轉じた。明治二三年頃の書風は、ほゞ山陽の體を摩せんとし、フランス留學中に、自然一家の風格を成したが、今でも多少山陽の匂ひがある。伊藤輶齋は、諱は重光、通稱を德藏といひ、仁齋の後、東涯、東所、東里、東峰を經て六代相傳へた古義堂の世儒である。「貞享元祿の頃、德大寺公學を好み、每に京師の名儒を集めて互ひに討論せしめ、以て其定論を聽かんとせり、然るに諸儒初めは怡聲にして辯說すれども、

互ひに容れざるに及びては、卒に尖嘴飛沫、相誹謗するに至らざるなし、獨り仁齋は坤然渟厚爭はざること終始一の如し、故に擧坐皆仁齋を重しとせり。」（德川三百年史仁齋傳）とある如く、輶齋が德、西、二家の敎師に招請されたのは、蓋し仁齋以降の宿緣であらう。古義堂は則ち世に謂ふ堀川塾にして、百五六十年來敎授の帷を垂れ、後世稍々衰へたりとも、尙ほ古學の本家たる名聲を持續して、公家にも多くの弟子があつた。就中、德、西、二家は先祖傳來の大檀那であるから、輶齋もこれを名譽として、例日に進講に出た。ある日德大寺家へ上つた所が何の障りあつてか、控え所に待たされて時を移した。ひどく冷える日であるのに、火氣の無い室に端坐し、文字通りの寒儒となつてふるへてゐると、襖をあけて一寸顏を出した西園寺公が、何も言はず其儘立ち去る間もなく『何故伊藤先生へ火鉢をさし上げぬ、この寒いのに不注意千萬である』と、鳴り響かんばかりに叱責する聲が聞えた。やがて火鉢が出る、茶が運ばれる。其後はがらり待遇が變つて大いに助かつた。『因て更に考へると、あの大聲は一二人の臣從を叱責したのでなく、故さらに待遇改善を全家へ號令されたのであると悟つて、愈々之の子後世畏るべしの感をなした』と、歸つて家人に語つたことが、今に古義堂に言ひ傳へられる。これを小泉三申氏が公に問へば『そんな事があつたかな、德大寺さんは謹嚴の方であるから、御前へ出てゐる間に煙草を吸ふことが出來ないと、輶齋がこぼすから、よし〳〵わたしが工夫すると受合ひ、德大寺に講義のある時に行き合せ、家來を呼んで、先生に煙草盆を出せと命じ、後に輶齋に禮を言は

れたことは覺えてゐる。兄も能く氣のつく人であつたが、講學の席に煙草盆を出しては、先生に失禮であらうと遠慮し、輞齋もそれを憚つて、互ひに禮讓を守つてゐたのを、不良少年が横からぶち壞した』と言はれた。不良は公自身これを謂ふに過ぎないが、ぐわんと鳴りつける雷震性は、今でも何處かに潛在するやに思はれて怖ろしい。（小泉三申氏著に據る）

『出仕は月六回、午前九時出勤、其夜宿直して翌朝退出する……當時大臣攝家を除いて、また役人則ち議奏傳奏を除き、外の公家は或る年齡まで小番と名づけて、それが六番に別けてあつて、月に四度か五度宮中に出て、勤番宿直をしなければならぬ。大抵それが一日に十人位出る筈であるが、中には不參する者があつたりするから、多き時は七八人、少なき時は四五人位のこともある。

さうして番所が三つに分れてゐて、家によつて詰める所がきまつてゐた。三つといふが其實二つであつて「內々」と名づける所と「外樣」と名づける所とある。其中から又選ばれて「御近習」と名づける所へ出るやうになる。內々へ勤める家と、外樣へ勤める家と、其二つは極つてゐるが、其中から人選といふか何といふか、人を選んで御近習といふのへ勤める。其近習へ勤めるのが聊か榮譽のやうになつてゐた。わたしの勤番に出たのは十三の年であつて、わたしの家は外樣といふ方へ出る家であつたから、その方へ出て五、六ケ月も勉めて居る中に、今度は近習といふ方へ出ることになつた。三條、岩倉などもやはり近習であつて、一所に宿直をしたことも覺えてゐます……此小番がまづ我々の常務で、それから豐明の節會とか、又は新嘗祭、或は臨時祭といふやうな事に出なければならぬのでした。』とは、國木田獨歩が編述した「陶庵隨筆」に收められた公の「懷舊談」の一節である。「陶庵隨筆」は明治三十二年三五月の交、竹越三叉氏が主宰せる「世界の日本」の爲に、西園寺公親しく執筆されたものであるが、「懷舊談」の出所はよくわからない。其語り初めに『何か懷舊談とでも題して、維新前後の事か何か私の記憶に存してをることを話しをしてくれといふことですが、私は實はこの懷舊談、或は昔語り、又は自叙傳隨筆といふやうな、自分で自分の過去の事を話したりする程の事が無いからでもありませうが、それは兎も角も、全體古人の遺したさういふ類のものを見るに、和漢洋に論なく、とかく虛飾の話しがまじつて、俗にいふ手前味噌になつてをるが多いのです。故に一面には甚だ面白く感ずると同時に、一面に於ては嫌氣のさすものです。私は今まで自分で自分のことをいふのは、何だか恥かしいやうな心持がして、度々さういふ依賴を受けましたけれども、盡く斷はりました。また、自分でも書きかけてみたこともありましたけれども、それもすぐ止てしまひました。また一方からいふと、維新後聊か私も國事に關はらぬでもなかつたのですが、まだ極く少年であつて、維新になつた時が漸く十九歲です。其眞相を穿つとか、實際かうであつたとかいふやうな事は、當時にあつても、實はわかりも何もしていやしないのです。故に自分では覺えて居るやうに思つても、さて人に話しをしてみやうと思ふと、思ひ違ひがあつたり、順序が立たなかつたりして、纏め

るには、實に一朝一夕には無理です』……とあるは正に公が平生坐談の口吻をうつしてゐる、と小泉三申氏が折紙をつけてゐるのだから唯一の信憑であらう。

『私の小供心を刺撃した出來事といふものは、夷人が來た。攘夷をせねばならぬ、といふ話しは勿論でしたが、内裏炎上が抑々の始まりで、この時は六歳でありました。それから京都の地震、彗星が見える、コロリが流行るといふやうなこと、また林大學頭が開港を願ひに上洛した、堀田が來た、間部が來た、青蓮院宮が幽閉される、公家が落飾させられる、或は有志家が陸續捕へられる、此時は私の家の家來も一人やられました。彦根閣老の要撃、酒井若狹守の檄文、公武一致の説、和宮降嫁など、一々數へることは出來ないが、是等の事が皆少年の頭を刺撃した。其時分の京都の狀態といふものは、段々騒がしくなつて來て、私共が十二、三ぐらゐの小兒で、何も知らぬながらも頻りに慷慨してゐるやうな次第で、喩へば稽古ごとでも元來公家の家では中世以後の儀式的の事を多く學ぶのであつたが、そんな事を覺えた所が仕方がない。畢竟そんな馬鹿な事をして居たから、今日のやうな王室式微の狀態になつたのだといふやうな考へを起し、私の家は琵琶を彈く家であつて、今朝廷で行ふ伶人のやることなどを學ばなければならぬ。私はそれが大嫌ひであつて、物心がついて、日本外史のやうなものを讀むやうになると、彌々增長して、何でも王政復古になさねばならぬといふて力むでゐた。多少氣慨のある公家は、多くさういふやうな風潮に傾いてゐました。』と諄々たる語氣に少しも手前味噌の

匂はないのは、必ずしも謙讓抑遜の意を用るのではない。『當時聊か國事に關はらざるにあらざりしも、……維新になつた年が漸やく十九です。其眞相を穿つとか、實際かうであつたとかいふやうなことは、當時にあつても、實は少しもわかりも何もしていやしない』……と謂ふのは、則ち其胸憶の眞氣を吐露したのであり、而して又、漫りに自己の不正確な記憶を語つて、歷史の記述を誤るまいとする心づかひでもあると推察される。

右の懷舊談の中には『元來公家の社會といふものは、御承知の通り少しも外へ出ることはならず、一小天地の内に棲息して居つた。漸やく維新前になつて、各藩の士と交はつたのですが、それも今日の言葉を以ていへば、所謂かつぎに來るといふやうなのが上等の部で中には難有屋の神主然としたやうな論で、盛んに神風が必ず吹くといふことを主張して居る有志家も見受けました。つまり狹い所に跼蹐として、束縛されて居なければならぬのですから、交はらんと欲するも人なく、事へんと欲するも師なしといふ狀態で、青年の者には實に堪へられなかつたのです。國家の存亡如何をさへ氣遣て居るといふ世の中に、いやそれは古格に背くとか、いやそれは先例に有るとか無いとか、些細たる事で以ていじめられたりする。少しく危言を吐くと、直に古老の機嫌に障つたり、私の十二、三歳の時に、擊劍の稽古をはじめると、一月たゝぬ中に關白から書付がまはつた。近頃少年の公家が劍術の稽古をするといふ評判がある。よくない、止めたらよからうとかういふ次第でありました。』とあるが、西園寺

公は古老の顔色を憚かり、關白の察度に凸むほど、左樣に柔順な少年ではなかつたらしい。それに關聯して北越征討後、京師に於て立命館なる私塾を開いたが、時事討論をして京畿の諸生を集合したゝめ京都府廳より差止を命ぜられた。西園寺公も謹愼仰付られたが、立命館閉鎖後も暫らくその劍術道場は存續してゐたやうである。

『私共がまだ十二、三ぐらゐの兒で、何にも知らぬながらにも、頻に慷慨してゐるやうなしだいで、喩へば稽古事でも、元來公卿の家では、中世以後の儀式的のことを多く學ぶのであつたが、そんなことを覺えたところでしかたがない、畢竟そんな馬鹿なことをしてをつたから今日のやうな王室式微の狀態になつたんだと云ふやうな、公卿は多くさう云ふやうな風潮に傾いてをりました。

全體京都に限らず何處でもさうでしたらうが、この頃公卿の政見に關する黨派とでも云ふやうなものを類別して見ると、第一勤王、これには王政復古がしたいと云ふものと、單に皇室の尊嚴を保ち、名分が正したいと云ふものとの二つがあつたやうです。次が佐幕黨、これにも幕府を佐けて勤王をなさしむると云ふのと、單に討幕黨に對するのと二つがあつたやうです。それから討幕黨、それから開國派、それから攘夷です、この開國派は公卿には殆んどなかつたが、それでも二、三人はあつたと思ひます。

醍醐侯爵なども、開國論者であつたと記憶します。さて京都の公卿のうちに、佐幕派があつたと云ふと隨分變に聞えます。すぐ幕府の威力が怖いからであらうとか、或は鼻藥でも貰つたからであらうかと聞えますが、勿論さう云ふのもあつたでせうが、必ずしも夫ばかりでもなかつたのです。聊か心あるに係はらず、佐幕を唱へた者があるのです。夫は勿論長州征伐も始まらぬ先であつて、幕府の實力をしらぬからであつたでせうがかう云ふ譯であつたのです。

幕府が腐敗したとは云へ、要するに三百諸侯の上に立つて秩序を保つてゐる、そこへ持つて來て脫藩の靑二才やら、有志家とか云ふ亂暴ものやら、さう云ふ者が集つて、幕府を倒すと云つたところが、それは中なか行くものではない、一度さう云ふことをして秩序を破つたならば、幕府だけは或は倒れるかも知れないが、その幕府倒れた後に、朝廷の力をもつて三百諸侯を制御することは思ひも寄らぬ、たとひ一度取つたところが、すぐまた賴朝とか家康とかゞ來ればまだよいが、或はあとが、天下の大亂になつて、人民が長く塗炭の苦しみを受けるかも知れぬ。（中略）要するに社會の實勢を看破するの卓識がなかつたからなので、今日のある一派が頻りに政黨を憎惡するのも、必ずしもためにするばかりでもないのと同じやうなものでした。』と。

時勢はあはたゞしく過ぎた。慶應二年十二月二十五日、勤王の運動が頂點に達しようとした時、孝明天皇が崩御あらせられた。聖壽三十六、弘化三年御踐祚以來、一日たりとも叡慮の安まらせたまふた日とてはなかつたのであつた。そして、慶應三年正月九日、明治天皇の御踐祚があつて、二條齊敬

が攝政として難局を處理してゆくことになり、越えて十五日皇紀振肅の號令が下り、幕譴にあつた九條尚忠以下九名。同二十五日には、有栖川宮熾仁親王はじめ九名、同二十九日には、常陸宮晃親王以下二十四名の幽閉を免ぜられ、岩倉具視も入京を許された。

王政復古の曉鐘が響いて來た。（拙著歷代內閣物語參照）

西園寺公は改革の大號令と共に上參與となり、薩長の志士を昇殿させ「やがては大久保大納言、井上參議といふやうなものが新政を執るであらう」と先見の明を誇示したが、小御所會議の激論に大いに正論を吐露したことは前述の通りである。

『伏見に戰端が開けたとの報が宮中に達した。すると某藩から出た參與の某々が、（廣島藩の辻將曹）戰爭が始まつたらこれは私鬪にしておしまひなさい。然らざれば他日朝廷のために、如何なる憂を遺すかも知れませんと云つた。その時私は言下に、此の戰をもつて私鬪とするが如きことあらば、天下の大事去ると云つた。ところが岩倉が側にをつて、思はず知らず、

「小僧よく見た、此の戰を私鬪にしてはどうもならんわい、」

と叫んだ。ぜんたい岩倉と云ふ人は、其の頃は侃々諤々と云ふことを口癖に云つて、詞づかひなども切口上であつて、小僧には相違ないが、同席に向つて殊にかくの如き席上にて、小僧などゝは決して云はぬ人であつた。

此の時はよほど嬉しかつたとみえる。實は此の際は油斷のならない刹那であつて、ずいぶん陰謀（アンドリーグ）もあつた時です。私も賛成を得てほつと息を吐いたことを覺えてをります』と。

伏見の役は明治元年正月三日であつた。公は二十歳になつてゐた。その五日には山陰道鎭撫總督に補せられた。それは萬一勤王軍が蹉躓した際、御還幸を仰ぐがための準備であつた。

その日早朝公は綠の鎧下にもみ烏帽子と云ふ姿で、馬上で參內し、薩長二藩の隊士をおのおの一小隊づゝ、率ゐて出發した。西園寺家の諸太夫、濱崎和泉守、幸前肥後守、用人山口筑後介、小谷左京、近習竹內刑部等が扈從した。

『何處から持つて來たか、薩人が妙な野戰砲のやうなものを二つばかり持つて來て、車〻何もないから牛車の上か何かに乘せて、龜山の城の方へ向けると大騷動がはじまつて、直に降參と云ふやうなことになつた。無論、初めから朝廷に反對する考へもなかつたでせうし、降參と云ふのは少し無理ですがさう云つてゐました。その時龜山から我が陣所へ使者が來た。それが此方から取次に出たものの顏を見て驚いた。その取次に出た者は以前龜山の城下で按摩をしてゐたとか云ふので、先方はいよいよ驚いた。按摩にまで化けて、探索に入つてゐたんではやり切れぬと、龜山方では大きに狼狽へたと云ふ滑稽談がある。』

山陰道鎭撫總督の一行は、双にちぬらずして到る處で恭順を盟はせた。遲ればせにとどいた錦旗は、

京都の相撲大關で華の峰吉と云ふのが持つてゐた。（釋瓢齋氏の「鎭撫使さんとお加代」參照）

十八日になつて一行は丹後の宮津へ入つた。宮津もわけなく歸順した。二月五日には鳥取を唱へて、出雲の松江へ入つた。その比は宮津から黒田嘉右衞門が加はつて、兵卒人夫合して三千五百位になつてゐた。松江は敵對しそうに見えてゐたが、これも何のことなく歸順したので三月三日、杵築へ入つた。一行はそれから作州津山へ出て津山から姫路、それから神戸へ出て大坂へ凱旋した。明治天皇も京坂の戰雲收つて海軍檢閲のため大坂へ行幸された。因みに木村毅氏の考證に成る慶應四戊辰年御勅使樣御通兩期日家々酒代草り入用取調帳とか御宿割或は勅使西園寺殿御本營なる宿札が作州勝間田驛に遺つて居り、尾佐竹猛博士も「御用日記」を祕藏されてゐる。

公は大阪で行幸を迎へ、丹波の弓箭組もまた公の晴れの凱旋を迎へた。此の時弓箭組の一行中にゐた中川祿左衞門の長男小十郎は、後に中川武平太の養子となり、公に隨從して今日に及んでゐる。

その時東北の歸順しない諸藩を征伐してゐた。公は越後口から進んでゐる東山道の官軍を援助することになり、四月二十三日、北陸道鎭撫總督に補せられて、薩長の兵四五百を率ゐて征途についた。

『會津侯の歸順がかなつて城明渡しがすんだその後であつたが、正親町と私と、私は越後口から往つてをり、正親町は白河口から往つてゐた。今の伯爵の養父です。それともう一人貴族院議員渡邊昇男爵ではなかつたかと思ふ——或は違ふかも知れぬが——と三人で、會津の城の陷ちた後へ入つて見た。その時なども屍體が澤山庭の砂を堀返してその中へ埋めてある。夾侯を積んで砲丸を防禦したのが、そのまゝあると云ふやうなことで慘狀を極めてをつた。

それから、その前、まだ城の落ちない時に、殷殷たる砲聲を聞きながら、城下まで迫つて往つて、私は藩士の家か何か知らぬが一軒横領してをつた。何んでも一週間ほどそこにをつたと思つてをりますが、どうも井戸の水が變な臭氣がして困るけれども、ほかに水がないものですから、それを飲んでゐた。ところが日にまして臭氣が甚だしい、しかたがないから井戸がへをしようと云ふので、皆寄つて井戸がへをやりかけると、屍骸があつた。

またやると亦あがつた。たうとう五つばかり出した。その水を一週間ばかり飲んでをつたのです。』（陶庵隨筆に據る）

公はかうして征戰の辛苦をつぶさに嘗めた。それは公の報國の精神にもとづくことは勿論のことであるが、潔癖な公としてはそんな報効では滿足しないことがあつた。

明治二年正月五日、急に東京に出で越後府知事、次いで廿四日新潟府知事の辭表を上つたが、三月廿五日三等陸軍將の官職さへ辭任して、公はたゞ日新の學問のみを志し、何とかして洋行の一念を貫徹したいと焦慮した。

卽ち明治二年十月に上表して曰く、

臣公望誠惶頓首々々謹で言上す臣去月命を乞はずして闕下を辭す臣曾て思ふ既に遊學の願を發し又爵位を解く陛下臣の愚衷を察し前後盡く垂憐を賜ふ四方は卽ち男子の志なり天下の士に交り研究するに非ずんば不才終に天恩に報じ難し而進退一々朝廷を煩はす可らず此に於て直に上途又命を乞はず既に而して臣に敎るに不律の罪を以てする者あり臣亦熟之を考るに初め東京勤學の許を蒙り未だ遊歷の願を發せず況んや闕下を進退するをや其放肆不律罪實に誅に當る臣過を悔ひ非を思ふ恐懼戰慄實に地に身を容るゝなし卽ち西京私邸に於て門を閉蓼を席し敢朝廷を仰望す伏て願ふ速に臣の罪跡を案じ以て律を正すを乞に辭を知らず臣公望誠惶々々頓首々々謹言

藤原公望

西園寺公の英氣潑溂たるところ一切の官位を辭し、洋行を企て、一世を驚かした。

西園寺公の外遊異聞

附「歐羅巴紀遊抜書」竹軒夜客望稿

一ゴンクール日記抄」「蜻蛉集」

西園寺公が洋行の素志は維新前岩倉具視卿に洩され、北越征討を了つて上京された時、大村益次郎、木戸孝允等の盡力に依つて明治二年十二月十八日長崎表留學聽許の事は前述の通りである。當時の長崎は外國文化の咽喉であつた。公は舍密館で開成所のフランス語に磨きをかけた。

一年近く長崎で勉強してゐると、いよいよフランスの留學が許された。あまりはしやいだことのない公も、此の時ばかりは跳りあがつて喜んだといふ。

西園寺公の外遊と前後して各方面からも外遊するものが多かつた。彰義隊に擁立せられて幽閉の苦を嘗めさせられてゐた北白川宮能久王殿下も、『英國留學報效前非を贖はん』と奏請して獨逸に留學され、嘉彰親王も英國に留學された。森有禮も少辨務使として米國に駐劄した。

公は黒田帶刀など三十餘名の留學生と行をともにした。その時フランスの留學生は、いづれも年千弗の支給を受けることになつてゐたが、公は特に千四百弗を給せられた。けれども西園寺公はその特權を嫌つて他の留學生同樣千弗を受けることにした。

乘船は米國汽船コスタリカ號、その船も公が曾つて京都から品川まで乘つた對島侯の持船と同じやうに外輪船であつた。大衆作家吉川英治氏所藏の西園寺公自筆の書幅にも、（公の秘書官たりし松本剛吉の箱書がある。）

「生是迂拙男死爲忠義鬼何時爲鬼照青史」君不見北畠之子源納言十七鎭定東北藩年二十空尸位何時爲鬼照青史」是余在越前製庚午冬書以鶴洲先生一粲時將遊海外船發前一日也竹軒望書と記してある。

出發の年月日は、竹越與三郎氏の著『陶庵公』に依ると明治四年正月となつてゐるが、前述の詩賦に據つても筆者の考證によれば、明治三年冬と思惟される。尙公の書簡に從つて、船中で費した日數と米大統領に會見した日時から推しても、辭令の出た明治三年十二月上旬と見るのが至當であらう。何はともあれ多年の宿望がかなつた公の喜びは、たとふるにものもないほどであつた。公の外遊中の留守は家職の法集三がいつさいを引きうけて、公の實弟威麿を補佐する傍ら、公の生母千代浦刀自のめんだうを見ることになつた。西園寺公は威麿に家督を讓つて出發されたのである。

千代浦刀自は公の實父德大寺公純の側室であつた。公は途中のことからフランスに到着してからの見聞を仔細に認めて故國へ送つた。それは毛筆で認めたもので、法家に保存せられてゐて近年になつて西園寺家へ返納したのを先年小泉策太郎氏が公の許可を得て、寫眞版にし、百部だけ限定版として好事家に頒つてゐる。それは、『歐羅巴紀遊拔書』と題し、『竹軒夜客望稿』と雅號を入れたものである。（文藝春秋發、參照）

『此度の行は初、橫濱より太平洋に乘出し、東を指して走ること二十餘日、アメリカ州サンフランシスコに着し、猶又蒸汽車にて東に走り、更にニウヨルクより大西洋に航し、又東向、走ること十餘日、則ち英國に到れり。然るに元來イギリスは裏日本より西に當れる國にして、この國より更に又東に向つて乘出さば、則ち米國に來るべし。此度實地を經歷して、世界の圓形なることは疑ふべからざるを知る。』

公は冒頭に先づこう記いて、丹念に東西二半球の世界略圖を描き、己のとつた航路に線を曳いて說明してゐる。

ワシントンでは白堊館（ホワイト・ハウス）を訪ふて大統領グラントに逢つた。

『辛未正月十四日、大統領に面會す、元來此國は天子なく、大統領とて入札の入撰にて、四年交代の輪番もちの政治なり。大共和政治とて、西洋には多くあり。

さて大統領の出るを待つ。暫して大統領夫婦及外務卿、其外高官三役人四、五人。いづれも夫婦づれ或は娘を伴ひ出て列立す。扨て外務卿、望一郎（公は留學前に平民らしく望一郎と改稱した、田宮坊太郎の芝居を見てつけたとは竹越氏のしるすところである。）諸人名を順々に呼ぶ、則ち進んで大統領の前に到り、互に手を執り長揖して座に復す。其後更に進んで該役人及細君等にあいさつし、座

敷など見物閑談すること暫し、是にてしまひ也。

日本にて異人參内等とは大いに事變れり、其外飾なきさま眞に悦ぶべし。總て米人はイギリスなどの如く虚喝を用ひず、各其國を愛し、一種の嘉風俗あり。

各大統領の邸は役宅にてさまで立派ならず、婦人衣服なども質素なるものなり。家來なども二、三人より見えざりし、且我われと面せし時も新文紙屋（新聞記者）其席に來り互に談話し、次弟を書認明朝巳に賣出せり、其淡薄可想各大統領の役料は一ケ年日本之一萬五千兩に當るといふ。』

シンガポールに寄港した時は、支那人街を觀て左の如く嗟嘆してゐるが、湖南先生以つて奈何となすであらう？

『其の風俗頗る卑劣にして恥を知らず、誠に厭ふべし、嗚呼堂堂中國聖人之所生何如此く甚に到哉』と。湖南先生の名著「燕山楚水」と比較對照の妙趣がある。

西園寺公の「歐羅巴紀遊抜書」には、物價なども細かく調べて書いてある。

『巻煙草百本入一箱が、十兩から十四、五兩、蜜柑二十が十兩、一つが二歩にあたる』とも書いてある。サンキスト産のオレンヂが、千疋屋あたりで一個四、五十錢しても驚かない公も、此の當時は、蜜柑と云へば紀州蜜柑と同じやうに見てゐたので、よけい高いと思つたのであらう。しかし、その高い煙草と蜜柑は汽車の中のことであつた。ワシントンの街では二歩で蜜柑を五つ買つてゐる。

ニューヨークで早速洋服を新調したところが、極上が一着七十五兩であつた。英國へ往くとよほど安價で、一着五十兩、フランスへ往くと三十五、六兩、シャムパンの上等が五兩二歩、下等が三兩、フランスでは、それが一兩で買へる。こんな調子であるから『その他も推して知るべし』と書いてある。

『元來、西洋の風俗なり、男女少長に不限、極ごく知己になれば互に口吸す。日本人より見れば堪えざる事なれども、一種の禮となりて情の篤きを彰すなり、奇と云ふべし。蓋し夷狄の惡風眞に厭ふべし』とキツスに惱んでゐるのは面白いではないか？

ロンドンでは、英雄館、水晶宮、博物館、公園等を見物して、事ごとに感嘆した。殊に動物園の猛獸については詳細に描寫してある。幕臣栗本鋤雲の養子定次郎がパリーからロンドンに出張してゐたので之れに伴はれ憧憬の巴里行となつた。

西園寺公がロンドンを發してパリーに入つたのは、明治四年二月七日（公自記には二月六日）である。それを西曆に換算すれば、一八七一年三月廿九日に當る。

當時フランスは普佛戰爭に敗北して、巴里も支離滅裂コンミユーン黨の變亂が勃發してゐた。コンミユーンがモンマルトルに火蓋を切つたのは、三月十八日で、政府がその對策に手を燒いてチエールをして、敵軍ドイツ政府に鎭定のため、八萬の捕虜を釋放して貰ふ條約の出來たのが三月廿八日であ

る。兩軍對峙して物情怯々たるパリーへ、西園寺公を乘せた汽車は入つたのであるから、文字通り嵐の前の靜寂であつた。

『一撥蜂起、處々騷動到り、今日未だ止まずまことに難儀なり』と公の手記にもある如く、一行が巴里に上陸第一歩を印した時、有名なコンミューン黨の叛亂には親しく市街戰を見物し、邦人駒留某が『ムッシュウ』『シトワイヤン』の問答を逸話に殘したが、バリケードの構築には西園寺公も手傳つたとさへ傳へられてゐる。

筆者が毛利公爵家編纂員時代書庫より發見した西園寺公の橋本實梁に宛てた書簡中當時の戰況を報じて「政府は舊將マクマホンと云ふ人を擧げ、總督に命じ、遂に三月下旬大擧して巴理斯を襲へり。當日の紛擾蓋し前古未曾有のところ、彈丸は雨の如く市街に迸飛し、まさに放火黒煙天地を包容し、老少路頭に號泣し子を失ふ者あり、親を遺す者あり、或は盜賊之に乘じ、その光景筆紙に盡すべきにあらず」と謂つてゐる。

マルクスやレニンは「それは全く全ヨーロッパの勞働者に社會革命の問題を根本的に解決する鍵を與へた」と、パリ・コンミューンを讃美してゐるが、公は疑もなく之れを叛賊とし愚民とし、暴徒と觀察してゐる。公の師事したエミイル・アコラスはパリ・コンミューンの法科大學長に推薦され、第一インターナシヨナル第二回大會の行はれた一八六七年九月、ジュネエヴに「平和及び自由同盟」の發會式を擧げ、ガリバルデイ、エドガル、キネエ、バークニン等の音頭取となつた過激派で、酒井雄三郎の飜譯した「政理新論」の著者としても有名な社會主義學者であつた。

西園寺公が明白に亞哥剌士門人西園寺公望序と署名してゐる、「政理新論」の序文には「フランスのエミイル先生名はアコラス學殖淵邃、書を著はして治道を論じ名づけて政理新論と曰ふ。けだし法國はルツソオ、モンテスキユウより以來、政術を論ずる者代々人に乏しからず……而してその百世を指導して謬らざるに到つては、けだし未だきかざる也云々」とある如く、ルツソオの高弟として「自然に還れ」とか「衆庶こそ主宰者」と思惟するのが、その學說の根本精神であつたのである。（木村毅氏考證參照）

西園寺公が淸華の嫡流として明治初年、特種階級の子女と結婚を望んだ如き奇矯なる思想は、歸朝後東洋自由新聞を創刊した心理と共になるほどと首肯されるではないか？

安藤德器氏に乞高教

中外日報所載、安藤氏の「西園寺公と湖南先生」中（4）に「公の師事したエミール・アコラスはパリ・コムミユーンの法科大學長に推薦され」とあるが、事實でしようか、筆者樣に伺ひますを願ひます。私もアコラスのことを知りたいと思つてゐるところどうぞ御示教か死刑か遠島かになつてゐる譯だと思ひますが如何でしよう。私の持つてゐるバリ・コムミユンの記錄には右の事實がありません。若し右の事實があるとすれば、アコラスは徵役

しよう。この會を牛耳つたのはショデエ・モルニエ等だと聞いてゐますが、この件に就いても安藤氏の御高教を仰ぎたく存じます。

尤もこの同盟の第二回大會には、それが餘りに曖昧なものだと言ふのでバークニンやルクリユは脫會してゐるので決して安藤氏のいはれるやうな「過激派」ではなかつたと思ひますが如何ですか。横槍のやうで少々いやですが、安藤氏のお答が頂ければ幸ひです。（石川三四郎）

石川三四郎氏へ回答

木村毅氏の「西園寺公望」にアコラスのことは L' Internationale: Document et Souvenirs 1865=1868. P.37 に據ると「平和及び自由同盟」の主動者になつてゐるさうです。パリ、コムミューンでは Doyen de la faculté de Droit に推擧されてゐますから、法學部長の職名と飜譯しても差支はないと思ひます。勿論彼はその時、スヰスに客遊中でパリにゐなかつたから難を脫れて死刑遠島にならなかつたと思惟します。

「アコラスは一八六七年のジユネーブに於ける全歐民主教會結成の會合の中心頭目で、それからパリーに歸ると共に一ケ年間投獄された」とあります。ギヨームの「ランテルナショナル――その文獻と回想」には過激派の頭目になつてゐるさうですが、西園寺公に歸國を勸告した時は文部省のアンスペクトル・セネラールになつてゐますから、總視學の職に就くほど漸次軟化したと思考します。木村毅氏は「西園寺公留學時代のフランス」で「今日の左翼の史家からはブルジヨア急進主義者の會合として片付けられるものではあつたが、併しその當時に於ては、インターナショナルの出席者は全部これに招待されて（バークニンを中心とした「國際民主々義同盟」の前身である、フラテルニテ・アンテルナショナルなる秘密結社のことか？）共に自由平和の運動をなすといふ決議に參加したのである」とアコラスがダラ幹でなかつたやうに强調されてゐます。私は幼年學校出身の愛國主義者ですからフランス語は習ひましたが、大杉榮とは凡そ反對の立場に立つ者です。青二才がこの方面の元老石川先生に生意氣をいふやうで恐縮ですが何卒博學なる木村毅氏へ御紹介になり御檢討あらんことを切望いたします。

尙ほ餘白を藉り、本書の讀者にお願ひします。何卒拙稿はかうした反駁の材料が集めたいために、未熟なるまゝ發表させて戴いたので、いづれ訂正版にする豫定ですからどし〳〵御心付の點を忌憚なく（東京市小石川區久堅町七四筆者宛）御示敎下されたく、少しでも巷の學究として讀者と共に勉强する筆者の意圖だけを買つて下さい。石川先生にこの點先づ第一に感謝いたします。第二に貴重なる紙面を埋めさせた淚骨先生に感謝いたします。

扨て西園寺公はコント・モンブランの肝入でリユ・ド・バツク街にある私塾に入學した。前田正名の紹介したことは云ふ迄もなからう。

『十六日より望一郎は學校に入塾して在り、此地の學生は元より各國より遊學の生徒澤山ありて愉快に候』

そして、その日記に『辛未春二月二十七日夜于書佛郎西巴理斯城中于時五更』とあるところからみると、物騷とは云ひながら、悠々とアパートで手簡も書けば、學校へも通ふことができたし、そのうへ演戲や寄席を覗いて見る餘裕もあつた。

その當時の演戲であるから、戰爭氣分の橫溢したものが多かつたであらうが、公はそれを見て、『日本のやうに淫猥なことはなさず』と賞めてゐる。

そして演戯は、女の藝は女が、男の藝は男がすると云つて感心してゐる一方では、棧敷で物が食へないので、腹が減つて弱つたなどと無邪氣な感想も述べてゐる。

よほどのくひしんぼう、今日の通人になつただけに、食物も丹念に記して、

朝五つ頃、茶果及びパン抔少し喫す。

正午、パン、鷄肉、吸物、青物、酒を少し。

七つ頃、パン、吸物、(ソップ)魚類、牛肉、或は羊、芋ニンジン抔の煮、果物ブドウ酒、

右通例の食事にて望一郎此節は右の如く食せり。

又一種、

朝五つ頃、茶果、

四つ時朝飯、吸物、魚類、肉類二色、パン、ブドウ酒、

七つ時前、吸物、魚、鳥、肉三色斗、青物、菓子三色斗、果物三色斗、

初夜過頃、パン、牛肉冷煮、菓子二色斗、

右は通例より少しよき食事

などと定食のいろいろを記し、宿料などもその値段を詳しく調べて、『上等は一日五兩から七、八兩、下等は一日の賄が三歩二歩一歩とあつて、上等に比べると乞食のやうだけれども、それでも日本に比べると大納言、參議位のくらしだ』と云ふやうなことも書いてある。

物資の豊でない公卿の臺所、里芋と茶粥で育つた公としては、安料理屋の定食でもすいぶんぜいたくに見えたことと想像せられる。

公はコンミウユーン黨の亂が平定して後、スウイツルランドのジユネーヴへ行つて、暫時或る辯護士の家に下宿して佛語を學んでゐたが、この辯護士は三人兄弟で、長兄は同國のコンセーユ・デ・タア即ち國務院に列席してゐた。

然るにスヰスは氣候が餘りに寒いので南歐ニースに轉地する心算であつた。が、學資の都合上マルセーユに赴き、更にバリーへ歸つてミルマンの私塾に入つた。西園寺公が暫時マルセーユに居たので、ミルマンは公の佛語にマルセーユ訛があるとやかましく匡正したといふ。ミルマンの子供は當時八九歳で西園寺公の眷愛を蒙つたが、後アルサス州の知事となり公が、平和會議に出席した時は、懷しがつて頻りに寫眞などを送り會ひたがつてゐたが、双方共に多忙で遂にその機會がなかつた。

公は幾もなくアコラスの門に入り法律を習修した。アコラスは隣國スイスの大學總長であり、その著民法論の第一卷は學者の中でも有名であつた。

西園寺公がアコラスの高弟、クレマンソーやフロッケーと相知つたのも此間に於てであつた。クレマンソーは醫者が本業で政治が飯よりも好きといふ人物、二、三の同志と協力して新聞を發行するこ

ととなつた。その時西園寺公がオーロールと命名したが、ジユスチース（正義）として發行した。然るにロシア政府の依頼に依つてその機關紙にはオーロールを取つたといふ逸話がある。公はアコラスのもとで準備敎育を受け、パリ大學に入つてその課程を卒業した。その免許狀は後年公の關係した明治大學に保存されてあつたとは竹越三叉氏の謂ふ通りであらう。

西園寺公は明治三年、本國を出た時は給費生であつたが、明治六年十月願に依り自費留學生となつた。賞典祿三百石を賣つて金に代へたとも傳へられてゐるが、公は學校の試驗が迫ると、その下宿屋へ素性の分らぬ美人を引き込み、字引と女性に首引で勉強したといふ。公は實に人生の抔から泡も淀味も一氣に呑み乾した風流才子であつたのだ。

公がガンベッタを訪問した時のことは、やはり「陶庵隨筆」の中にある。

『余が始めて巴里に遊びし頃、ガンベッタの聲明其の絶頂に達したる時にして、世人の彼を仰ぐこと、啻に泰山北斗の如きのみならず、余亦好奇心にかられて、一日親友の紹介を得て彼を訪ふや、四方山の談の末に、彼れ余に問ふに、日本に於ける新聞紙のことを以てして、余が新聞紙の發行に關しては、日本政府が何らの制限法をも、何等の取締法をも設けざるを語るや、彼大いに驚きて曰く、果して然るか、日本民族の美、以て知るべきなり、余は一日たりとも如レ此國に於て政（まつりごと）をなす事を得ば、我が願ひ足らん、是れ理想の自由境たるべしと、その後間もなく新聞條例は發布せられ、

ガンベッタが理想國は須臾（しゅゆ）にして消え失せぬ』とある。

明治三十三年再遊の際、西園寺公がガンベッタを吊ふた詩に、

來宿南洋第幾灣　濤聲拍枕夢頻還　起憑欄角無涯恨　月轉含翁埋骨山

とあつた。西園寺公の平民的悠遊はその財布に忽ち影響して、パリー仕込の刀劍に正宗貞宗など、銘刻しては小遣錢を稼いだとも傳へられて居るが、パリーの日本公使館へ囑託として今日の書記生のやうな仕事をしたこともあつた。明治十年西南戰爭には、西郷黨へ武器を賣込むインチキ商人を牽制したり、或は公使館から長州分取の鹵獲砲の調査を命ぜられたりした。そこで公は親友のクレマンソーにその調査を申送つた。

當時クレマンソーは地中海沿岸のニースの町近く住んでゐたが、わざ〳〵巴里へ出かけて來たものである。その前ルーブル圖書館に保存せられてゐる稿本の閲覽について助力をしてはもらへまいかと頼んでやつたので、クレマンソーからは、それを引受けた、廢兵院のはうも案内しようとの返事が來て、彼のはうからホテルを尋ねることに打合せは出來てゐたのだ。

捜す目的物は階上の陳列室にはどうしても見當らないので、監視人に尋ねると、階下にあるのだとのことであつた。なるほど、一いち點檢して行くと、外國國旗陳列室の入口の土間の廊下に、それは

亞剌比亞や支那の大砲と並べて置いてあつた。公は用意の手帳を出して見取圖を作り、それから砲身に彫刻してある紋章と文字を調べて見た。それは、Canon et Affut, No. 332 大砲と砲架の部第三三二號で、

子の九番
一貫目玉、試藥五百目
地岩倉七分
天保十五年甲辰
郡司喜平治信安作

とあつた。因にアンバリードなる奈翁一世の墓側には正面を入りて、數歩前庭の左右に古砲數十門が陳列してあるが、中に一門長州毛利家の定紋たる一ツ星を附し、「嘉永七甲寅年秋九月於江戸葛飾邸鑄之」の銘があり、一八六四年(元治元年)下ノ關を砲撃せる佛國ジョーレス提督が之を占領して奈翁一世に献じたことが判明する。(拙著幕末海戰記參照)

西園寺公が大シャリ節の民謠を引いて『男ならお槍かつがせお仲間をつれて攻めて行きたや下ノ關女ながらも武士の妻まさかの時はしめ襷、三韓退治が手本ぢやそうな……』と一流の皮肉諧謔を飛ばされたことでもあらう?

後年公が平和會議に列席した時、佛國の虎クレマンソーと相會し舊交を温めたが、隨從の近衞文麿公の思出話を引用して見やう。

『この點でさすがにクレマンソーの西園寺公に對する批評は甚だ肯綮に當つてゐると思ふ。曰く——西園寺公は法律學の教授エミイル・アコラス先生の講義をきいてゐた頃の私とは同門の舊友だが、當時は激烈な性格の持主であつたのに、今では全く皮肉屋となつてゐる』と。

卽ち西園寺公の冷々淡々たるは、通り一ぺんのそれではない。たとへば熱鐵を打ち、鍛へ、更に冷水に洗ひ清めて氷の刃となしたやうに、生來の激情に伴ひ易い粗硬な所は、公卿と云ふ傳統や、京都巴里の風流教養で磨滅し落し、これをフランスの自由思想、唯物思想で鍛へ上げて出來たのだ』と。

アコラスが文部省の總視學となつて地方へ行くときは、その洋服をも細々と注意したといふ公は、パリジャンそこのけの伊達男であつたに相違ない。近衞公の懐舊談に、

『何でも伯林公使館書記生三宮義胤の紹介で、ドイツの有名な經濟學者が尋ねて來たことがある。私は留守で會へなかつたのだが、今から思ふと、あれがマルクスであつたやうな氣がしてならない』と。(公が資本論を取寄せて讀まれたことは木村毅氏著にも詳述されてある)

あとで此の話を持出してその路の研究者に聞いて見たら、公の師エミイル・アコラスは、その著書中にマルクスのことも論じてあるさうだし、また、ローザンヌの第一インターナショナルの大會にも

出席してをる。

だから、その門下なる西園寺公の許を、マルクスが訪ねて來たやうなことも無いとは限らない、とのことである。

後來の研究によつて果してマルクスが、西園寺公を訪問したやうな事が文獻に徵して確實になつたら、此れ又一つの好話材たるを失はぬであらう』とある。マルクス・ボーイ以て如何となす？

佛國の文豪エドモン、エ・ジユル、ド・ゴンクールの日記（その文學的生涯の記憶）Edmond Et jules de Goncourt. Journal Mémoires de La vie litteraire に據れば、一八七五年―一八七七年に巴里の美術商ビユルチイ（Burty）の客間で西園寺公とゴンクールは三四度會つて居り、その印象を彼の日記に誌してゐる。今その要所を掲用して筆者の友人高橋邦太郎君の飜譯したものを登載して見やう。

Année 1875

Samedi 16 octobre.—Le petit prince Sayonsi a donnée, ces jours-ci, ses sabres de familles à Burty. En les donnant le prince s'est excusé du mauvais état de ses armes, disant que ses amis s'en servaient, à Paris, pour couper les bouchons de champagne. oui, voilà, a quoi sont tombés ces farouches lames, ces aciers superbes ! Je remarquais sur la lame du petit sabre, des ondulations presque imperceptibles, en forme de nuages, et a propos de ces ondulations, le prince Sayounsi, a dit a Burty qu' un japonais en

comptant de nombre de nuages compris dans un espace, qu' il lui désignait entre ses deux ongles, y lisait la signature de l'armurier. Ces lames, s'est l'idéal de ce beau ton cruel du métal. Je me rappelais, en les maniant, une sabre que J'ai vu dernièrement. Une petite araignée d'or filait sa toile, et les fils presque invisibles de sa trame, des eendaient sur la lame, sur le fourreau apparaissant sous les miroitements du jour, en leurs matières différentes, comme une toile d'araignée baignée de reseé sous le soleil du matin.

一八七五年十月十六日、土曜。

頃日、若き公子西園寺が、家重代の大小をビユルチイに贈つた。これを贈るに當つて、公子はひどく損じてゐるのは巴里で友達が三鞭酒の口を切るのに用ひた故であると云ひ譯をした。この素晴しい、百錬の利刀がさりとは慘めにも成り下つたものである。

私は小刀の刃に、見分け難い程の雲形の波を見附けた。

この雲形といへば、公子西園寺はビユルチイに自分の指の爪と爪とで極く狭い幅をつくつてみせながら、日本人ならば、こんな狭い幅の中に含まれた雲形の數を算へ上げ、且、刀匠の銘を讀み取る事が出來ると云つたとの事である。

この利刀こそ鋼の理想であり、死の金屬の殘酷な美しい調子の理想である。

しかも、この美しい金屬を飾る莊重、峻嚴な裝飾はどうであらう。私は大小を手に取り上げながら、

最近見た一本の刀を思ひ出した。小さい一匹の金の蜘蛛が巢を掛けてゐる。そして目に見えない位のその糸が双の上、鞘の上を走つて、陽光に透かしてみると、それぞれ異つた材料で出來てゐることを示して、丁度、蜘蛛の巢に宿つた露が朝日に輝くやうである。

Année 1876

Jeudi 17 février.—Je dîne aujourd'hui chez Burty, avec deux Japonais: le prince Sayounsi et un Japonais du commun.

Le prince, c'est le type du chinois, avec les yeux remontés, la bouche a grosses lèvres, la face enfantinement souriеuse; tout cela sous une raie au milieu de la tête, la raie du gandin Parisien.

L'autre est un type plus de son pays, il a une de ces figures cabossées de masques Japonais en carton ou en bois; sa barbe et ses cheveux sont faits d'un crin noir; les protubérances du sourcil, au-dessus du front, sont très détachées de sang, ne se tient jamais tranquille au centre, comme dans l'œil européen. On la rencontre toujours irritée ou animée par quelque passion de l'ame, en bas, en haut, dans les coins,—Cela donnant au regard un caractère fiévreusement étrange.

Tous deux ont une voix douce et musicale, des pieds d'une petitesse exquise, des moins doutées pour prendre les choses, de la préhension délicatement tatonnante des singes, Ce qui me frappe surtout chez eux, c'est l'absence d'estomac et de toute la tripaille matérielle qui remplit un ventre européen, et leur maigreur de lapin vidé et lexiquite de laures personnes flottent dans nos pantalons et nos redingotes, un peu à la façon de la petitesse d'animaux affublés dans les cirques de vêtements humains.

一八七六年二月十七日、

今日、ビュルチイ邸で二人の日本人と共に晩餐公子西園寺と、他の一人は平民。

公子は支那人の型。釣り上つた眼。厚い唇の口、あどけなく微笑をたゝえた顔、かういふ顔の造作が眞中から分けた髪の下に並んでゐる。髪の分け方は巴里の風流才子のそれである。

他の一人は、やゝ國粋的な型。紙、或は木の假面に見るやうな浮彫のやうな顔。髯も、髪も漆黒。額の下の眉の突起は甚だしく飛び離れてをり、いさゝか血走つた白眼の中の瞳は歐羅巴人のやうに決して、中央に凝つとしてゐない。何事か心中の情熱に焦慮してゐるのか、乃至興奮してゐるのか、下に、上に、左右に絶えず動いてゐるので、彼の視線が熱に浮かされてゐるやうな、奇怪なものに見へる。（光明寺三郎であらう？）

二人の聲は、優しい音樂的な聲、かあいらしい足、猿のやうに巧みに摑める、物を取るのに適した兩手。彼等にあつて、特に私の氣附いたのは、腹の小さな事で、歐羅巴人に有勝な、物質的な臟物の無いことである。そして、臟物を抜いた兎のやうな細い體が、痩軀が、歐羅巴人のズボンと、フロックコオトの中で宙に浮いてゐる、ざつと動物に人間の着物を着せた、曲藝團の動物といつた矮小さで

ある。

Année 1877

Jeudi 3 mai.—Ce soir, chez Burty, le prince Sayounsi dit, que trois choses avaient étonné et charmé son goût Japonais : les fraises, les cerises, les asperges. il disait aussi maintenant, rêver tout haut, tantôt en français, tantôt en Japonais. Comme on le questionnait, et qu' on lui demandait, dans quelle langue se formulaient ses idées, il nous avouait que les choses de droit, les choses artificielles venaient à lui, sous des formulaient ses idées, il nous avouait que les choses de droit, les choses artificielles venaient à lui, Sous des formules françaises ; les choses naturelles, les choses d'amour et autres, sous des formules Japonaises.

一八七七年五月三日。

今夜、ビュルチイ邸で、公子西園寺は、自分の趣味を驚かし且魅了したものが三つあると語つた。その三者とは苺と、櫻桃と、アスパラガスである。

更に、彼は今でも寢言を日本語で云つたり、佛蘭西語で云つたりするとも語つた。

そこで、何語で觀念が形成されるのかと我々が訊ねると、彼は、素直に法律に關することや、人工的な事物は佛蘭西語の言ひ廻し方で思ひ浮ぶし、自然的な事物、戀愛に關する事などは日本語の云ひ廻し方で思ひ浮ぶのであると述べた。

前記橋本實梁宛の書翰中にも「望一洋行後考るに、日本より洋行するには、此後なるべく老人を選ぶべし……。然らざれば實に西洋心醉の憂あり、且者情實を洞察すること不ㇾ能也。望一は何を以如ㇾ此言や。幸哉佛國大亂之地に來り、上下瓦 解之時ゆへ心見やすき也。譬ば、樹木の中心既に蠹し朽 廢と雖も其枝葉の青々たるを見ては誰か其良木たらざるを知らんや。一日大風之を倒すに至り始めて其朽廢既に久しきを、不ㇾ知、歐洲各國も猶此木之如きのみ」と洋行無用論を唱えてゐるが、然らば前後十年の長きに渉つて滯留した理由は如何にと考察するに、筆者は一敗地に塗れたフランスが對外的には「ドイツへの復讐、アルサス・ローレンの奪還」を目途とし、對内的にはコンミューン叛亂、王黨、共和黨、帝政黨の卍巴と紛糾する國民議會が、チエール、ガンベッタの努力によつて第三共和政を採用し、獨逸の賠償金五十億フランを辨償して財政的にも富國强兵の異常なる彈力を以つて復興した一事であり、西園寺公の靴裏を引き止めたのは決して蜂腰金髪の美人のみではなかつたと思考されるのである。木村毅氏はその著「西園寺公望」に「安藤德器氏は如何なる徑路から手に入れられたか知らぬが、當時の公の手紙數通を公表し、平常公の側近にある竹越與三郎氏の「西園寺公傳」の誤謬を訂正すると共に、コンミューンの件に對しては吾等長年の待望を充たして呉れられた。それは一昨々年四月、明治文化に「西園寺公のフランス留學について」と題して掲載せられた一文の中にあるのだが、稀有の珍材料なのに拘らず、今日迄何の反響も聞かないのは、或は流布の範圍の狹かつたのに依

るであらう」と過褒されてゐるが、筆者は今その全文を再錄して見やう。

在佛　西園寺望一郎より度會府知事橋本實梁へ　明治四年四月廿三日出

仕幸便一翰拜啓仕候先以薄暑之候相向候處益御清康御勤役雀躍不啻候偖者劣生事昨十二月廿五日米國に達し辛未正月上旬同合衆國首府華盛頓に到り大統領に面會仕其後又々大西洋より海路十有一日にて英に達し在英の所動府に有り十有三初六日初て佛の巴理斯に入方今は府下の學校に入塾致し先以無恙勉強仕候間乍憚御顧念被下間敷候扨又本州之近況如何哉西海邊浮浪屯集と此地にても種々風評あり蓋心に關するに不レ足べし。歐洲の光景段々在此地相探候得ば本州にて考居候とは相違し各國の盛衰其評論頗多端なり就中佛は昨年普に打負しより國内更に紛亂し遂に解兵之時より事起り共和政事を必とし姦猾無恥之徒大に愚民を煽動し以て干戈を用にいたり政府は是を鎭定する事不レ能却而此賊を避けベルサイユと云地に引移れり賊は則巴理斯に擬政府を僞立し頗暴威を張る是より政府兩立之形となり日々砲聲止む時なく萬民之疾苦實に不可言然とも賊徒の多くは各國浮浪之屯集其暴行日々相益し人心盡く去れり

政府は舊將マクマホンと云人を擧、總督に命じ遂に三月下旬大擧して巴里斯を襲へり當日之紛擾蓋前古未曾有のところ砲丸は如何市街に迸飛し當に放火黑煙天地を抱容し老少路頭に號叫し子を失者あり親を遺す者あり或者盜賊之に乘じ其光景非筆紙之可盡然どゝ人心之歸向するや政府巴理斯に入

や否是迄賊兵の爲め壓服せられし府下住民我も〳〵と携絶賊に向ふ其光景も又盛になりし既而政府之方大得勝賊兵敗走す政府之兵則四方に散て放火の殘賊を捕ふ、捕れば則盡く是を誅す其屍路頭に横れり歐洲には珍敷愉快之所置なり此戰凡三數日にて全平定すと雖佛國古來之寶品書籍多分燒失すと云前條に付而は人々誠に危急なりし然とも本州之學生には一人も怪我なく益々實地好き研究せり噫此後之結局如何あらん目を刮て傍觀致候抑近日歐洲之風儀開化に連れ華美に流れ殊に巴理斯は歐洲之中央にして奢侈を極め其人情之浮薄なるは厭べし實に天運之循環する人力之不及ところにして今十年を出でずして歐洲之一大變革たる鏡に就て見べし此時に在て第一世慕烈翁之如き大英雄之出在て救正するに非んば豈能是を改正せんや噫今日我本州之人々抑何等に注目すべきや實に東方一大秀傑之地を領しながら豈區々すべき時ならん大に民力を蓄へ大に人心を鼓舞し所謂大和魂なる者を練磨して天下の方向を一途天朝に歸向せしが更に秀傑之士を使して彌々外國情實を探り機會を待て皇威を他に輝に非んば何を以てか祖宗の靈を慰や然るに今日洋行之諸生を見るに或者は歐洲末年の奢侈を以國家之要務とし總而古豪傑用意運用之妙を不悟或者耶蘇之邪教に心醉し其國體如何を不解是を本州に行と欲し或者未だ曾て有爲傑出之士に不交いたずらに歐洲無賴之輕薄子と接し其議論を以て深く外國之情を得たりとする或者洋人に媚て國辱を不知など千緒萬端實に慷慨悲泣不啻候但中には憂國義烈の士ありと雖も些に百人に一なり嗚呼是を以て他日國家の柱石に備とす實是危哉望一

伏而考に此後若洋行して學問成就したる者あるも決而大に不可用先之を小吏に命じ篤と其議論を索り萬一共和政をとのふ者あらば一々斬首して天下に示すべし而天下之方向を定且刑法を嚴にして威を立に非んば徒に洋學生などを賴み以國家を保護せんや第一之急務是なり。

願ば閣下大に義を以人心を鼓舞あらせられ度候扨又尊息君今年は御洋行之由分袂の節御話し有候如何候哉望一之所見にては決て御進め不申候元より御見込次第に候得者乍恐實に確乎不拔之一大心志相定り不申候ては徒に歐洲人恰悧之風に流のみにて萬無益也蓋し是等之事は望一郎一人之所見のみ不惡御聞取願上候望一洋行をするには此後なるべく老人を撰ぶべし若通辯等は小兒ならでは不宜候得共讀書上にて其人の力を用て遣候わけては勉强次第にて中年以上と雖も前後の相違あるべからず然ざれば實に西洋心醉の憂あり且者情實を洞察すること不能也、望一は何を以如此言や幸哉佛國大亂之地に來り上下瓦解之時ゆへ心見やすき也譬ば樹木の中心已に蠹し朽廢すと雖も其枝葉青々たるを見ては誰其良木たらざるを知らんや一日大風之を倒すに到り始て其朽廢己に久しきを不知歐洲各國も猶此木之如きのみ望一幸佛木倒之地に來り其今日倒に非して前年より中心之朽しを知る所以なり噫徒に枝葉之盛を見て朽木たるを不知其朽木を學て本州を朽木に爲す誰か慷慨悲泣血淚潛々たらざるを得んや折角御勵精萬々祈望仕候誠に横濱之分袂街頭に散歩して燈臺以來など時如夢候得共五閲月一瞬夢過實に歲月之駸々たる何時か事業相立天恩之萬分を報候はんと堪慨然候實に近日歐州之景況其外申上事件胸間相溢候得共其元より寸猪之可盡にあらず擱筆仕候右者其後御安否伺旁實是狂生之妄言なにも御一笑相願候

辛未四月二十有六日認　　辱知公望　　頓首再拜

即ちパリ、コンミューン黨　叛亂と普軍に蹂躙された巴里の慘情が手に取る如く見ゆるではないか？西園寺公莫逆の友であつた山口縣三田尻光妙寺の滿田三郎が、名妓米八に生ませた築地小劇場の俳優東屋三郎の葬儀を公が出してやつた因緣は、パリのカフエー・アメリカンに於て當時浪漫派の巨匠テオフイル・ゴオチエの娘マンデース夫人の情人であつた光妙寺三郎と偶然邂逅し、滯佛中一種のパトロンとなつたのに由來する。

カフエー・アメリカンは木村毅氏の外遊に依つて「星旗樓異聞」なる一篇の小說化されてゐるが、西園寺公自身「往年余、亡友光妙寺三郎と此の樓に飮す。今を距る二十年、三郎曾つて、詩景琴情我奈如の句あり、余再び此を過ぎ、泣然禁ぜず、因つて二十八字を作る」と前置して、星旗樓題壁なる詩作に「琴情詩景夢茫々　二十年前舊酒場　無數垂楊生意盡　傷心不獨爲三郎」とある。これは西園寺公が駐墺公使となつて赴任の途次、巴里を過ぎた時の述懷で光妙寺三郎は長藩留學生として公より先にパリに在り、なか〳〵の風流才子でゴンクール翰林院女學士ジユウヂツト・ゴオチエの若き燕であつたと傳へられてゐる。

「忠臣藏」を佛語に飜譯した脚本を、東屋三郎が所藏してゐたが、惜しい哉大正震災に燒失して了つた。然しながら西園寺公が古今集を逐字譯したものをジユウヂットが韻文に佛譯し、山本芳翠が裝幀挿畫をして「蜻蛉集」と題し巴里で刊行されてゐる。原名 "Poémes dela Libellure" は稀有の美本で、西園寺公の所藏本は伊藤公の滄浪閣に收まつたといふが、筆者の友人　橋邦太郎君が昭和七年七月十六日「東京朝日新聞」に「蜻蛉集」に就て寄稿してゐるのを演繹して見やう。

『西園寺公望公が明治四年から明治十三年まで凡そ十年間、フランスに在つて審さにフランスの制度文物、人情、風俗について學ぶところ少からざりしは、つとに世の知るところであるが、公はまた滯佛中、かの一世の文豪テオフイル、ゴオチエの娘たるジユウヂット、ゴオチエと共に古今和歌集を佛譯された。

このことはウイリアム・レオナアル・シユワルツの英文「佛文學に現れた極東」の五二頁に明かに記されてゐるが、その書の現物を見ることは今日まで出來なかつた。昨昭和六年機を得てパリに遊んだ折にもこの書を手に入れたい。手に入れることが不可能であつたなら一目見たいと希望してゐたけれども、私はパリ滯留中には不幸にして偶目しなかつた。ところが最近パリより取寄せた古本屋のカタログ中に、この書名が載つてゐた。そこで早速パリの友人松尾邦之助君を介して購入してもらひ、やうやくのことで入手することを得た。

この書は日本名を「蜻蛉集」といひ、和歌八五首の飜譯を收めてあるが、貫之、躬恒、興風、千里重之等の詠じたものである。千八百八十四年春「じゆぢつとあらはす」「山本畫」とあり、「西園寺の逐字譯によりジユウヂット・ゴオチエが日本語より譯したるとんぼの詩篇」と記してある。』

Poémes
De la Libellule
TRADUITS DU JAPONAIS
D' après la version litterale
DE M. SAIONZI
Conseiller d' Etat de S. M. l' Empereur du Japon
Par
JUDITH GAUTHER
ILLUSTRÉS PAR YAMAMOTO

GRAVÉ ET IMPRIMÉ PAR GILLOT, 97Rue
MADAME, PARIS

日本天皇陛下參與、西園寺氏の逐字譯によりて、ジユヂット・ゴオチエが日本語より譯出した。

蜻蛉の詩篇　挿繪　山本

巴里マダム街七十九　印刷師、ジロオ

A

MITSOUDA KOMIOSI

Je t'offre ces fleurs
De tes îles bien aimées.
Sous nos ciels en pleurs,
Reconnais-tu leurs couleurs
Et leurs ames parfumées?

J. G.

陶庵公の肩書が參與と直譯してあるのも面白いが、次頁の献本（デデカース）の辭にジユヂツト、ゴオチエが光妙寺三郎に

こよなく君の愛で給ふ
大和島根のもろ〳〵の花
こゝに集めて捧げまつる
涙しげきこの國に
覺束なその色香は

と綿々の情を述べてゐることは、彼女が涙しげき愛人を思ふ念や切なるものがある。一八四六年生

れのジユヂツト・ゴオチエは當時三十八歳の姥櫻、光妙寺三郎も西園寺公も三十そこ〳〵であつた。

遙々と日本に在る光妙寺に對する愛情は、妖艶類なき牡丹の花が雨に狂ひ風に亂れて天下の春を惱殺するものがあるであらう。而も驚くべきは此の詩が五七五七七と短歌と同じきシラブルを持つてゐることである。献本の辭の裏は白（はらいろ）になつて次の頁には、貫之の古今和歌集の序の大意が佛譯してあるが、いづれも二色刷で水色のとんぼが石版で刷つてある。

之等を一々飜譯する煩勞を省くが、貫之の詠歌「人はいざ」はミシエル・ルヴオにも譯があつて、一九二三年版「日本文學選集」に轉載されてゐる。オックスフオード大學教授W・N・ポオタの「古本一百首」にも英譯がある。とは云へジユウヂツト・ゴオチエの五七五七七の正しい形の譯には如かない。

殊にポオタ教授の八六八六六の形は短歌の譯としてはひどいものと思惟される。本文の末尾に佛文で「蜻蛉集」の逐字譯が載つてゐるが、本書の發行された一八八四年（明治十七年）には公が歸朝されてから五年目に當るが、ゴオチエの飜譯が正しく優雅なるは實に公の佛文が流暢であつた賜でなければならぬ。

本書に依つて我國の和歌が如何なるものであるかを知つた外人は直接の影響として、ガブリエル、ダヌンチオが「遠西和歌」OUTA OCCIDENTALE なる詩集を二年後の一八八六年に刊行してゐるのでも判明しやう。

今その一斑を掲出することゝする。

La princesses Isse　伊勢内侍

Pour cueillir la branche
Dont l'eau berce la couleur
Sur l'eau je me peuche ;
Helas! j'ai trempe' ma manche Et je n'ai pas pris de fleur !

はるごとに　ながるるかはを　はなとみて　おられぬ　みづに　そでや　ぬれなむ

Nari Hira　叢平朝臣

Je vous vis à peine
Ainsi qu'on voit un éclair:
La flamme soudaine
Oui pourtant brüla ma chair Va fuire ma mort prochaine,

みづもあらず　みもせぬひとの　こひしきは　あやなく　けふや　ながめくらさん

KagueKi　賀川景樹

L'oiseau chinois seme
Pans l'air chaque mot saisi:

ah ! faites ainsi !
Quand je vous dis : "Se vous aime"
Dites : "je vous aime" aussi.

ことゝへば　ことゝひかへす　からとりの　こひしといへば　こひしといはなん

Hidè-yossi　藤原秀能

Sur ma ma-nche rose,
Dont mes larmes noient les fleurs,
La lune. se pose.
Dis aumoins ! pour quoi ces pleurs ?
O toi, qui sais bien cause !

そでの　うゑに　たれゆへ　つきは　やどるぞと　よそになしても　ひとのとへかし

Sémi-Marou　蟬丸

La vie est la toute :
L' on va l'on vient, sur la route
ou l'on dèbraqua,
Et tous passent sous la voüte
De la orted' Ossaka !

これやこの　ゆくもかへるも　わかれては　しるもしらぬも　おほさかのせき

情熱の詩人ダヌンチオにまで影響を與へた、「蜻蛉集」は實に西園寺公がジュヂット・ゴーチエと共譯した日本文學紹介の尤なるのでもあり、翰林の美談でなければならぬ。巴里ポアソニエーの酒場に於て、ゆくりなくも文豪ドーデーと邂逅した、幕末日本開國の恩人シーボルトがナポレオン三世に東方政策を献白する下稿を依頼し、その代償として「サフオ」を記いたドーデーに大阪角座の芝居で觀た「妹脊山婦女庭訓」の筋書を贈り、ドーデーが「盲帝の曲」のヒントを得て普佛戰爭に敗北した奈翁三世を諷刺した文雅談と共に、同工異曲のエピソードであらう。

光妙寺三郎は歸朝後代議士に打つて出たが、米八はその死後千歳米坡と名乘つて、役者となつたことは知る人ぞ知る。

惟ふに西園寺公が巴里に留學したのは明治四年二月で、歸朝したのは明治十三年十月、前後十年間萬里天涯の異境に在つた。

恰も普佛戰爭後のコムミユン黨變亂、チエール大統領、ガンベッタの盛時で、「百難を排して能く共和政を固定したるは、これを稱して歐洲政界の一大事件と云ふも過言にあらず」であつた。

明治政府の基礎固まり伊藤博文公は、獨逸系の憲法學者グナイスト・スタイン等を祖述し、凡百の範を獨逸に則つたから、明治大正昭和の三代舊獨逸流の官僚軍閥中心制が跳梁したのも無理はなかつた。

西園寺公は板垣退助の佛國流自由民權主義の如く、表立つて政府とは抗爭しなかつたが、その思想は頗る急進的であつたのだ。尚ほ公が巴里で常に出入した倶樂部は Cercle d'artiste で、英國皇帝などもその名譽會員であつた。

今陶庵公の客遊中の詩賦を引用してその文藻を偲ぶよすがとする。

巴黎客中書感

月痕如水映羅幃　秋入莎庭蟲語微
（燈）
緣酒紅燈疇昔夢　低歌一曲曉依稀
（記得）（樓）（夜）（嬌）（如夢）（翠紅雜誌）

（明治十二三年公作）

丁酉夏佛京客次罹盲腸炎

衆醫會診相告云　不施截解術　恐其疾不治　戲賦　（明治廿九年公作）

金刀一割欲回春　腕底疑君役鬼神
自笑閒愁袪不得　平生我是斷腸人

本願寺の藤島了穩師と唱和したものに

入佛京口占

挂冠漸覺絕塵緣　才人玻瓈身忽仙
翊々明朝化胡蝶　尋花何處最鮮妍

次韻藤島了穩律詩

朱門詎耐彭車塵　孤鶴瓢然去養神
傳道當年航海遠　闢邪今日著書新
誰知橘綠村莊客　現出華嚴法身界
寶錫東西化應普樓　虬山又集鯨濱

虬山鯨濱見光尊法主消息

幾日清淡絕世塵　吟成長短見精神
倦遊歸養對聯巧　橘綠蟹紅題字新
網水唱酬如舊夢　桃山邂逅似前身
想見北斗以南句　停錫扶桑州盡濱

上人在北海道有秋高北斗以南句

沛然一雨洗炎塵　時序無端又愴神

半壁燈光吟骨冷　數聲虫語夢痕新

著書敢道千年業　護法還憐萬里身

此際蓴鱸亦堪醉　秋風何必定松濱

網水とはセーヌ河のことで當時のパリ通にかく呼ばれてゐた。

明治十九年になつて、公はオーストリーから歸つて來た。此の侯爵の公使は、新橋の三等煉瓦地、今の對鶴ビルのある對鶴樓に下宿してゐたが、そのうちに、三十間堀通の妾宅であつたのを買ひとつてそこへ移つた。そこは梅の湯と云ふ錢湯の前であつた。

風流は相變らずであつた。某酒屋が自慢にしてかけてあつた菰冠の商標を集めて作つた額を、洋行紀念の時計と交換して、楣間に掲げて喜ぶと云ふ風であつた。

そして、明治二十年の初夏、獨逸公使とベルギー公使を兼任してドイツへ往つたが、その途中ローマ法王に謁見した。

それはローマから東洋へ派遣されてゐる宣教師のことで、法王に諒解を得なくてはならない問題があつたからであつた。

公は悠然として儀式の王様のやうな法王を訪れた。その時のことはやはり公の手記にある。

『明治二十年の冬、余獨逸の國都に駐在することとなれり、既に發せんとするに臨みて、更に途すが

ら羅馬法王を訪問するの欽命を受け、羅馬府に入りたり、今や法王の教権は赫々たること、歐洲の帝王を雪中に侍立せしめたるが如くなる能はざるも、法王レオ十三世は其英雄の姿を以て、能く歐米人の人心を繋ぎ、羅馬教の勢力を衰頽の餘に保ちたるの人なれば、其宮殿に於ける帝王的尊大は古に變らず、法王に謁見するものは、帽子以下一切の粧飾を去らざるべからざるは宮中の内規なりと聞きぬ。故に余が法王に謁見を求むるや、剣と帽子と手袋とを脱するは、此内規に適合する所以なりと注意せらる。然れども余は法王に對することの禮儀を盡すとせば、余は又我大禮服の裝飾を全うするの必要なるを感じたるが爲、宮内官に向ひて暗にその意を示したるに、其儘にて差支へなしとの事なる故に、余は剣帽を捨つる事なく、唯だ手袋のみを捨てたりき。

法王の風采を見るに、ヴオルテールの彫像に酷似の老人なるも亦一奇なり、其人春風和氣、靄然たる中に、一種精悍の風あり、諄々として能く語る、能く聽く。余は法王に對する使命を果して後、其總理大臣卽ち國務僧正ランポラを他の宮殿に訪問したりしが、年齢三十六七にして一見有爲の才物なるが如く感ぜられたり。ランポラ僧正が余を饗應するや其の飲食の美、余が經驗したる宮中の食物中に於て最も秀でたるものあるを感じたり。僧正は余がアジア人なるを以て、歐風調理の口に適するや否やを氣遣ひ、數々之を問ふ。余は其食物の趣味の高尚なるを稱讃せしに、彼は驚きたる様子にて、思はざりき絶東の貴客にして如此料理通を得んとは實に主人の大幸なりと云ふ。既にして煙草を供するや、余僧正に向つて余も亦思はざりき、法王の宮殿中に如此絶好の喫煙所あらんとは、僧正大笑して曰く、これ默許なり、寧ろ宮中の秘事なり、閣下知らずや、凡て秘事は旨きものなるを』と。

坊さんの處で御馳走になつて早速般若湯の旨いのを賞め、痛いところをそれとなく突くなど公の皮肉屋の面目が躍如としてゐる。

陶庵隨筆には、公がドイツ滯在中、カイゼルやビスマルクと親しく會つた話がある。

『外務大臣の待合室に面會を求むる外交官が、一時におちあふ時は、雜談、閑談、殆んど書生クラブの觀を呈することあり。

此種の交際には興味あり、利益ある事も亦少なからず、時としては、人をして噴飯せしむるの言語を聽くことも亦多し。余がオースタリーのウヰンナに駐在せる時、一日外務大臣カルノキー公を訪ふや、其待合室に露國大使、英國大使、其他五六人の交際官落合し事あり。露國大使甚だ談話に巧みなりしが、彼其の少年の比、曾つて英國大使館の書記たりし舊事を叙して曰く、時に余が長官たる大使、嘱性甚だ卑吝にして、余が封蠟を用ゆるの過多なるを數へて、其費を吝み、余が事多ければ、封蠟も亦多からざるべからざるを云ふも甚だ喜ばず。余不平に堪えず、卽ち一策を案出して彼

の膽を落さんとし、一日彼の書齋に入り、封蠟を以て机上に大書し、ア・ヴオートル・サンテー（閣下萬歳）と記す。

卑客の大使も之より又た封蠟を云々せざるに至れり、然れども余は之が刑罰として、過多の寫字を命ぜられ、一週間ばかり苦しみし事ありと。

余はこれを聞きて曰く、吾國亦此に類似したる一話あり、我倫敦駐在の某公使、性又卑吝にして、某書記官が漫りに机上の巻煙草の筐に加へんとするや、常に之を目視し、遂に筐底に紙を布き、『此の筐の中に何本あり』と記する事を常とするに至る。磊落なる書記官、甚だ其卑吝を憎み、一日公使の在らざるに乘じ、筐中の巻煙草數本を取り去り、筆を執つて、筐底の紙に書して、『但し其中五本頂戴致し候』と云ふと、滿座此話を聞きて大笑せり。而も座上の某國大使は有名なる吝嗇家にてありき』と。

各國使臣の中に交つて、かうした雜談をやつてゐた公の外交官ぶりが偲ばれて面白いではないか？

獨乙皇帝カイゼルと廊下の立ちばなしに關する興味ある回想には

『獨逸帝室に於ては、我國の使臣を招待して歡を共にすること數々あり。或る歳のはじめ、余は皇帝陛下よりの招待を受け、定めの棧敷に著席して觀劇しつゝありしが、中頃事ありて棧敷の後なる廊下に出でたりしに、不圖彼方より從臣を引きつれて來る皇帝と撞着しぬ。皇帝は余を見るや、懇懃に余の健康なんぞを尋ねし後、思ひ出したる如く、曰く、聞く所によれば、貴國の議院は燒失して灰燼となりたりと云ふにあらずやと、余は然り、陛下外臣も又た昨夜其報道に接したりと答ふ。皇帝は最も怪訝に堪えぬ調子にて、然れども足下、議院が燒失して灰燼となるとは、甚だ不思議ならずやと、數度之を繰り返す。余之に答へて、然れども、火が木を燒くに何の不思議もあらざるべしと云ふや、皇帝は微笑を漏らして、曰く、あゝ然るかと頓悟するものゝ如し。蓋し其腦中に無意識に議院は、石造又は煉瓦造の如くに映じたるなり』と。

公はかうして兩偉人の暗鬪も見た。一世の嬌慢兒カイゼルは、皇帝でありながらビスマルクに押され勝ちであるところから、たうとうビスマルクを放逐することにした。その手段としてカイゼルに無斷で國務大臣を免職したので、君臣の乖離が始り、その結果ビスマルクは放逐せられた。ビスマルクはこれを根にもつて、皇族の一人であるホーヘンロー公と結んで、いろ〳〵な嫌がらせをやつたのであつた。

かくて明治二十四年八月廿一日、任期滿ちて歸國したが、明治三年日本を出て以來、二十二年間、歸朝滯在の三十七ヶ月を除いて外國に十九年間も悠遊したのであつた。西園寺公の有名なる世界の日本觀はかゝる滯遊の賜であつたことは云ふ迄もない。明治廿九年七月には陸奥宗光、富井政章、梅謙次郎、本野一郎、酒井雄三郎、竹越三叉等と「世界之日本」なる雜誌を刊行したことは知る人ぞ知る。

西園寺公は明治三十年第五回の外遊をしたが、有名なるフランスのアノトーと會見し露佛同盟の機密を親破し外交上有力なる資料を獲得した。

明治卅年五月二日、英國女皇ビクトリア陛下六十年祝賀のため有栖川宮殿下御渡英におくれて、五月七日伊藤博文が後を追つて出發した。が途中フランスに立寄り前述の詩にある病後の公をその年の暮、伴つて共に歸朝した。そして公は大森不入斗に望綠山莊を營んだ。が公の俳名不讀はこの地名に因る。その時の詩に

數楹郊墅築方成　時欽農夫樂太平
夏日讀書冬射獵　曹侯未志在功名

曹操の銅爵臺を氣取つたところが面白いではないか。

公は大森にゐた時、内幸町に事務所を持つてゐた。その事務所と云ふのは、今の都新聞社の裏にあつた。そこへは梅謙次郎、本野一郎、富井政章、酒井雄三郎、竹越與三郎など云ふフランス仕込の人びとが朝夕に出入して、梁山泊の感があつた。丹波の弓箭組以來の高木豐三、西德二郎、加藤恒忠なども出入した。

大森の家に某夜盜兒が入つたが、その盜兒は獨身者と云ふことになつてゐる公の居間から、婦人の裝身具ばかり撰んでとつて往つた。公にはその時二つの詩が出來た。

調　盜

金鳳銀鵝玉搔頭　半夜深閨隨手收
不掠阿堵攫香奩　綠林豪客眞風流

大竊國柄小爵祿　自古人間多俗偷

笑　犬

夜深四隣寂　何者來閒津
跖徒術亦巧　堯犬無精神
搖尾低頭門不警　月明枉吠梅花影

性情高朗として、物欲に捉はれず些かも卑吝の念が生じないのが、天下第一等の高人たる陶庵公の面目である。

湖南先生の家系と學統

江戸折衷學派

湖南先生を生んだ鹿角郡學統

一代の碩學內藤湖南先生は、秋田縣鹿角郡毛馬內町に生れたとは云へ、十和田湖畔の僻境山紫水明にして偉人を育むの眞理——決して偶然ではなかつた。乃ち鹿角郡の學統連綿として中央學界に接觸した、機緣は實に百卅餘年前に屬する。苦學力行の伊藤爲憲翁、その直接刺戟を受けた泉澤履齋先生共に山本北山、朝川善庵等を中心にした江戸折衷學派の學者である。而して履齋先生の家兒綠泉先生から修齋先生、貞享先生三代は、鄉先生として毛馬內を中心として鄉學に盡した。湖南先生の祖父內藤天爵先生は善庵に、私淑して江戸に上る毎に、儒學を質し、其子十灣先生と共に漢學者として令名があつた。

是等郡北の諸學者を鹿角郡學統の根幹をなすものとすれば、傍系には郡南に奈良讓山先生があり、天爵先生は山本北山に從學し鄉出身の泉澤履齋先生と親交があつた。文政十二年撰ばれて南部藩儒となつて二百石を領した。天爵先生の門から出て、東條一堂門下の俊英には辻講釋で有名な澤出椿庵先

生、博識にして能吏もであつた奈良養齋先生がある。共に同派に屬する學者である。

更に內藤天爵の孫、湖南先生に至つては、父祖の經學から出發して獨自の研鑽を經て史學に轉じ、遂に支那學者として學界の至寶と目されて居るが、共に折衷學派の中正該博な特色を傳へる所があつた。而もこれ等の諸學者は、何れも江戸出奔を企て、苦學力行、成功せずんば止まざるの氣魄を藏して居たことはその軌を一にする所で、穩健中正の學風の中にこの毅然たる態度を長養したことは、やがて穩約の間に鹿角郡思想の特徵となつたものと見るべきである。故に敎化の任に當る人士は、宜しく思を此處に致し、中正の思想の中に進步的敢爲の氣風を培養して益々、傳統的美風の發揚に努め以て思想善導の實を擧ぐべきであらう。

湖南先生の血緣たる高橋克三氏が「毛馬內町誌」なる鄉土史を編纂して昭和四年三月湖南先生の校閱を乞うたところ、大體宜しいとて左の御返書を寄せられた。筆者は湖南先生の遺兒內藤乾吉氏の好意に依り之れを轉載することとする。

拜啓　舊臘御送示を蒙り候毛馬內町誌特に泉澤氏竝に弊家學統に關する御調は、拜見仕候。誠に詳細の御調査にて敬佩に不堪候。大體はあれにてよろしくと存じ候へ共、多少の訂正を要する箇條も有之候に付、その內鄙見附箋返上可仕候。暫時御猶豫可被下候。履齋翁の出版書、淸人關係の物は他より偶然に見出候材料も有之、又弊家に傳候、同翁の手簡も十數通有之候間、それらの事も委細

可申上候又澤出源佐久翁の詩筆も有之候間、これらも幣家に關する分寫取り差上可申候。鄉里に關する文獻の保存は何卒在鄉諸君の御手にて、御骨折可被下候。

報知新聞の記事（昭和四年八月十三日ヨリ同月廿三日迄秋田版ニ連載ノ名士ノ少年時代内藤虎次郎ニツキ質疑セリ）は誤謬多く候へば、あのまゝにて保存は迷惑に有之候。其儀は御承知置被下度候先は右申上置いづれ後鴻詳細可申上候。

鹿角郡の思想的傾向

一代の碩學内藤湖南先生を生んだ秋田縣鹿角郡は、もと南部藩及び津輕藩と境した重要な地點で、自衞上南部家の親臣、若くは重臣を以つて領主とし、人心常に緊張して或は文に或は武に日夜精勵し質實剛健の氣風を養つてゐた。故に各方面に於て相當人材を輩出したことは識者の認める處である。卽ち毛馬内町を中心とする郡北では、古くは學者として、鹿角緣記の編者たる伊藤宗兵衞翁、中央學界に名を成した泉澤牧太先生、近くは志士としての石川伍一氏、十和田湖開發の和井内貞行、基督教界の先覺者田村金吾（七瀧）、千葉佐惣治（大湯）を出し、現代に於ては支那學の世界的權威者たる文學博士湖南内藤虎次郎先生、軍人には陸軍中將石川漣平等知名の士を出して居る。更に花輪町を中心とする郡南では過去に於ては、南部家の儒臣たる奈良圓藏先生、經史詩文家たる澤出源佐久先生（尾去澤）博識多智を以て聞ゆる奈良宮司先生（尾去澤）、近くは工學博士たる石田八彌（舊姓奈良）、畫家として四條圓山派の奥義を窮めたる川口月嶺等あり。現今に於ては、政治家として前臺灣總督たる川村竹治、篤學の士法學博士田村德治（舊根市）等の諸名士を輩出してゐる。

今之を武道方面より見ても、古來毛馬内に山本道場、花輪に小田島道場あり、最近迄鹿角郡の偉觀たる柴平の兒玉道場に於ける、柔劍道五段兒玉高慶の存在の如き、世人の記憶の新なる處である。これ等の道場を中心として幾多の劍士を出し、在鄉者の外中等學校柔劍道選手として、相當な成績を示して居るのは、その原因する處遠く且つ深いものがある。其他政治經濟産業方面から見ても、本邦文化の進展に貢獻しつゝある幾多の人材を見出し得るのである。

由來鹿角郡は東北の北偶に位し、舊幕時代政治的には盛岡、商業的には八戸方面の影響を受けた外比較的文化に後れた小郡としては、相當人材に富むといふも過言ではなく、且つ學問、藝術、宗教、軍事、實業等諸方面の文化に向つて獨自の天分を發揮したことは偉とせねばならぬ。斯くの如く鹿角郡の思想傾向は各般にわたり、空論を避け實効を擧げて來たことは、その學統の基礎をなした、江戸時代に於ける折衷學派の流れを酌み、穩健中正にして、而も質實剛健の氣風を涵養した結果であると思惟される。

郡北毛馬内町中心に於ける學統の發展

湖南先生の學統を闡明するに當り、先づ毛馬内町に於ける學問の系統を述べることを必要とする。鹿角郡に於て初めて、江戸の學問に接觸し、鄉土に於ける學問的先達をなしたのは、毛馬内町出身たる伊藤爲憲翁である。爲憲は百有餘年前已に鹿角緣記を編して鄉土研究の先鞭をつけた人であつた。

伊藤宗兵衞翁、諱は爲憲明和四年（紀元二四二七年）伊藤喜三衞門の三男として毛馬内に生れた。喜三衞門は現代其三の六代の祖に當るが、その父喜七郎は、手跡巧みの故を以て初めて櫻庭家に召抱へられ、それより代々櫻庭家に奉仕したのであつた。喜三右衞門諱は良慶、岩船儀兵衞の女を娶り三男三女があつた。長女は今の泉澤恒藏五代の祖泉澤和右衞門氏に嫁し、二女は高橋家の七代の祖若松忠兵衞（後改姓高橋）に嫁し、三女は湊沼鄉左衞門に嫁して居る。長男は慶里といつて伊藤家の直系相續者であり、二男松之助は出奔行方不明、三男は卽ち爲慶である。

爲憲翁は資性銳敏で、幼時から學を好み、神童と目されたもゝ鄉里によい師友がなく、殊に當時の二三男は到底鄉里では驥足を伸すことは出來なかつた悲態に顧み、夙に江戸遊學の志を抱いて居た。寬政八辰年正月、年三十才の時、遂に出奔して、江戸に至り年來の宿望を果した。然し最初は糊口に苦しみ、幕府旗本の臣花房氏に仕へ又鵜殿氏に仕へたが、三轉して竹本氏に仕へ、僅ねて幼童の師匠をして學資を得て勉學大いに努めた。竹本氏長崎奉行となるに及んで、爲憲も公用人に擧げられ扈從して長崎に至つた。この間和漢の學につき研磧を積み、晩年は江戸にあつて一生を終へた。一子あつて爲美といつたが卅四才で夭折した。有名なる「鹿角緣起」は文政十年十一月爲憲六十才の時江戸に於て完成したのである。

泉澤履齋先生は毛馬内の人、名は充、字は始達、履齋と號し牧太は其小字で安永七年泉澤和右衞門の次男として生れ母は伊藤爲憲の姉であつた。弱冠發憤して學に志したが、鄉里に師友がないので江戸出奔を企て廿七才の秋、叔父爲憲を頼つて上京した。爲齋その志を壯とし、朝川善庵の學僕として入門せしめた。元より苦學を豫期した履齋先生は、焚炊の賤役を厭はず、日中は主人の雜役に服し、夜間を以て講學の時と決め、嚴冬布衾一領を背に藏ふのみで、徹夜眠らず書を讀んだことも一再でなかつたといふ。かくすること三年、善庵先生も其の篤學に感じ、始めて塾生の列に加へ、且つ之に敎へることの厚きは他生に異つたといふ。五山堂詩話に履齋を評した詩がある。

泉澤履齋　冬夜云

奇寒如レ鐵五更天。　聞二徹雪聲一猶未レ眠。
只把二一經一供二咀嚼一。　更無二詩句一到二梅邊一。

五山云履齋刻苦讀レ書未曾須臾釋レ卷此紀レ實也

これによつてその苦學の樣を想像することが出來よう。履齋先生は固と慧敏といふではないが、所謂努力力行の人で、其勤精が人に超えたから、其の學業も成就したのであつた。文化十三丙子年、清國人邱有斌といふ者が水戸浦に漂泊したので、幕府は朝川善庵先生に命じて之に應接せしめようとした際、善庵先生は「これは門人泉澤牧太で事が足る」と云つて履齋を推擧したので、幕府は履齋先生に命じて水戸浦に赴かしめた。履齋先生は邱有斌を海路長崎港に護送し、清國の定時航海船の到るのを待つて之を送還し任務を完全に果した。而して陸路歸還の上幕府に復命し、且つ其の船中及び長崎滯在中の筆談書、並に贈答の詩文等を呈した。幕府は其勞を慰し且つ物を賜つたのである。是に於て先生の名が天下に喧傳された。初め善庵先生の己を捨てゝ履齋を推したのは、この機會に於て履齋先

生を世間に顯はさうとしたのである。間もなく、伊勢の龜山藩主、主殿頭石川總安侯の聘に應じて其儒臣となり、祿百五十石を給せられ、國藩を督學したが、士大夫皆風に向つたといふ。又南部藩世子信侯、弟子の禮を執つて之を迎へ天保八年十一月九日櫻田邸に初めて出仕した。それより時々江戸の邸に入つて經を講じた。翌天保九年、信侯國に就く時履齋先生を伴ひ、用人の資格を以て行列中に加へた。盛岡著後城中に於て聖經を講ぜしめ國藩の士大夫をして之を聽聞せしめた。盛岡に留ること數月の後、再び江戸下谷の邸舍に歸つて、教を布くことが益々廣かつた。安政二年七月、江戸の大地震のため屋崩れて履齋も誤つて脚を傷けた。十月に至つて傷漸く劇しく、遂にこれがために歿した。享年七十七。謚して「創業院周道履齋居士」と云ふ。終に臨み、子喜三治に命じ、筆硯を呼んで、「仰不レ愧二於天一。俯不レ恥二於人一。笑入レ地耳」と書き遺した。先生の人と爲りは謹厚忠實、人に接するに溫恭事を處するに總て忠恕の精神を失はないので人の之を慕ふこと親の如くであつたといふ。中年眞山民詩集を發刊した。山民は宋末の遺民で有爲の才を以て當世を避けた人であつたから天下之を稱誦した。又善庵隨筆三卷の著がある。履齋は初め江戸に入つてから誓を立て終生演劇角力等の遊技を觀なかつたといふ。

履齋先生の學統も亦爲憲翁と同じく折衷學派の朝川門下で、交友にも同派に屬する大窪詩佛先生がありその學風を世に傳へた。この點南部藩にも影響する處が尠くなかつた。

贅炬光瑤玉漏遲恰逢雙壁綰紅絲珠樓喜中乘龍還藜閣還誇咏雪
婺並蒂花飛連理樹同心帶引合歡扈試看遲畔宜男艸此夜

先開第一枝

嘉慶二十一年止丙子年

履齋泉澤先生　　邱有斌

こは是れ、前記の水戸浦に漂泊した淸國人で、嘉慶二十一年は我が文化十三年である。

鹿角緣記は、鹿角郡に於ける鄕土研究の最初の文獻であつて、文政十年十一月十五日（紀元二四八七年）伊藤爲憲翁六十歲の時江戸に於て完成したことは前述の通りである。卽ち明治四十年內藤調一先生（湖南博士の嚴父）の著述にかゝる「鹿角志」と共に鄕土資料の双璧と言はれて居る。緣記の原本は、紙本綴一冊（約百三十枚）もので伊藤良三の所藏にかゝり、その寫本は高橋克三氏の曾祖父亘の手寫したもので大切に保存してある。

緣記は項を分つこと十八、その後序にもある通り「さきのとし予がふるさと竹馬の友なりし內藤氏（官藏）東都へ來りしをりから、けふの細布に錦木の緣記を添へてもて來て予に與へられぬ。久しく箱のそこにありしが何くれの序に彼の錦木の緣記の出たりしを見侍りしに、その今をさりし事ちとせあまりの年月をへしなれど、わづかなるふみのちりうせもやらずいまになながらへありし事の幸なりしな

れば、かの錦木のゆかりをもとゝしてけふの郡の奇事靈蹤の事とも一つ二つを書き記しぬ」

とあり、卽ち內藤官藏の晃れたお土產が緣となつて鹿角緣記を書き初めたものと想像される。

その本文のみは前述の如く文政十年に完成して鄕里に送つたが、根據を示した註釋を加へて現在伊藤家にある原本を完成したのは更に九年を經た天保七年で爲憲翁六十九歲の時であつた。而して卷末に天保九年四月爲憲自書とあるが、この四月は泉澤履齋先生が歸國の時であるから、この際託されて伊藤家に送られたものと推定されるのである。（後節鹿角志參照）

毛馬內町に於て、世々學を以て著はれたのは、泉澤家である。同家は牧太先生の兄織太先生（綠泉）以來、恭助先生（修齋）、熊之助先生（貞享）の三代所謂師匠樣として、家塾を開いて鄕人の敎育に當つた。就中修齋先生は學德すぐれた鄕先生であつた。修齋先生は文化三年十月の生れで、父綠泉に就いて修學し學大いに進んだ。初め諱は貞務、字は時敏、後諱を貞幹と改めた。通稱恭助、修齋と號した。家は世々南部藩大夫櫻庭氏の家臣であつた。天保十一年父の死後職を襲つて櫻庭家の家宰となり、傍ら近鄕子弟の敎養に當つた。修齋先生交友多く大館人中田錦江、高橋松園、江幡晩香、盛岡人江幡梧樓、川上東巖、鹿角郡人奈良養齋、澤出椿庵等皆親善であつた。又繪事を好み盛岡の田鎖蘭室に就いて學び、後川口月嶺と交り其技益々進んだ。先生平生士氣の不振を嘆じ、先進の士內藤天爵先生と共に、處士小池普藏に就いて長沼流の兵法を學んだ。天爵の沒後は自ら牛耳を執り、文武兩道の敎授に當つた。太田半十郎以下從學する者甚だ多く熊谷助右衞門、內藤調一、馬淵乙次郎等其尤であつた。又花輪町の栗山新兵衞、大里壽、川村左學、奈良正敬、佐々木祐司、尾去澤の內田愼吾等數十人來り學んだ。更に遠く十二所の鹽澤良太郎、赤上助吉等が入門した。修齋先生又櫻井起雲の門に入り荻野流の砲術を學んだ。萬延元年、藩主利剛公木郡に巡歷して文武の技を閱した。卽ち先生は召しによつて孝經及兵要錄を御前に於て講じ、且つ門人をして兵要錄を講ぜしめた。又砲術を供覽し、公其の學業卓越、敎習宜しきを得た廉を以て、金一封及び時服を賜つた。櫻庭氏亦禮服を贈つて慰勞した。德川の季年諸藩武備を修め櫻庭氏藩命を受け先生を以て之れに任じた。然るに俄に戊辰の變に遇ひ、南部藩罪を朝廷に獲たので先生快々として樂まず遂に疾を得た。明治維新後の廢藩置縣に當り、鹿角郡は江刺縣に屬し、縣に寸陰館を設け管內子弟を敎授し、支部を花輪に置くに當り修齋先生を寸陰館附屬に任じ、舍長に兼ね一等に補した。因つて疾をおして講習甚だ勉めたので此門に入らない者は甚だ稀れであつた。明治三年秋病篤く請暇歸養し十月十三日遂に起たなかつた。臨終の詩に曰く

聞道死生元有命。　道存六藉是吾天。
對天不慚更何索。　只向青山索墓田。

縣卽ち祭資料を賜ひ、神式を以て仁叟寺先塋の次に葬つた。

修齋先生に三男一女あり、長男及び三男は夭折し二男熊之助（貞享）家塾を嗣ぎ、長女容子は內藤

調一先生に嫁した。明治三十二年修齋先生の三十年祭に際し、門人黒澤準治、勝又庄治、勝又平太郎山本幸藏の諸氏相謀り遺稿を刊し「修齋先生遺稿」といふ。外孫内藤湖南先生の囑により野口寧齋氏題詞四篇を作つて卷頭に掲げてある。

湖南先生の家系と學統

湖南先生を生んだ内藤家は父祖三代文學を以て世に顯はれた。乃ち祖父天爵仙藏先生は、江戸に上ること數次朝川に善庵儒學を質し、又櫻庭氏の家宰となつて世子の侍讀を兼ね頗る補佐の功があつた。兼ねて一鄉子弟の教授に當つたのであるが、その子十灣調一先生に至つては、鄉先生としてまた「鹿角志」の編者として、其名世人の耳目に新しく、父子相傳湖南虎次郎先生の文學を以つて令名を馳せたのも蓋し偶然ではない。

十灣先生通稱調一、天保三年南部藩毛馬内領に生れた。幼時より父天爵について儒學を修め、長じて泉澤修齋の門に入り學大いに進んだ。妻は容子修齋の女である。十灣先生の學友に田口多作（綱方）あり、盛岡に遊學して那珂梧樓（舊姓江幡文學博士那珂通世の養父）の門に入り、十灣先生と共に勉學大に務めた。かゝる因緣に依り湖南先生の夫人郁子刀自は、十灣先生の懇望に依つて先生に嫁いだのであつた。

十灣先生年二十餘、遊學の念やみ難く泉澤履齋先生を手頼つて江戸に上つたが、志を得なかつた。當時の狀況につき履齋先生の甥修齋先生に與へた次の書面がある。

去る十三日、内藤幾太郎（十灣の幼名）登候趣にて尋來候間、誠（四字ばかり虫穴にて不明）候樣子承候へば、學問修行致度旨申述候に付、心得違之旨再應諭示仕候間、罷歸候事相成、路金壹兩相渡明日發足之處へ御狀相達愈以早速出立進め、今日當地出立罷歸候間委曲は當人より次第御聞合可被下候。奈良宮司殿御父子よりも、御狀被下候間宜しく御挨拶可被下、急に付御返書指上不申候。扨々心得違にて困入候ものに御座候。右樣者、尋來り不申候樣御取計ひ被下度、偏に奉願候。御書中之趣委細致承知、氣の毒千萬不得止處より出來の事ながら、俗曰論語讀の不知論語小生杯も同樣の事愧入申候。

江戸の苦學は並大抵の事でない事は履齋の時々の書面の中に覗はれるから、かく後進を戒めたものであらう。而も履齋は此時年七十を超え思慮圓熟、自分の壯年脫走を企て江戸に上つたことを回顧して「小生杯も同樣の事愧入申候」といはれたのは眞の告白であつた。

かくて十灣先生歸鄉の上、藩士川上東巖について、詩文を問ひ、又藩儒江幡梧樓に就いて學益々進んだ。又長沼流の兵法を澤出善平に受けた。戊辰の役從軍して「出陣日記」二卷の著がある。かゝる間にも一女二男の教養を忘らなかつたが十灣先生三十九才の時、唯一の内助者であり、家庭の慈母で

ある妻容子が、かりそめの病がもとで不歸の客となつた。この時末子の虎次郎先生は僅か五才であつた。男手一つに子供三人の身の上を思へば悲歎限りなきものがあつた。不幸はこれに止まらず、翌々年長男文藏の死に遇つた先生の傷心は、蓋し想像以上のものがあつたのである。かくて重なる不幸のために心機を一轉する必要から他に轉住の念を生じ、知人の紹介で尾去澤鑛山に勤務することゝなつた。それから年を經ること幾春秋、晩年を郷里の蒼龍窟に閑居し郷人の教育と鹿角志の編纂に專念すること多年、「鹿角緣記」以來の郷土志を完成されたのである。

鹿角志の解題

鹿角志は十灣先生晩年五六年の歳月を費して資料の蒐集整理をなし、明治卅九年七十五才にして完成したもので、鹿角郡にとつては貴重な文献であり、今や高價を投じても得易からざる珍本である。其資料蒐集に當つては、自ら草鞋がけで他家に赴いて寫本をなし、遠方にあつては其家に起臥して寫取つたといふ人知れぬ苦心が伏在して居る。引用書目も五十餘種に上り、其の正確を期した周到なる用意も亦多とせねばならぬ。今は其の詳說を避け、概目を揭げて之れに代へやうと思ふ。（高橋克三氏近世鹿角郡學統考に據る）

寫眞　錦木塚　大日堂
明治年間花輪繪圖
鹿角郡略圖
正德二年毛馬内圖
鹿角志序
例言
引用書目
鹿角志目次
　卷之一　年代　卷之二　制度　卷之三　地理　卷之四　人物
鹿角志總說
本文
　卷之一　年代　卷之二　制度　卷之三　地理
　地理（上）
○五十四郡考

兒虎謹書
編者識
五十四種

十灣　内藤調一編
男湖南　内藤虎校
抄錄

○最明寺殿入國記
○鹿角郡田畑開始之事
○鹿角郡四十二鄕二侍四十二人之覺
○八郎太郎が事
○錦木山觀音寺緣記
○錦木塚に關する詩歌
○けふのせはのゝ　參河の眞澄誌
○ダンブリ長者之事
○歸省記　湖南
○南部信直攻二秋田比內一事
○五城目具庫心變比內落城事
○秋田城介返二攻比內一事
地理（中）
○南部鄕村志　鹿角之部
○奥州出羽大境論

○延寶五年德川幕府裁許申渡書
○鹿角郡各地の古實古書及口碑
○秋田近季鹿角攻事
○義經奥州下向之事
○鑛山
地理（下）
○瀑布
○溫泉
○社寺補遺
○寺院
○境目番所
○郡中各町村里程
○山嶽
○河川
○湖沼

○道　路　岩舟八兵衞　中村吉之助　道又門十郎　鈴木久惣吉　折壁彌助

○橋　梁　竹澤內匠　近內織右衞門　伊藤惣兵衞　馬淵貫右衞藤

○物　產　關　良輔　下斗米將眞傳　記ニ相馬子誠手簡後ニ

卷之四　人　物　吉田上總　岩船下總　修善院　小笠原半助

泉澤織太　奈良圓藏　內藤仙藏　苅谷彌五郎

苅谷彌十郎宗晴　苅谷彌五郎宗通

澤出源佐久　淺沼鄕左衞門　上關覺兵衞　千葉茂

勝又善左衞門　內藤市郎太　杉屋市平　澤田甚右衞門

清水喜左衞門　泉澤牧太　湯瀨謙吾　靑山忠七

豊口傳　奈良宮司　工藤玄良　關右平太

一方井勇右衞門　山口庄次郎　四戸武右衞門　諏訪織江

福本藤吾　近內一人　奈良熊太　杉原篤司

內田大藏　澤出可祿　熊谷助右衞門　玉井文作

立山熊太郎　町井卯助　奈良虎太郎　池田佐五右衞門

澤出善平　勝又定八　泉澤恭助　川口七之助

川口與十郎　勝又周治　瀧玄積　吉田新十郎

井上新十郎　馬淵乙次郎　伊藤文七　關純藏

栗山新兵衞　村山連治　鎌田忠太郎

和井內兵治　態谷東膳　江家源六

餘錄

明治四十年三月十日發行

郡南（花輪、尾去澤）中心に於ける學統

郡南に於ける學者は、悉くと言はぬも、その大部分は毛馬內の學統を繼いで居る。卽ち次に述べる奈良讓山（圓藏）先生は、伊藤爲憲翁の後輩に當り泉澤履齋先生と交好あり、澤出椿庵（源佐久）先生は內藤天爵門下の逸足として江戸に出て大成し、奈良宮司先生も亦天爵先生の門に入り、江戸に上る每

に朝川善庵先生、泉澤履齋先生の經說を聞いたのである。何れも折衷學派に屬し、南藩部中の學才であつた。

南部藩儒たる奈良讓山（圓藏）先生

幼名文助、通稱幸藏、後圓藏と改めた。花輪の人奈良重右衛門氏の第三子で安永九年庚子を以て生れた。幼にして穎悟濶達、長じて垂翼の志があり、享和三年脫走して江戸に赴いて學を山本北山先生の門に受けた。（伊藤爲憲に後るゝこと七年）而して螢雪の苦學頗る得る處があり、兼ねて經世濟民の術に長じて名聲次第に顯はれた。文政の初め西國の藩侯禮を厚くして招いた。然るに南部侯之を惜み脫藩の罪を免じ、庚辰二年同藩の儒臣となした。當時藩政振はず財政困難の場合であつたから、侯圓藏の才を知り、文政十二年十一月擢んでて其の局に當らしめ祿二百石を賜つた。實に異數の拔擢であつた。讓山先生その優遇に感激して筆硯を投じて樞機に參與し心身を傾くること十餘年、その功績大に現はれ、目付役兼銅山吟味役となり祿二十石を加增された。天保年中尾去澤銅山に來勤し閑を得て父祖の墓前に詣でた。この時、槍丁筐夫、先驅後從といふ行列で、傍人を驚かした。誠に錦を衣て故郷に歸るといふべきである。天保十四年病を得て卒した。讓山別に家を興し一女あり、親戚の子を配して家を繼いで盛岡に住んだ。長兄萬治父の後を受けて重右衛門と稱した。卽ち奈良和市氏の祖父である。讓山先生は毛馬內の人泉澤履齋先生と交好し、卒するに及んで故舊遺族謀つて墓標を建てた。

次に擧げるその撰文は履齋の作にかゝるものである。

先生姓奈良氏名垣字貞興號讓山又號道記堂稱圓藏。陸奥盛岡鹿角郡花輪人。少來江戸受業於北山先生之門。無幾釋褐本藩。天保十四年癸卯夏五月二十九日病卒年六十四。葬于江戸深川靈岩寺中忍教寮。法謚曰

致清院淨譽寧樂居士。

天保十四歲秋建立

友人盛岡　泉澤　充記

辻講釋に有名なる澤出椿庵（源佐久）先生

源佐久、諱は直方、椿庵と號し、尾去澤銅山澤出善右衛門氏の次男である。少壯の時內藤天爵先生に從學し、年廿六に至り發憤して江戶に止り、名儒東條一堂の門に入り、經史を修め旁ら詩文に及んだ。時に學資に窮すれば則ち夜々市街に出て按摩をなし其の資を得た。曾て一豪家の主人に請はれて按摩をなし其の故を問へば主人曰く、「君未だ技熟せず必ず新書生だらう」と。卽ち一朱銀を投じて筆墨の資とせよといつた。此時彼慚愧骨に徹したといふ。貧書生の按摩を售るは當時江戶の風習であつた。又業稍々進むに及んでは時々辻講釋をなし學資を得たといふことである。辻講釋といふのは繁華な街頭に出で地に莚を布いて座を占め、朗々と書を講じ往來人で志あるものは之を聞き各五三錢を投じて去るのである。是れ亦江戶の風習で

あつた。かくして倍倨勉勵殆ど十年、業成つて家に歸つた。是より先き櫻庭氏の家臣となり、毛馬内に住したが、徒に授くるのでは滿足されず遂に盛岡に塾を開くに至つた。師の一堂が書を講ずるや能辯を以て名があつたので、其の門下生も皆講說に巧みであつた。從つて椿庵先生の經史を講ずるや音吐朗々、辯說流るゝが如く婦女子と雖もよく領解することを得た。當時盛岡の諸儒は舊說を墨守し、偏陋にして學問の活用に暗かつた。一堂先生は考證學を以て天下に鳴るもの、椿庵よく其の說を展開して時人の耳に入り易からしめたので門生日々に增加し、市民は勿論遠村からも來り學ぶ者多く塾舍滿員の有樣であつたといふ。

先生は風姿寬放、氣宇落々人と接するに城府を設けず、其の書を先ずるに當つても態度嚴しからず一篇或は數章を終る毎に必ず喫烟して神を安んじ、質問あれば之に應答し、然る後又講義を續けたといふ。

又遊樂を好み、暇あれば酒瓢を提げ友を携へて近郊に吟行した。曾て川口月嶺と京阪を漫遊し、一日京都の嵐山に遊んで飮み且つ吟じ、月嶺の描く數十枚に詩を賛して之を遊行の人に授與したので都人士之を見て奇となし狂となした。而して後、人に語つて曰く、此の時程愉快なことはなかつたと。以て其の性格を知るべきである。嘉永三年黃疸を病んで盛岡に沒した。享年四十八。關口の高水寺に葬つた。門人碑を建て題して椿庵先生之墓といふ。子なく弟可祿を以て嗣となした。

博識にして能吏たる奈良養齋(宮司)先生

諱は眞守、養齋と號し、俳號を東岐と云ふ。宮司は其の通稱である。尾去澤銅山の青山金右衛門氏の三男で同山奈良直右衛門に養はれた。幼年の頃より聰慧で內藤天爵先生の門に入り句讀を受け、長ずるに及んで經史を授けられた。嘗て曰く「人の子たる者よく親を養はんとせば醫術に詳しくなければならぬ」と、卽ち天爵について醫術を學び、大館の人黑澤某に從學した。又江戸に上る毎に泉澤履齋東條一堂の門に遊んで經說を受けた。履齋先生より鄕里の甥修齋先生宛の手紙の中にも

前略　奈良宮司殿御父子よりも御狀被下候間宜御挨拶可被下、急に付御返書指上不申候云々

又履齋先生の沒後、妻から修齋先生へ宛てた手紙の中に

此度奈良宮司樣御登りに付當月二日一寸御立寄被下、廿日過には御歸りの由御話御座候まゝ、本類このまゝさし上候御受納可被下候

とあるが、宮司と履齋の交りは深く且つ長い事が判明しやう。

又先生は、銅山奉行金矢又四郎に從つて大阪に登り留ること三年、京阪諸賢の門を叩き其の說を問ひ又著名の俳人八千房の門に入り俳諧を研究して入室の稱があつた。歸鄕して直ちに擧げられて山先役(坑夫の長で山を相し鑛物を採り、坑夫を指揮監督する銅山第一の勢威ある役)となつたが、元來、博識多智の人であつたから機を見るに敏、大に坑夫の信賴を受けて出鑛の量も多く屢々推賞を受けた。性救

恤を好み常に貧困者を賑はし病者を治療して報酬を受けなかつた。故に奎山悅服した。中年士籍に列し鑛山奉行となり諸山に差遣されたが到る處功績が多かつた。先生讀書の外詩を能くし、俳諧を嗜み而して人と爲り英邁果決、同藩の士大夫中其の右に出づるものがなく、當時三本木を開拓して一大村落を創造した。深智宏量の新渡戸傳氏と併稱して兩雄の評あるに至つた。而も學才に於て勝る所ありといふ。

八宗兼學の内藤湖南先生

内藤虎次郎先生は湖南と號し、調一先生の次男として慶應二年五月廿七日毛馬内町に生れた。幼時から神童を以て稱せられ、明治十六年三月廿一日、秋田縣師範學校中等師範科に入學して俊秀の聞え高く、翌十七年四月、同校高等師範科三年級に補缺入學を許され、翌十八年七月には同校を卒業した。普通七ケ年（中等三年高等四年）かゝる學校を二年足らずで卒へたのである。その水際立つた進級振りには誰一人として、呆然たらざるを得なかつたといふ。入學當時の校長は屯野馬彦氏であり卒業當時に於ける同級生の英才には呂泣畠山吉造（岸田）、後藤祐助等がある。かくして任を北秋田郡綴子小學校に奉じたが、遊學の念やみがたく、廿年八月職を辭して東京に出て、大内青巒邸に寄宿し同氏の主宰する明教新誌に筆を執り傍ら苦學大に努めた。後雜誌「日本人」に或は萬朝報に執筆して文名大に著れ、日清役後、臺灣日報主筆に聘せられたが、歸來大阪朝日新聞の客員となり、篤學なる東洋史家として、明識なる支那通として、或は攻學に、或は時評に椽大の筆を揮つた。

明治四十年十一月京都帝國大學に招ぜられて東洋史の講座を擔任した。此間數次支那を歷遊し、或は珍本異書を蒐集し、或は大官高儒に出入して識見大に進み、次いで文學博士の學位を授けられ、支那學の世界的權威者として、天下に重きをなすに至つた。大正十五年八月、大學停年制の内規に依り依願免官となつたが、名譽教授として京大の學寶と稱せられて居た。又勅旨に依り帝國學士院會員を仰付けられ學界最高の待遇を受けて居た。大正十一年病を得一時重患を傳へられたが幸に全癒し、大正十三年六月長男乾吉君を伴ひて歐洲を巡遊し、英、佛、獨に於ける東洋研究の現狀を視察して翌十四年四月歸朝した。

著書には、近世文運論、涙珠唾珠、文學東漸史、近世文學史論、諸葛武侯、燕山楚水、支那論（大正三年著）日本文化史研究（大正十三年著）研幾小錄（昭和三年著）等がある。就中近世文運論は關西文運論と題し、大阪朝日新聞に連載して、文名をはせ洛陽の紙價を高めたるもの、支那論に至つては支那の共和制か、君主制か、領土問題、内政問題につき卓拔の識見を述べたもので名著の稱がある。

先年、宮内省圖書寮の藏書約二十萬冊の整理をなし、次いで京都御所内なる東山文庫の整理に當つた。同文庫は、平安朝の嵯峨天皇より、明治大帝に至る迄千有餘年間の、宸翰、御日記類が祕藏されてある一大寶庫である。これによつて史實の上に有力な資料が發見されたことは云ふ迄もない。

晩年京都府下相樂郡瓶原村の恭仁山莊に閑居し、讀書と著作とにいそしんで居た。此處は昔聖武天

皇の一時都を遷された處、白砂の流れ清き古名泉川の木津川が帶のやうに延びて、遠くは生駒、信貴金剛など大和の連峰が望まれ、山水の風景を繪にしたやうな眺めである。抑もこの地を選んだのは、王朝の史蹟に對するあこがれと、勝景の玩賞を擅にし得る爲めとであらうが、遠く都を離れて交通の便惡く、訪問客を避けるには屈强の場所であるばかりでなく、四萬卷にあまる藏書に對する愛惜の念から火災等にかゝるのを恐れたものだと傳へられる。眞にこれは學者らしい半面を物語るものであらう。昭和四年春四月德富蘇峰翁の湖南先生訪問記の一節を揭げて見やう。

上方の春色（恭仁山莊）東京日日新聞所載

四月十九日、昨日と打つて換りたる好天氣、午前八時半電車にて奈良に赴く。奈良見物のためではない、木津川畔なる恭仁山莊の內藤湖南翁を訪はんが爲めに、而して併せて其の珍書奇籍に見參せんが爲めに。（中略）

此邊聖武天皇の御宇、奈良より一時都を移し給ひし恭仁の故都址にて、其の道傍には、今尙ほ國分寺の伽藍の礎石が、歷々として存してゐる。我等は車を下りて、湖南翁の恭仁山莊に向つた。田の中の一本道、道の兩側には亭々たる櫟が相並んで列をなしてゐる。晩秋初冬の候は、正しく倪雲林畫中の趣があるであらう。予は櫟や楢の秋葉には偏愛がある。道傍には蒲公英や菫がおのがまに〳〵咲き亂れてゐる。我をして覺えず其の幾片を摘み取ることを禁ずる能

261189

はざらしめた。而して山腹には、七八の人家がある。其の中にて書庫らしき白塗の土藏と一軒の瀟洒たる板屋とが問はずして湖南翁の恭仁山莊たるを知つた。

× × ×

予の愛書癖は、若し湖南翁によりて創始せられたりと云はゞんば、少く共啓發せられた。今更ら書物に憂身をやつす我は、湖南翁に對して、恨めしくもあれば、將た感謝したくもある。

途中の道草にて、恰も正午となつた。岩井君の携へ來れる辨當を喫しつゝ、山莊の好景を領取した。莊は北に山を負ひ南面して建てられた。木津川は帶の如く莊前を廻りてゐる。當面の山、其の高きは春日山、其の低きは若草山、而して左方には笠置があり、右方には生駒がある。座ながらにして故都山川の勝を挹る。

湖南翁の藏儲は多きを須ひず、精美を主とす、而して其の中の帝王は、恐らくは唐人手寫說文殘卷であらう。此れは言葉通り海內の孤本である。但大意外なるは、文學の國を以て誇りとする、中華民國の語學者が、湖南翁をして此の奇寶を攫み去らしめたることだ。油斷大敵とはこの事であらう。此の一卷は唐人元和年間の手寫にして、南宋の高宗皇帝の御府に入りたることは、紙の繼ぎ目毎に捺したる紹興の朱章と、米友仁の跋文にて知る可く、而して後賈似道に歸したるは、秋壑の印記を以て徵すべく、明に至りて李東陽に歸し、清に至りて曾國藩の門客莫友芝に歸し、轉じて端方、

完顏、景賢を經て、湖南翁の手に入りたるもの。宋以後の來歷は、其の卷中所記によりて逐一審にすることが出來る。

其の中にも曾國藩の卷首の大字の題と、卷後の階行併せ書したる古詩とは我をして襟を正くせしめた。湖南翁の跋語は、實に明治四十三年、端方の需に應じて書したるものにて、翁は初見以來十有七年、夢寐忘るゝ能はず、景賢沒後、重價を投じて之を得た。然も其の之を北京より輸するには公使館の手を借りて漸く安全に之を受取るを得たといふ。翁に取りては十七年來の戀女房ともいふ可きもの、其の之を金屋に貯へんとする意氣込も亦た宜べなるかな。

其の他北宋槧修說文、宋槧史記二種、毛詩正義單疏本など、何れも日本は愚か、支那に於ても絕無僅有の諸珍籍、然も予に取りては多少の因緣あるもの。之に對して覺えず太息した。

毛詩正義には、金澤文庫の黑印がある。曾て古澤介堂氏より、井上世外侯に呈し、侯より竹添翁（進一郎）に與へたるもの。予が竹添翁の依囑によりて、その典籍全部を、故松方海東侯に移すや、翁は此の一部と漢書揚雄傳の古鈔一卷とを、特にその手元に留め殘した。而して紹興板の史記は曾て故大倉鶴彥翁が親しく之を携へ來りて、予の審定を請ひたるもの。然も鶴彥翁は、書肆と其の値を擬して協はず、却て湖南翁の手に歸したるもの、卽ち湖南翁としては、天下の富豪に打ち克ちたる戰利品とも云ふべきもの。而して他の宋槧單疏本史記は、故島田翰氏の所有にして、翰氏は屢々予に讓與せんことを約し、予はこれが爲めに翰氏より「此處まで御出て甘酒進上」の調子にて引きずられ來りたるもの。然も遂に其の行方を知らなかつたが、今や偶然相見て、其好主人を得たることを此書の爲めに衷心より慶賀した。

尙ほ其床頭には、宋畫の孔夫子及び七十二子の圖卷があつた。乾隆御覽の寶、若しくは三希堂鑑賞之印にて、其來歷は分明だ。描寫精巧、鬚眉生けるが如し。宋人の人物畫としては上乘に幾し。

× × ×

以て藏書の內容の一班を知ることが出來やう。「萬卷の書を擁して讀書三昧は羨ましい」と述懷した蘇峰翁の心境が併せて覗はれる。

湖南先生の令室は田口氏郁子、十四才の時上京して梅田雲濱の交友たる崎門派の學者山田時文が與風女學校に入つた。同窓には木內京都府知事夫人、澁澤子爵令姪等あり。劉向列女傳式の薰育を受けた後、三宅花圃女史に和歌を多田親愛翁に習字を習つた。杉浦重剛翁と竝稱された山田倉太郎自慢の女弟子であり、湖南先生に嫁して五男三女があつた。長男乾吉君は法學士、次男耕次郎君は文學士、三男戊申君は京大研究室に於て支那學專攻中であり、皆父君の學問上の後繼者と目されてゐる。

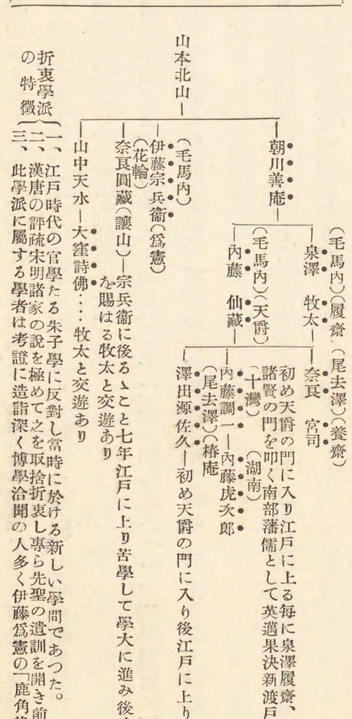
以上內藤家の學問經歷の一班を述べたが、何れも江戸時代に於ける折衷學派、就中山本北山、朝川善庵の學統を受けて穩健中正の思想を子弟に傳へた。卽ち伊藤爲憲翁の行動及び思想は、同氏の甥た

る泉澤牧太先生に大なる感化を與へたもの、如く、更に内藤仙藏先生の江戸遊學の機緣となつた。而して内藤湖南先生に至つては、伊藤、泉澤、内藤三家の學者の血を受けた上に更に三家の學統を瞑々裡に融合大成したものと言ふべきである。

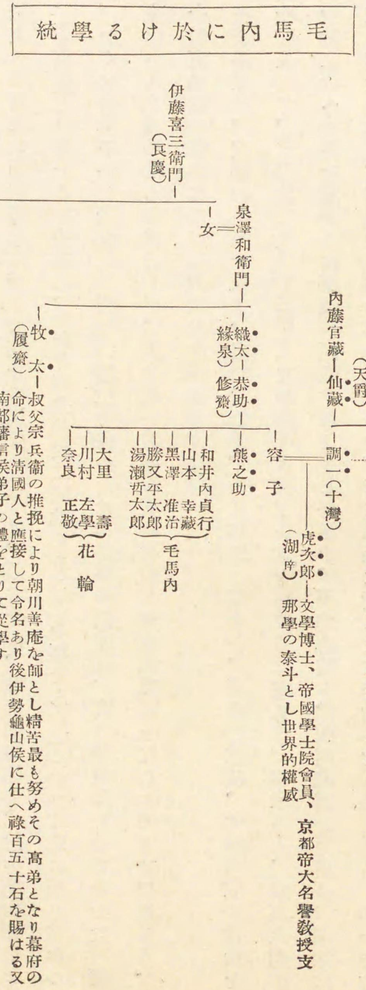
終りに臨み三家の血緣關係を見るに、伊藤爲憲翁の姉は、泉澤和衛門氏に嫁して織太（絲泉）、牧太（履齋）の二子あり、織太の孫卽ち恭助（修齋）の長女容子は調一先生（十灣）に嫁して虎次郎先生（湖南）あり、湖南先生の卓拔なる素質は箕作一家の如く正しく學者の血脈であることを立證するものである。

今三家の血統竝に學統を左に表出する。（學統は姓名を並記し、血統は名のみを記す。）

江戸時代に於ける折衷學派と鹿角郡の學統



毛馬内に於ける學統



江戸折衷派

湖南先生がその著「近世文學史論」に『文政天保以後、經學を以つて專業とする者、漸やく多落を

致す。松崎讓堂は洛閫を出で、漢魏に歸し、猪飼敬所古學の流れを承けて又該博を稱す。朝川善庵、東條一堂、徵引博涉を好む、要するに皆考據の學なり。』と論ぜられてゐる。所謂江戸派の折衷學派は、漢唐宋明諸家の說を折衷して穩當を旨とし、九代將軍家重の頃には大に世に歡迎された。其特徵とする處は、考證に流れ先生の謹嚴力行の風を缺く嫌ひもあるが、其の博學洽聞な點は元祿、享保の儒者に勝つて居る。十一代將軍家齊に至つて、老中松平定信が柴野栗山を用ひて朱子學に反對する學閥を異端視して異學の禁を出した。この禁令に反抗したのは、山本北山、龜田鵬齋等で、就中北山の如きは、「孔子學」を奉ずるを主張し、「何ぞ程朱の說に固執することを要せんや」といつて之に屈しなかつた。かく官學朱子學に對抗して獨自の地位を保つた此の學派の態度は、實に健氣なものであつた。湖南先生が八宗兼學巷の學徒として、氣を吐いた操觚者時代の文章亦此感なきにしもあらずであらう。

今折衷學派の學界に於ける立場及び系統を左に述べやう。

折衷學派は、經學の一派で朱子、陽明、古學、古文辭學に偏せず、漢唐の註疏、宋明諸家の諸說を取捨折衷して、專ら先聖の遺訓を闡き、又前修の及ばない處を匡するに務めた。和泉の人、榊原玄輔が紀伊侯に仕へて學を講ずるに學派を區別することを好まず、漢魏傳註と、宋明疏釋とを用ひ、訓話は馬鄭の舊說に據り、義理は程子の心性によつた。折衷學派は實に之に胚胎したものである。尋いで片山兼山、井上金峨が出て子弟を敎導するに、古註疏を始め博く漢宋以下諸家の書を極め、其の長を採つて衆說を折衷し最も穩當を主とした處から、折衷學派が起り、關東の學之れが爲めに一變するに至つた。次いで豊島豊州、賴山陽、山本北山、太田錦城、松崎慊堂等の諸家皆折衷學を唱導して世に顯はれた。朝川善庵、東條一堂等も此の派に屬するものである。今主なる學者を左表に揭げる。

- 井上四明
  - 井上蘭台
    - 井上金峨
      - 山本北山
        - 朝川善庵―泉澤履齋
        - 東條一堂
        - 蒲生君平
        - 山中天水―大窪詩佛
      - 井上南台
    - 八田華陽
      - 龜田鵬齋
        - 龜田綾瀨
        - 芳野金陵
  - 片山兼山
    - 小田穀山
    - 朝川善庵（兼山の實子で朝川氏を襲ひ山本北山の門に入る）
  - 小野君山

右の中、鹿角郡學者の師たる山本北山、朝川善庵及び東條一堂の略傳及び學風を述べて本篇を了へる。

山本北山

江戸の儒者なり名は信有字は天禧、北山は其號又奚疑翁、學半堂逸士、孝經樓主人、竹堤隱逸等の數號あり、通稱は嘉六、家世々幕府に仕ふ。北山夙に父を喪ひ獨り母と居る。初め山崎桃溪に句讀を受く是より常師なく、漢宋の學を講究し又堀川牛門の學を

修め、後に井上金峨が折衷說に服して其誨督を受く。北山家素より富饒常に奇書を購求して其學大に進む。年廿二孝經集說を著はして其名世に顯はる。故に金峨師道を以て之を遇せず、屢々勤むるに人の門牆に立つ可らざるを以てす。後竟に自ら一格を構へ經學は孝經を以て根據とし又は韓柳を以て標本とし、詩は淸新を以て宗派とす。是の時操觚の士物徂徠の餘風を承け詩文李王を宗とするもの尙盛んなり。北山因つて作詩志穀、作文志穀の二篇を作り大に李王を排擊す。其學は博　精該にして天文兵籍、五行、小說より醫卜道釋雜家技藝に至るまで講究せざるなし。四方の士風を聞き笈を負ひて其門に入るもの無慮數百人、家資富贍、最も藏書に富む。自ら其居る所に命して孝經樓と曰ふ。蓋し之を家學の據る所に取るなり。

北山名は幕府の仕籍に在りと雖も其人となり豪邁矯强、卑賤に居るを恥ぢ資餞を翰納して終身職に卽かず。寬政中柴野栗山幕府に召され大に學制を變じ程朱の學に非らざれば悉く目して異端とす。是時北山、市川鳴鶴、豐島豊州、塚田大峰、龜田鵬齋と五鬼の名を受く。然れ共斷然持說を主張して動かず。人其の堅志を稱す。文化九年五月十八日歿す。年六十一、白山本念寺に葬る。

私謚して述史先生と曰ふ。是より先き北山、學歷、籍甚、秋田侯禮を厚うして召見し屢々事を諮る。高田侯亦問ふに國事を以てす。北山藩政を輔くる其力鮮からず。是に至りて高田侯賻弔禮に越えたりと言ふ。

著はす所孝經集說、作文去殼の外、古文尙書考、易象義解、春秋禮志、論語說、學庸正義、經義撒說、經說、程朱異日、古今究源三禮古器考、正鄭異同辨苑、日本外史、日本事類集成、北辰考、文藻行潦、詩藻行潦、神主考、學術淵源考、養老考、錢帛考、衣冠考、學派考、義士雪寃書畫談、彼我經濟區別、官職通解補、其他三十餘種あり。子謹（字は公行綠陰と號す）嗣ぐ。（續近世叢談、事實文編、續讀家人物法、江戸名家墓所一覽等に據る）

朝川善庵

松浦侯の儒臣なり。名は鼎字は五鼎。江都の人父片山兼山原氏を娶り、三男一女を得多病にして中年に歿す。三子尙ほ幼、原氏依賴する所無し。乃ち遺孤を携へて醫人朝川默翁に適く。默翁四子を撫育すること所生の如し。最も其季を愛し親ら句讀を課す。季は卽ち善庵なり。年甫めて十二に及び、學を山本北山に就く。北山一見之を偉とし呼で神童と爲す。已に默翁善庵を拉し京攝間に遊び、交を諸名彥に結び居ること三年にして歸る。寬政戊午長崎鎭臺肥田豐州に從て長崎に赴き、又南肥薩摩を遊歷す。五年を經て歸る。學益々博く經業尤も精し、時に松浦侯其名を聞き之を延て厚く禮遇す。列侯贄を取つて學を受くる者十數藤堂氏、大村氏尤も親昵する處なり。文化十一年默翁卽世す。歿するに臨んで、遺言して曰く、汝は吾が生む所に非ず、實に兼山遺腹の子なり、今汝ぢ三十餘歲學已に成る。汝ぢ當に本姓に復し以て先業を續ぐ可しと。善庵之を聞て愕然始めて其生む所の父あるを知るなり。然れども默翁撫育の恩生む所に過ぐ、遂に固く請ひて終身朝川氏を冒す。乙亥の冬淸國海舶漂ひて豆州下田港に至る。異俗言語通ぜず下田は韮山縣令江川氏の管する處なり。善庵縣令の招に應じて筆語贈答し國體を辱しめず、帛金若干を賞賜す。弘化三年丙午閏五月幕府の召を辱うし謁を賜る世之を希世の榮と謂ふ。

嘉永元年十二月病に嬰り、翌年二月七日を以て終る。天明元年辛丑四月八日生今を距ること七十年。遺屬して北總葛飾郡小梅村常宗寺に葬る。遺孤及門人晋議し私に之を謚して學古先生と曰ふ。配春田氏男女子六人を擧ぐ、長は正準出て相田氏を嗣ぐ。次は格、字は天壽本姓に復し片山氏を稱し夙世す。第三子歿す。因て大聖寺藩橫江成美の子を養ひて嗣と爲し、次女を以て之に配す長女は各務氏に適く。第三女は堀川氏に適く。善庵惟を下し敎授年あり。初め筮仕に意なし。松浦侯の舊契あるに感じ翻然褐を釋きて起つ。是に於て侯侍するに重臣の禮を以てし、政事に參與せしむ。資する所甚だ尠からず善庵の長崎に遊ぶや太宰府を過ぎ、鼈を買ひて客舍に至り主人をして之を解かしめんとす。主人天滿神の祭日たるを以て辭す。善庵止むを得ず之を薦に包み臥床に置く。鼈夜半に至り薦を破りて縱橫爬行し衣衾盡く汚す。後善庵之を十返舍一九に語る。一九之を借り、膝栗毛に作るといふ。（愛日樓集）

東條一堂

湖南先生の家　と學統「江戸折衷學派」

上總の人、初め京地に入り、諸名家の門を叩き、苦學勉勵二十二江戸に歸り、朝川善庵、佐藤一齋、尾藤二洲と來訪親交す。後弘前藩に聘せられ、江戸お玉か池に塾を開くに及び諸侯禮を厚くして賓師とせり。一堂は考證學に詳しく經史、詩文に通じ名儒として天下に鳴る。安政四年七月十三日病を得て歿す。年八十。

西園寺公と湖南先生の因緣

湖南内藤虎次郎博士は前述の如く、慶應二年七月十八日、舊南部藩儒十灣内藤調一先生の次男として、秋田縣鹿角郡毛馬内町大字毛馬内に孤々の聲を擧げた。

陶庵西園寺公望公は、嘉永二年十月廿三日の誕生であるから、湖南先生とは十九年の間隔があり、時に正三位右近衞權中將に敍せられてゐた。幕末維新の風雲に際會して、北越會津方面に出征し、兵火の洗禮を享けた清華の嫡流と十和田湖畔、一儒者の次男として生れた湖南先生とは何等の關係もないやうに思惟される。が、「諸事總て神武帝創業の始に原き、攝紳、地下、堂上、武辯の別なく至當の議をつくし、天下と休戚を同じくせらるべき叡慮につき、各々勉勵して舊來驕惰の汚習を一洗し云々」の明治維新の大政は、世界の歷史に於ても偉大なる改革、驚異的飛躍的發展を遂げた近世日本の啓沃であつた。

西園寺公が古來の因襲を改むるとか、門閥打破の急進的思想は、素より天賦の英資にも因るが公の師事した維新の三傑、木戸孝允の感化を見脫してはならぬ。

木戸が明治政府樹立の後、各藩の英雄豪傑未だ封建の殘夢を貪る裡に、廢藩置縣の論を唱道して中

央集權の君主政治を實施せんとしたことは、よしその首唱者ではなかつたにしても、維新の洪業を補翼した一人者に幾かつた。而して木戸より以前、已に廢藩置縣の建白をした南部藩は、姫路藩と共に驚天動地此の議論を主唱した先驅であり、薩長土肥の四藩にその功名を讓つたがとにかくかゝる時流に抽んでた思想議論は、實に湖南先生を生んだ鹿角郡學統の建白にかゝつたものとすれば、西園寺公と湖南先生の因緣は、牽強附會とは云へ靈犀一點、一脈相通ずる因果關係を見出すではないか？

湖南先生は明治十六年三月、秋田縣師範學校に入學したが、西園寺公は再度の外遊より歸朝して、その年九月には參議伊藤博文と共に福島縣下へ出張した。

かの陸奥宗光が明治十年の亂、高知の獄に繫がれて宮城監獄に在つたのを、特赦させた西園寺公の聲名は湖南先生も已に、知悉してゐたに相違ない。秋田師範在學中、漢文は上級生を凌駕し稀らしくも、學校騷動（ストライキ）の起つた際時の縣令に呈出した學生の意見書は、實に湖南先生の草案に成つたものであるといふ。

今、その一斑として鷲尾溫軒氏の父慶助に送つた「送序鷲尾君」の漢詞を引用して見やう。

送
鷲尾君序

蓋古者送人以言不以貨今吾鷲尾君之業竿而歸也吾國羈旅而窮是其義宜言以贈之雖然勢有不可者焉夫君之年固長乎吾而聞道亦先乎

吾則其於德興業精乎吾不待言矣矧乎吾與君同修師範之氣所事同而修有先後則吾欲鼓百吻以益乎君其言之不足以起君也審矣顧君之鄉爲山々木々之地東非負山峯巒蜿蜒蒼翠如螺髻西南控湖海而米白一流橫絕於其中夾彼風雨怒號狂濤奔馬與水天一髮夕日浴波以至烟波沙鷗如隱如顯棹歌櫓聲相如互答於洲渚芦荻之間其爲趣無不備焉而桑湖雪漁尤爲奇觀十里湖水一白凍合漁子作隊捕魚望之如鵝群且聚且撒吾嘗數往來矣其際盡其勝概今君之歸也其亦過而觀之矣而到家也

則老親在堂妻兒候門而且司敎於山靈水秀之鄉俊手振之其樂將不可言廼於此時也願而過思一劍飄然呻吟客寒霜月欲仰布衾如鐵短檠明滅對黃昏之時其於爲情時何如哉俚謠云離愁今夜燈前託舊愁必無已乎請擧此語以爲贈

明治乙酉二月　　內藤虎次郎

時に明治十八年、湖南先生十九歲の作である。山方香峰、中村木公等と學校騷動の起るや、縣令に宛てた建白書も實に先生の草稿に成り、老成已に一家をなしてゐたことが察知される。湖南先生の反面として縱橫の術策家であつたことは、中村木公の衆議院議員立候補の推薦狀でも判明するが、その俑因は秋田師範在學中に於て萌芽してゐた。

明治十八年七月、秋田師範を卒業した湖南先生は、綴子小學校訓導となり廿年八月まで村夫子の生活をしてゐた。

その敎育方針を覗ふ資料として先生が、黑頭尊者のペンネームで「淚珠唾珠」を著した文中に曰く

『曾て聞く小學教育の科、人物査定なる者あり、其業を卒ふるに當りて、其人物を査定して優劣證書を與ふ。亦甚だ僭せりと云ふべし。渠ぞ知らん、其の今日に於て劣等の證書を受くる者、異日出類絶倫の偉業を成す者にあらざるを烘冬夫子、豈盡く世の英雄を認知せんや。知らず此等の兒戯今尚ほ存するや否や。』

とある。湖南先生自身、烘冬夫子と揶揄した小學訓導の教職は、到底先生をしてあたら一生を片田舍で朽ち果つべきでないと決心させた。

明治廿年九月、笈を負ふて上京し、大内青巒居士の門に入つた。青巒居士は舊仙臺藩士、大槻磐溪の高弟で名は退、本願寺門跡明如光尊法主の左右に侍して宗教社會事業家として知られてゐた。共存同衆や尚學會樂善會等を興し訓盲啞院長となつたこともある。が、「あけぼの」「江湖新聞」を創刊し湖南先生には「明教新誌」の編輯を手傳はせてゐた後、秀英社長、東洋大學長となつた佛教哲學界の大家である。

青巒居士が窮迫中、英佛書林に身を寄せ萬巻の書を讀破したことは、湖南先生の苦學とその規を一にする所があつた。

先生は「明教新誌」編輯の傍ら、英人サンマース及び米人イーストレーキに就て英語を學んだが、之れは大村益次郎の意見に依り佛人プウセーに就て、佛語を習修した西園寺公と相似してゐる。

廿三年九月、志賀重昂の命に依り太田伊八主宰の岡崎市三河新報社の創立に赴いた。が、貧書生であつた先生は同僚と相談して一つゞつ羽織と袴を作り、交互に流用してやつと公式の訪問着とした始末。月給はそれでも當時としては驚くべき破格の三十圓であつた。新聞記者として第一歩を踏み出した湖南先生は往時の苦難時代を想起し、後の代議士早川龍介等を始めよく部下を愛撫されたが居ること三月、遂に筆禍のため太田伊八の投獄されるや之れに殉じて退社された。かくて廿六年十一月までは東京に在り雜誌「日本人」及び「亞細亞」の編輯に三宅雪嶺、陸羯南等の下に從事してゐた。

其間西園寺公は特命全權公使として、塊獨に在りローマ法王、獨帝カイゼル等と樽俎折衝、前後通算十九年間の外遊中行雲流水、淡然たる性情に一層の磨きをかけて識見透徹、視野限界を世界の大勢に廣めたことは、前述の「陶庵隨筆」の如くである。

明治廿七年湖南先生は自恃高橋健三に見出されて、大阪朝日新聞に入社、二年間椽大の快筆を揮つた。「近世文學史論」の前著「關西文運論」は、實に此の間に於てゞあつた。

毎日羊羹色の紋付羽織に、ひだのとれたよれ〳〵の破れ袴を引摺つて、のそ〳〵と編輯室に入つて來るが、その筆になる名論卓說は大朝の社說をして一世の權威たらしめたのである。

湖南先生を推挽した高橋自恃が、官報局長として才腕を揮ひ、野に下つて、諤々の日本主義を鼓吹したことは、喋々を要せぬが今、先生の筆になるその爲人を想見して見やう。「自恃言行錄」中の一節

に曰く

『君、官を辭してより根岸に僑居す。再び大阪に赴くに及び夫人も亦尋ね往き、中之島に寓す。此よりその議論の大阪朝日新聞に出づる毎に、世擧つて快睹先を爭ひ、四五月の交、俗論名目說を出し、法治國、個人主義、立憲政體、實利主義に關して世人の迷論を指摘し、大抵近事一代に氾濫せる利己拜金、死法株守の妄想を排斥し、卓然として時流に拔く、大阪朝日新聞はもと插畫通俗を主とし、その發行額全國に冠たりしも、しかもその品格に至りては、則ち甚だ高きこと能はず。君が客員となり、その編輯の顧問に備はりしより頗る猥瑣の弊を去り、務めて事情の確實迅速を主とし面目頓に革まり、しかる後その政治上に於ける勢力隱然として興隆し、關西新聞の牛耳を執れり。』とある如く、その論旨警拔にして操觚界の異彩と稱せられた。

此時伊藤內閣は、陸奥宗光を外相に任じ、復た條約改正の計畫あり、內地雜居の得失は最も世人の注意する所であつた。之れ維新當初の懸案たる治外法權の外人橫暴を制する目的である。

高橋自恃は神戶雜居地の狀態を綿密に調査研究して、「內地雜居論」を大朝に廿回も連載し、日本帝國の威嚴を保持せねばならぬと主張した。偶々神鞭知常、安部井磐根等が「大日本協會」を組織するや、彼は大阪より上京してこの愛國的對外硬運動に參劃した。

第五議會に現行條約厲行建議案を提出したその理由書は、實に湖南先生の起草に成り、伊藤內閣はその運動に畏怖して、彼等を目し注意人物となすに至つた。

第六議會に於て自主的外交、責任內閣論を主唱し彈劾上奏案を以て、政府に肉迫したが、解散となり三度第七議會に、正々堂々の對峙をせんと全國的に活動を開始した。

當時、東に「日本」西に「朝日」と稱せられ、對外硬派萬丈の氣焰を上げた高橋門下に、內藤湖南あり矢面の伊藤內閣に文相として西園寺公あり、有名な「國民氣象論」で非難攻擊の的となつた西園寺文相が、湖南先生の筆鋒を知るや知らずや三國干涉と共に第九議會に至つて流石の、伊藤內閣も遂に總辭職したのである。

高橋自恃は史蹟調査のため、湖南先生の故郷秋田に旅行中であつたが、「日本」新聞の陸羯南より招電一閃、直ちに歸京して松隈內閣の成立に周旋し書記翰長に擧げられた。而してその施政方針は實に湖南先生の筆に成り、「廿六世記」誌上の「宮內大臣論」筆禍を買ふや、法制局長官神鞭知常と共に廉潔剛正の資材を以つて、諤々の硬論を吐いたが、遂に閣內不統一に陷り閣僚を輔佐したが甲斐なく、僅々一年餘にして松隈內閣は瓦解した。それに先つて兩人は辭表を提出して閣外に去り其出處餘裕綽々たるものがあつた。

湖南先生は此間、許婚の田口郁子と結婚し「近世文學史論」「諸葛武侯」「涙珠唾珠」の三著を以て、文名を江湖に馳せた。明治三十年臺灣日報社に入社、總督兒玉源太郎大將、民政長官後藤新平等に、

新領土經營を献策する所あつたが、卅一年歸京して黒岩涙香の「萬朝報」に主筆となつた。高橋自恃は固疾の肺患漸く重り、此年七月小田原の僑居に沒した。年四十四まことに哀惜の限りであつた。

湖南先生は早速、哀悼の辭を綴り萬腔の雄圖人と共に空しと吊辭した。（明治三十一年七月廿三日、萬朝報千七百十七號所載）

高　橋　自　恃

湖　南

鳴呼吾先輩高橋自恃の如きは、滔々たる今世に在て、眞士夫の風格を具へたる者といふべし。日本倶樂部、法典延期、條約厲行凡そ此等の議論と、其日本思想、日本技術を愛するの性情とは、人をして動もすれば偏辟の誤解を來さしむるも、而もその實矯枉の意に出たる者亦すくなからず、克巳の念に熾にして、守道の志に篤く、其至極の理想は、人道の維持に在り、居常此を以て其知友に語り其後進を導けり。かの私産治めず、而して公務清廉に、野に下りて大阪に在ること數年、士の東西行する者、必ず過訪して其議論を聞くを榮とし、名聲隱然として朝野を動かし、松方内閣に翰長として、其去就を以て内閣の盛衰に繫け、涅すれども緇まず高風群を拔きしが如き、蓋し皆かの性行の反映のみ。

肺を患ふること數年、近ごろ痾を小田原に養ふ。今年七月廿二日遂に起たず、遺命して厚葬するなからしめ、且つ其死を以て特に親知に報ずるに止めしめ、葬儀未だ畢へざるに新聞に廣告するを禁ず、廿四日之を染井に葬る。遠近傳聞して會葬する者數百人、其素より養ふ所の後進が組織にかゝる同窓會員の祭文は由て粗ぼ其爲人を窺ふべき者あり。其文に曰く　鳴呼先生の世に在すや先生に於て何の憾とすべきかあらん名天下に在り望一代に隆く、士の節義を道ふ者其面を識らざるを以て恥と爲し志の社稷に存する者其論を與かり聞きて以て疑を決す。未だ其位に當らずと雖も公輔の器は世の許す所、苟も一度其人に接すれば、儒雅の風人誼るゝ能はず情高の品致鶴を鷄群に放つが如く俠義の性行毎に人を水火の中に拔く。國を憂ふること忡々事に當りて蹇々病の躬に在るを顧みず、終に積て而して世を早くせらるゝことを致せり。

鳴呼哀哉先生の館を捐てらるゝや吾輩に於て誠に已み難きの悲あり。耳提面命恍として猶聲音を聞き誘拔鞭策儼として猶典型を存す。之が爲に方を示し錢を示して而して人生の行路を啓かれたり。浴恩の日年十餘を閱し同窓の會員五十に垂んとす。忽ち溘亡に遭ふて盡く師表を喪ふ夜徑燈を失ふが如く再行柁を折るが如く誰に適て正に就き焉に從て教を奉ぜん鳴呼悲哉、染井の郊、佳城、鬱々先生玆に宅し、毅魄凜々翼くは英靈常に後世の裏を誘き遺範をして失墜の患なからしめ、館を捐てらるゝの後と雖も猶世に在すの日のごとくならんことを鳴呼哀哉尚饗

明治三十一年七月廿四日　　高橋同窓會員

吾嘗て其知遇を受け悵惟に侍すること數年、將さに別に私傳を撰せんとす。姑らく其一端を擧げて以て世人に告ぐ。其人を識る者は、當さに吾辭の決して過當に非ざるを知るべき也』と。

高橋自恃の逸話として彼が文福茶釜の殿様、秋元興朝子の侍讀より身を起し伊藤博文と衝突して官報局長を辭するまで根岸の里に住んでゐた。ある時藤田隆三郎、岡倉覺三、巽庭與三郎と根岸黨の四人で重箱肴を携へ大きな瓢箪を提げ闇の夜に上野公園へ行き、提灯もつけず酒宴を張つたことがある。當時世に行はれた、東海散史柴四郎の著「佳人の奇遇」をまじつて『今夜は實に佳人の奇遇だ。ソレ與三郎、隆三郎、覺三、健三だらう。四人の名殘らず三の字がついて居るなんぞ、頗る妙ではない

か』といふので、大いにメートルを上げ天心、篁村の酒豪杯盤狼籍—とう〳〵醉余篁村饗庭與三郎は墓地の崖邊より落ちて大怪我をしたといふ。

日清の役「大阪朝日」より特派員として從軍した、西村天囚の舍弟が朝鮮で死沒した時、その追悼會の席上、湖南先生が自恃の祭文を朗讀したが、追悼の文句は一言雙句もなく全く遼東還附の攻擊であつた。

たゞ結尾に『尙方の劍を乞ひ得て佞臣の頭を斬らば、黃泉の下君が魂魄を慰むるに足らん』とあつたので、臨場の警部啞然としてたゞ眼許りパチクリさせてゐたといふ。

一說には村山龍平に借錢を濟すため、大阪朝日に入社したとも傳へられてゐるが、外遊中佛國サリノニ式輪轉機の購入と共に內藤湖南の論說委員招聘は大成功であつたのである。

「當今の新聞記者」と題する萬朝報（明治三十四年十一月十八日）に湖南內藤虎次郎先生として『古人云ふ、胸に萬卷の書を藏し、目に天下の奇山水なくんば、未だ必しも文を善くせずと、若し現時の新聞記者中、萬卷の書と天下の奇山水とある者を求めば、先づ指を先生に屈すべし。先生の書を好む渴するが如し、海內在る所の典籍大概目を經ざるなく、其讀書常に燭を執つて晨に次ぎ冗々として倦まず、而して平生暇あれば則ち書肆及び知人の家を涉獵して、未見の書を求む。友人皆な曰く、予等の負債は大抵酒樓旗亭に負ふ。唯り湖南に至つては常に債を古本屋に負ふと、以て其の一斑を推すべし。先生國文に通じ、英文に通じ詩歌を善くし、書に巧みに、兼て美術　好みて鑑識に富む。多才といふべし。然れども先生の特長は其の漢學にあり、其支那に於ける一切の文物典章地理風俗と及び近代の實情形勢に曉通せるとは、從來漢學者流が唐宋以前の經家史學の狹小なる範圍に跼蹐たるの比にあらず、一昨年其淸國に遊歷するや、其の學術更に一段の造詣を深くせり。故に先生の東亞の事を論ず、言皆な根據あり鑿々肯綮に中る。若し夫れ其文章の勁鍊雅健に至つては、當代比肩する者稀なるべし。先生、矯少にして風采甚だ揚らずと雖も、溫厚の君子人にして、其人を待つ、藹然として親しむべし。羽後の人、年齡三十七、八、現に大阪朝日新聞に在り。』筆者を詳にせずと雖も湖南先生の操觚者たる面目を描いて、遺憾なきものと謂へやう。

湖南先生の「淚珠唾珠」に破壞期の兒子と題し『革命の兒子、ナポレオンは新時代の母として、十九世紀產出物の多分は、彼に由りて胎化せられたり。彼の破壞期、二十年來是れなり。破壞期の兒子、誰某は亦當さに我が新國家の母にして、邈佶烈の祈、吾も亦之を爲さん』の一文があるが、高橋自恃は伊藤博文と衝突して野に下り、西園寺公はフランス留學後「東洋自由新聞」を發刊して、遂に勅裁を以つて參事院に祭り込まれた破壞兒である。

明治廿四年九月、賞勳局總裁となつた西園寺公は傍系の地位に在つて、伊藤內閣を援助したが、外務大臣陸奧宗光の命を受け朝鮮へ特使となつたことがある。

日支の風雲が急になつて、明治二十七年七月二十五日、豊島沖の海戦で日清戦役の幕は切つておとされた。西園寺公はその八月朝鮮へ特派使節として派遣せられ、重要な外交的手腕を揮ふことになつたのだ。朝鮮の李王や大院君は、表面は日本にたよつてゐるやうでも、内心は大國の支那を恐れて、態度がしごくあいまいであつたから、日本を信頼させなくてはならなかつた。公の使命はそれであつた。その時の話も陶庵隨筆の中にある。

『二十七年、夏秋の交、余欽命を奉じて朝鮮に入るや、大院君切りに余を促がして、當今の務を問ふ。余縷々として改進の道を說くや、彼略ぼ諾するが如き面色にて聽問せしが、余が朝鮮道路疎惡にして、交通に便ならず、爲めに開物、成務、智識傳播の妨げたるを論じて、其修繕の急務なるを云ふや、彼れ之を遮つて曰く、朝鮮の疎惡は命の如し、獨り其岩石崔嵬にして開斬し難きを如何せんと。余之を穿つに火藥あり、ダイナマイトあり、其甚だ容易なるを云ふや、彼懼然として曰く、閣下果して眞に岩石開斬せんことを告げられるか、それ岩石は一國の骨髓なり、人にして骨髓を穿つそれ豈久しきを得んや、と彼の容體は甚だ眞面目なりき』と。

爾後公は頑迷なる保守論を唱ふ者に出會ふ毎に、「彼も亦岩石國髓論であると冷評された。然しながら大院君は蘭の畫が中々上手で殆んど作家の域に達してゐた。公が蘭の好きであることを知つた大院君は、自畫の蘭數幅を贈呈した。その畫幅には

「應陶庵臺大蘭政恭祈崇鑑指繆、韓京先生」と記るし「楊柳風、梧桐月、芭蕉雨」の印が捺してあるといふ。（竹越三叉氏著に據る）

西園寺公は旅裝を解く間もなく、明治廿七年八月文相に任ぜられた。當時自由民權と歐化主義の反動として、思想上の鎖國主義が行はれ、前文相井上毅が頻りに擬古文を奬勵したので教育界は保守黨の巢窟たるの觀を呈してゐた。公が文相就任後間もなく各府縣の師範學校長を集め、一場の訓示をしたが世界の大勢と共に教育も所謂「國民氣象論」に依り推移すべき演說は頗る一世を驚かして遂に物議を醸したのであつた。

その要旨は　一、科學教育の必要　二、英語の普及を圖り國語教育は多少減じても可なり　三、修身科より逆境非常時的教材を除くこと　四、女子教育の奬勵にあつた。『國民の氣象よろしく爽快活潑でなければならぬ。無暗に慷慨悲壯になつてはいけない。宜しく正大有爲なるがよい。世界の大勢上偏曲奇癖であつてはならぬ。人間は當然に欣然たるが百經の本源である。』といふので、就中『世間往々衰世逆境の人を模範として、今日の青年子弟に遷式せしめんと欲するものあり。是れ害を他日に殘すものにして、國家今日の隆盛に背馳するものと云はざるを得ず、諸君は常に此に注意し、且つ廣く世界列國の趨勢に鑑みて、文明の消長する所を察し、以て我國の教化を翼贊せられんことを望む。』とあつたのが、主として攻撃の目標となつた。